千葉ニュータウン
埋蔵文化財調査報告書 ＸＸⅡ

－印西市泉北側第１遺跡・大森割野遺跡
・割野所在野馬土手・武西近隣遺跡－

平成22年３月

独立行政法人都市再生機構千葉地域支社
千葉ニュータウン事業本部

財団法人　千葉県教育振興財団

千葉ニュータウン
埋蔵文化財調査報告書 ＸＸⅡ

－印西市泉北側第１遺跡・大森割野遺跡
・割野所在野馬土手・武西近隣遺跡－

序　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを目的とし、昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第634集として、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社の千葉北部地区新住宅市街地開発事業関連に伴って実施した印西市泉北側第１遺跡・大森割野遺跡・割野所在野馬土手・武西近隣遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器をはじめ、縄文時代の遺物包含層・弥生時代の住居跡や近世野馬土手が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成22年３月

財団法人　千葉県教育振興財団
理事長　篠塚　俊夫

凡　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による千葉北部地区新市街地造成整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県印西市に所在する泉北側第１遺跡（遺跡コードCN624）・大森割野遺跡（遺跡コードCN623）・割野所在野馬土手（遺跡コードCN620）・武西遺跡（遺跡コードCN509）である。

3　発掘調査から報告書刊行に至る業務は、独立行政法人都市再生機構（住宅・都市整備公団、さらに都市基盤整備公団から名称変更）の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団（旧財団法人千葉県文化財センター）が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は、第１章～第４章を香取正彦、第５章を高橋博文が行い、編集は高橋博文が担当した。

6　発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部及び印西市教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地図は、下記のとおりである。

第１章第１図　国土地理院発行　1/25,000地形図「白井」（NI-54-19-14-3）

第１章第１図　国土地理院発行　1/25,000地形図「小林」（NI-54-19-14-1）

第２章第２図　千葉県企業庁千葉ニュータウン事業部（当時）1/1,000千葉ニュータウン平面図（平成２年測量　平成４年修正）

8　周辺地形の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年３月（図版１）及び昭和58年１月（図版39）撮影のものを使用した。

9　本書で使用した座標値は、旧日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。

本文目次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の経緯と経過……1
　第２節　遺跡の位置と環境……4
第２章　泉北倒第１遺跡……5
　第１節　調査の方法と概要……5
　第２節　基本層序……5
　第３節　遺構と遺物……9
　　１．旧石器時代……9
　　２．縄文時代……11
　第４節　小結……17

第３章　大森割野遺跡……18
　第１節　調査の方法と概要……18
　第２節　基本層序……18
　第３節　遺構と遺物……21
　第１地点……22
　　１．旧石器時代……22
　　２．縄文時代……34
　第２地点……53
　　１．旧石器時代……53
　　２．縄文時代……56
　第４節　小結……77

第４章　割野所在野馬土手……78
　第１節　調査の方法と概要……78
　第２節　遺構と遺物……78
　第３節　小結……85

第５章　武西近隣遺跡……86
　第１節　調査の方法と概要……86
　第２節　基本層序……86
　第３節　遺構と遺物……90
　　１．旧石器時代……90
　　２．縄文時代物……118
　　３．弥生時代……120
　　４．古代・中・近世……132
　第４節　小結……138

抄録……巻末

挿図目次

泉北側第１遺跡

第１図　遺跡の位置と周辺地形図
第２図　泉北側第１遺跡と周辺地形
第３図　上層全体図・確認トレンチ
第４図　下層全体図・確認グリッド
第５図　グリッド呼称図
第６図　基本層序
第７図　第１地点石器出土状況図
第８図　第１地点出土石器
第９図　001号土坑
第10図　遺構外出土縄文土器の分布
第11図　遺構外出土の縄文土器（１）
第12図　遺構外出土の縄文土器（２）
第13図　遺構外出土の土製品・石器

大森割野遺跡

第１図　基本層序
第２図　大森割野遺跡と周辺地形
第３図　上層全体図
第４図　下層全体図
第５図　第１地点石器出土状況図
第６図　第１地点出土石器（１）
第７図　第１地点出土石器（２）
第８図　第１地点出土石器（３）
第９図　第１地点出土石器（４）
第10図　第１地点出土石器（５）
第11図　第１地点出土石器（６）
第12図　第１地点出土石器（７）
第13図　001・002号土坑
第14図　礫群群等出土状況図
第15図　石器製作跡・阿玉台式土器出土状況図
第16図　第１地点出土土器（１）
第17図　第１地点出土土器（２）
第18図　第１地点出土土器（３）
第19図　第１地点出土土器（４）
第20図　第１地点出土土器（５）
第21図　第１地点出土土器（６）
第22図　第１地点出土土器（７）
第23図　第１地点出土土器（８）
第24図　第１地点出土石器（１）
第25図　第１地点出土石器（２）
第26図　第１地点出土石器（３）
第27図　第１地点出土石器（４）
第28図　第２地点石器出土状況図
第29図　第２地点出土石器（１）
第30図　第２地点出土石器（２）
第31図　単独出土の石器
第32図　第２地点出土土器（１）
第33図　第２地点出土土器（２）
第34図　第２地点出土土器（３）
第35図　第２地点出土土器（４）
第36図　第２地点出土土器（５）
第37図　第２地点出土土器（６）
第38図　第２地点出土土器（７）
第39図　第２地点出土土器（８）
第40図　第２地点出土土器（９）
第41図　第２地点出土土器（10）
第42図　第２地点出土土器（11）
第43図　第２地点出土土器（12）
第44図　第２地点出土土器（13）
第45図　第２地点出土土器（14）
第46図　第２地点出土土器（15）
第47図　第２地点出土石器（１）
第48図　第２地点出土石器（２）
第49図　第２地点出土石器（３）

割野所在野馬土手

第１図　割野所在野馬土手周辺地形図
第２図　001号野馬土手平・断面図
第３図　003号野馬土手平・断面図
第４図　野馬土手関連出土遺物（１）
第５図　野馬土手関連出土遺物（２）

武西近隣遺跡

第１図　武西近隣遺跡周辺地形図
第２図　確認調査状況図
第３図　下層本調査位置図
第４図　基本層序
第５図　石器集中１出土状況（器種別・石材別）
第６図　石器集中１
第７図　石器集中２出土状況（器種別）
第８図　石器集中２出土状況（石材別）
第９図　石器集中２（１）
第10図　石器集中２（２）
第11図　石器集中３出土状況（器種別・石材別）
第12図　石器集中３
第13図　石器集中４出土状況（器種別）
第14図　石器集中４出土状況（石材別）
第15図　石器集中４（１）
第16図　石器集中４（２）
第17図　石器集中４（３）
第18図　石器集中４（４）
第19図　石器集中４（５）
第20図　石器集中４（６）
第21図　石器集中４（７）
第22図　石器集中５出土状況（器種別・石材別）
第23図　石器集中５
第24図　石器集中６出土状況（器種別・石材別）
第25図　石器集中６
第26図　単独１出土状況（器種別・石材別）
第27図　単独２出土状況（器種別・石材別）
第28図　単独３出土状況（器種別・石材別）
第29図　単独出土・遺構出土旧石器時代石器
第30図　上層遺構検出状況
第31図　012号・025号陥穴
第32図　009号住居跡・遺物出土状況
第33図　021号住居跡
第34図　022号住居跡
第35図　023号住居跡
第36図　024号住居跡
第37図　009号住居跡出土遺物（１）
第38図　009号住居跡出土遺物（２）
第39図　021号住居跡出土遺物
第40図　022号住居跡出土遺物
第41図　023号住居跡出土遺物
第42図　024号住居跡出土遺物
第43図　グリッド出土遺物
第44図　縄文時代石器
第45図　010号溝
第46図　出土陶磁器等
第47図　出土磁器
第48図　出土銭貨

表　目　次

第１章　はじめに

第１表　泉北個第１遺跡発掘調査・整理の経過
第２表　大森割野遺跡発掘調査・整理の経過
第３表　割野所在野馬土手発掘調査・整理の経過
第４表　武西近隣遺跡発掘調査・整理の経過

第２章　大森割野遺跡
第１表　第１地点旧石器時代出土石器観察表
第２表　第１地点縄文時代出土石器観察表
第３表　第２地点旧石器時代出土石器観察表
第４表　第２地点縄文時代出土石器観察表

第３章　武西近隣遺跡
第１表　旧石器時代石器観察表
第２表　弥生時代土器観察表
第３表　出土銭貨計測表

図版目次

図版１　航空写真　①泉北側第１遺跡・②大森割野遺跡・③割野所在野馬土手・④泉北側第２遺跡・⑤泉北側第３遺跡

泉北側第１遺跡
図版２　１、調査前風景　２、遺物出土状況（北から）３、遺物出土状況（南西から）４、001号土坑全景　５、石器出土状況（南から）６、石器出土地点付近の層序
図版３　出土土器（１）
図版４　出土土器（２）
図版５　出土石器

大森割野遺跡
図版６　１、3I-00グリッド周辺遺物出土状況（南から）２、３J-00周辺遺物出土状況（南西から）３、001号跡全景　４、002号跡全景
図版７　１、２J区石器出土状況（南から）２、２K区石器出土状況（東から）３、３J-06グリッド周辺礫群出土状況（東から）
図版８　１、3F-00グリッド周辺遺物出土状況（南西から）２、７F-00グリッド周辺遺物出土状況（北から）３、５H区トレンチ遺物出土状況（東から）
図版９　１、８H-00グリッド周辺遺物出土状況（北から）２、同上（南西から）３、同上（西から）
図版10　１、8G-00グリッド周辺遺物出土状況（北西から）２、同上（北から）３、９G−05グリッド周辺遺物出土状況（西から）
図版11　１、９G-50グリッド石器出土状況　２、同上付近土層断面　３、９F-57グリッド石器出土状況　４、同上付近土層断面
図版12　第１地点・旧石器時代石器群（１）
図版13　第１地点・旧石器時代石器群（２）
図版14　第１地点・旧石器時代石器群（３）
図版15　第１地点・旧石器時代石器群（４）
図版16　第２地点・旧石器時代石器群
図版17　第１地点・出土土器（１）
図版18　第１地点・出土土器（２）
図版19　第１地点・出土土器（３）
図版20　第１地点・出土土器（４）
図版21　第１地点・出土土器（５）
図版22　第１地点・出土土器（６）
図版23　第１地点・出土石器（１）
図版24　第１地点・出土石器（２）
図版25　第２地点・出土土器（１）

図版26　第２地点・出土土器（２）
図版27　第２地点・出土土器（３）
図版28　第２地点・出土土器（４）
図版29　第２地点・出土土器（５）
図版30　第２地点・出土土器（６）
図版31　第２地点・出土土器（７）
図版32　第２地点・出土土器（８）
図版33　第２地点・出土土器（９）
図版34　第２地点・出土土器（10）
図版35　第２地点・出土石器

割野所在野馬土手

図版36　１、001号野馬土手近景（南から）　２、同上調査状況（南西から）　３、003号野馬土手調査状況
図版37　１、001号野馬土手東端部（北西から）　２、同左盛土断面C－C′（東から）３、同上盛土断面B－B′（東から）　４、同上盛土断面A－A′（東から）５、同上盛土断面（南から）６、002号野馬土手盛土断面（東から）７、003号野馬土手盛土断面A－A′（南から）８、同左盛土断面B－B′（東から）
図版38　野馬土手関連出土遺物

武西近隣遺跡

図版39　航空写真　武西近隣遺跡周辺
図版40　調査前風景（平成20年度）・確認トレンチ（平成４年度）・土層断面（左I2C-85・右I2E-75）
図版41　石器集中１・石器集中２（北）・石器集中２（南）
図版42　石器集中３・石器集中４（北）・石器集中４（南）
図版43　石器集中５・石器集中６・単独出土（12C-60）
図版44　石器集中１・石器集中２
図版45　石器集中３・石器集中５・石器集中６
図版46　石器集中４（１）
図版47　石器集中４（２）
図版48　石器集中４(３)・単独出土及び遺構出土・縄文時代石器
図版49　012号・025号陥穴・009号住居跡・遺物出土状況・炉跡・土層断面
図版50　本調査区全景（平成20年度）・021号住居跡・022住居跡
図版51　023号住居跡・O24号住居跡・010号溝
図版52　009号住居跡出土遺物（１）
図版53　009号住居跡出土遺物（２）
図版54　021号・022号住居跡出土遺物
図版55　023号・024号住居跡出土遺物
図版56　グリッド出土遺物（縄文土器・弥生土器・土師器・陶器）
図版57　出土陶器類・銭貨・磁器（１）
図版58　出土磁器（２）
図版59　武西百庚申塚・文字庚申塔・刻像塔

第1章　はじめに

第1節　調査の経緯と経過

千葉北部地区新市街地開発事業に伴う埋蔵文化財の調査は、財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）が、当初、千葉県企業庁の委託を受けて開始されたものである。その後、事業主体者は日本住宅公団に引き継がれ、現在は独立行政法人都市再生機構となったが、継続して業務の委託を受け発掘調査を実施している。

本書に収録した泉北側第1遺跡・大森割野遺跡・割野所在馬土手・武西近隣遺跡は、いずれも印西市に所在する遺跡で、平成4年以降断続的に発掘調査・整理作業がなされてきたものである。なお、年度別担当者等については以下の表に示すとおりである。

第1表　泉北側第1遺跡発掘調査・整理の経過

年度	期　間	対　象 (㎡)	上　層 (㎡)		下　層 (㎡)		調査（研究）部長	所　長	担当職員
平成9	5/6～6/3	3,570	確　認	383	確　認	149	西山太郎	折原　繁	宮　重行 榊原弘二
			本調査	450	本調査	0			
平成11	4/1～9/30	3,570	水洗・注記				沼澤　豊	折原　繁	
平成19	4/1～5/31	3,570	記録整理～原稿執筆・編集				大原正義	豊田佳伸	井上智朗
平成21	8/1～3/31	3,570	報告書印刷・刊行				及川淳一	野口行雄	

第2表　大森割野遺跡発掘調査・整理の経過

年度	期　間	対　象 (㎡)	上　層 (㎡)		下　層 (㎡)		調査（研究）部長	所　長	担当職員
平成8	4/8～10/31	35,100	確　認	3,830	確　認	868	西山太郎	谷　旬	宮　重行 白鳥　章 榊原弘二
			本調査	2,600	本調査	400			
平成9	4/7～8/8	18,950	確　認	1,916	確　認	612	西山太郎	折原　繁	宮　重行 綿貫　貴 沖松信隆
			本調査	1,200	本調査	440			
平成19	11/1～11/30	1,910	確　認	192	確　認	60	大原正義	豊田佳伸	沖松信隆
			本調査	0	本調査	0			
平成11	4/1～9/30	54,050	水洗・注記				沼澤　豊	折原　繁	

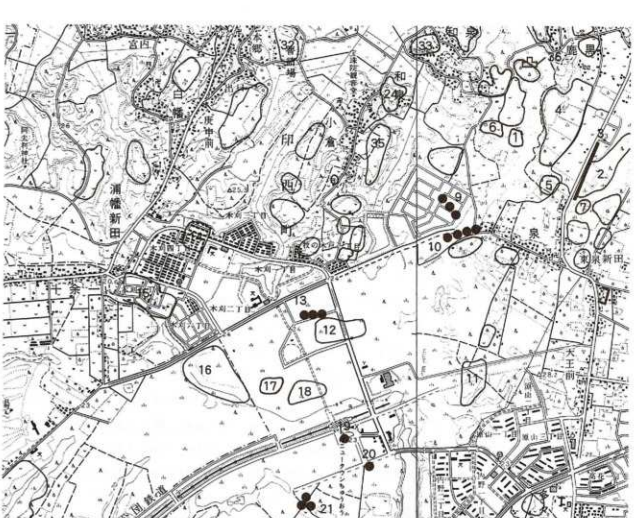
平成19	4/1～4/30 11/1～3/31	54,050	記録整理～原稿執筆・編集	大原正義	豊田佳伸	高橋博文 香取正彦 田形孝一
平成21	7/1～7/31	1,910	記録整理～原稿執筆・編集	及川淳一	野口行雄	高橋博文
	8/1～3/31	55,960	報告書印刷・刊行	及川淳一	野口行雄	

第3表　制野所在野馬土手発掘調査・整理の経過

年度	期　間	対　象 (㎡)	上　層 (㎡)		下　層 (㎡)		調査（研究） 部長	所　長	担当職員
平成5	1/6～2/4	9,000	確　認	90	確　認	0	高木博彦	田坂　浩	岡田光広
			本調査	0	本調査	0			
平成19	5/1～5/31	9,000	記録整理～原稿執筆・編集				大原正義	豊田佳伸	島田裕之
平成21	8/1～3/31	9,000	報告書印刷・刊行				及川淳一	野口行雄	

第4表　武西近隣遺跡発掘調査・整理の経過

年度	期　間	対　象 (㎡)	上　層 (㎡)		下　層 (㎡)		調査（研究） 部長	所　長 （班　長）	担当職員
平成4	4/1～5/20	11,000	確　認	1,000	確　認	112	天野　努	（上野純司）	井上哲郎
			本調査	－	本調査	－			
平成5	6/14～9/27	5,900	確　認	－	確　認	120	高木博彦	田坂　浩	鈴木文雄
			本調査	1,000	本調査	1,170			
平成20	7/1～8/29	8,796	確　認	968	確　認	363	大原正義	豊田佳伸	宮　重行 島田裕之
			本調査	791	本調査	0			
平成11	4/1～9/30	11,000	水洗・注記				沼澤　豊	折原　繁	
平成19	6/1～6/30 8/1～10/31 2/1～3/31	11,000	記録整理～原稿執筆・編集				大原正義	豊田佳伸	宮　重行 香取正彦 猪生一夫
平成21	4/1～6/30	8,796	水洗・注記～原稿執筆・編集				及川淳一	野口行雄	高橋博文
	8/1～3/31	19,769	報告書印刷・刊行				及川淳一	野口行雄	



1、泉北銅第１（前原東）遺跡
2、大森割野（割野）遺跡
3、割野野馬土手
4、泉北銅第２・３（新山北・南）遺跡「千葉Ｘ」
5、泉（新堀）遺跡「千葉Ⅸ」
6、泉北第２（前原西）遺跡
7、鹿黒遺跡「千葉Ⅸ」
8、古新田南遺跡「千葉ＸⅨ」
9、並塚塚群「千葉Ⅲ」
10、大木戸根十三塚「千葉Ⅸ」
11、南西ヶ作遺跡「千葉Ⅳ」
12、大塚前遺跡「千葉Ⅱ」
13、大塚塚群「千葉Ⅲ」
14、木苅峠遺跡「千葉Ⅲ」
15、一本桜遺跡「千葉ＸⅡ」
16、白井市一本桜南遺跡「千葉ＸⅡ」
17、榎峠遺跡「千葉Ⅱ」
18、高根北遺跡「千葉Ⅳ」
19、猿塚塚群「千葉Ⅱ」
20、大野庚申塚「千葉Ⅲ」
21、庚申塚「千葉ＸⅢ」
22、武西近隣（武西百庚申）遺跡
23、白井谷奥遺跡「千葉ＸⅣ」「関連Ⅱ」
24、鳴神山遺跡「千葉ＸⅣ」「関連Ⅱ」
25、北の台遺跡「千葉Ⅱ」
26、向新田遺跡「千葉ＸⅤ」
27、船尾台幡遺跡「千葉Ⅴ・ⅩⅥ」
28、西根遺跡「印西市西根遺跡」
29、船尾町田遺跡「千葉Ⅷ」
30、船尾中峠遺跡（塚）「千葉Ⅴ」
31、結縁寺塚遺跡（塚群）「千葉Ⅴ」
32～37、本文参照

※1「千葉Ⅱ」は、「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」の略。
※2「関連Ⅰ」は、「千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」の略。
※3（　）は「千葉県埋蔵文化財分布地図（1）」による遺跡名

第１図　遺跡の位置と周辺地形図

第２節　遺跡の位置と環境

本書に所収した４遺跡のうち、泉北餌第１遺跡・大森割野遺跡と割野所在野馬土手の３遺跡は位置的に近接し、さらに野馬土手は大森割野遺跡の一部と重複しつつ南北に構築されていた。印西市域からみると、これら３遺跡は、ほぼ市域の中央部に所在する。本地域の標高は、25m～26mほどで平坦な台地を形成している。また、この周辺域は北西に位置する手賀沼に注ぐ小河川によって開析された小支谷が入り込み、遺跡はそれらの支谷に面したような場所に形成されている。第１図に示したように周辺に所在する遺跡では、すでに調査されている遺跡も多々あり、旧石器時代から中世を経て近世に至るまで少なからず人びとの痕跡を垣間見ることができる。旧石器時代では、本遺跡に隣接する泉北餌遺跡(番号４、以下番号は略)の一部（泉北餌第２遺跡・泉北餌第３遺跡）や古新田南遺跡（８）から大規模な石器集中地点が検出されている。縄文時代に入ると、泉北餌第２遺跡で早期の炉穴群や前期・後期の集落跡が検出され、中期では備中崎遺跡（32）・松山貝塚（注１）など貝層を伴う遺跡も確認されている。さらに弥生時代から古墳時代にかけてみると、前述した泉北餌第２遺跡で古墳前期が主体の比較的大きな集落が形成され、各種土器類も豊富に出土している。しかし、奈良・平安時代では、これまで本地域での調査例は皆無で大きな集落は市内の南部域に展開している。分布調査（注２）による所見をみると、本書所収遺跡群の西に所在する城ノ内遺跡（33）、小山台遺跡（34）、鍛冶屋台遺跡（36）などでは平安時代の遺物が確認されているようであるが、その内容の把握までには至っていない。次いで中・近世に視点を移すと、中世では城館跡とされる和泉砦跡（36）、近世では並塚塚群（９）や大木戸根十三塚（10）が既に報告されている。また、本報告に連なる野馬土手では天王脇野馬土手（37）が残存しており、近世牧跡の面影を残している。

一方、武西近隣遺跡は市域の南西部隅に位置し、その南は八千代市、西は白井市と接する。本遺跡周辺の地形を観察すると、標高約23mの台地が広がり、台地には東京湾へ注ぐ新川の支流である神崎川に流れる小河川により支谷が入り込み、居住に適するような舌状台地が各所で形成されている。本遺跡周辺において既に調査された遺跡についてみると、旧石器時代では白井市一本桜南遺跡（16）で豊富な石器群が認められ、高根北遺跡（18）等でも若干の石器群が出土している。縄文時代の遺跡は少なく、白井市一本桜南遺跡で早期の住居跡と炉穴、石器製作跡が検出されている。石器製作跡は向新田遺跡（26）でも認められ、主に石鏃を製作していたことが判明している。また弥生時代についてみると、白井谷奥遺跡（23）や鳴神山遺跡（24）では後期に小規模な集落が構成されていたようである。その後、古墳時代に移行すると一本桜南遺跡や鳴神山遺跡・向新田遺跡（26）では数十軒にも及ぶ住居跡が検出され、次第に集落は肥大化していったようである。さらに奈良・平安時代についてみると、鳴神山遺跡で報告されている当該期の住居跡は200軒を越え、掘立柱建物跡も43棟を数える。他に、墨書土器にも貴重な文字資料がみられ、古代に暮らした人びとの生活と文化を解明する足掛かりとなるように思われる。そうした人びとは中世に入っても、この地を生活の場としていたらしく居住の痕跡は見あたらないが、土坑・地下式坑といったような墓跡が白井谷奥・鳴神山遺跡で検出されている。

注１　番号32備中崎遺跡の北東約300mに所在していたが、今では消滅しており中期の貝塚として知られている。
注２　（財）千葉県文化財センター編 1997『千葉県埋蔵文化財分布地図（１）』

第２章　泉北側第１遺跡

第１節　調査の方法と概要

本遺跡の調査は、前出の第１表に記載されているように平成９年５月に開始され、確認調査の終了後、直ちに本調査へと移行した。調査の手順として、上層確認調査では事業地内に遺構確認のため南北に一定の間隔でトレンチを設定（第３図）し、第Ⅱ層上部までについては重機による掘削をすすめ、遺物の包含が予想される第Ⅱ層下部（新期テフラ層）はジョレンによる掘削とした。その結果、８D区の北東隅において長径約２m、短径約１mの楕円形を呈する遺構を検出した。さらに遺構の南西部にあたる８・９C区では縄文時代の土器群が多数出土したことに伴い、遺構及び８・９C区を中心とした縄文土器集中出土部分を本調査範囲として調査をすすめた。

この上層本調査が収束をむかえる時点で下層の調査へと移行することとしたが、下層は上層調査時に設定した大グリッドを利用し、それを百分割（第５図）したうえで00～99グリッドと命名し確認調査を実施した。確認のための小グリッド（２m×２m）は26か所（第４図）に設定し、Ⅸ層下部ないしⅩ層上面まで掘りすすめた。その結果、８C-18グリッドにおいて第Ⅵ層から石器が出土したため周囲を拡張し精査するものの、数点の石器が出土したにとどまり広範にわたる分布が認められなかったため、確認調査の中で下層の調査を終了することとした。

第２節　基本層序

本遺跡にみられる堆積土は既調査分の土層と大差はなく、図示したような層順を示していた。第６図は９C－09区の堆積土を記録したものであり、以下、簡単に層順を記しておく。

Ⅰ　層　表土（耕作土）。約30cmの層厚であり、耕作により大きく攪乱（Ⅰb）されている部分も多い。

Ⅱ　層　黒褐色土。20cm～30cmの堆積が認められ、下部は部分的に褐色を呈した（新期テフラ）層もみられた。

Ⅲ　層　黄褐色土。いわゆるソフトローム層で40cm～50cmと厚い層で堆積していた。

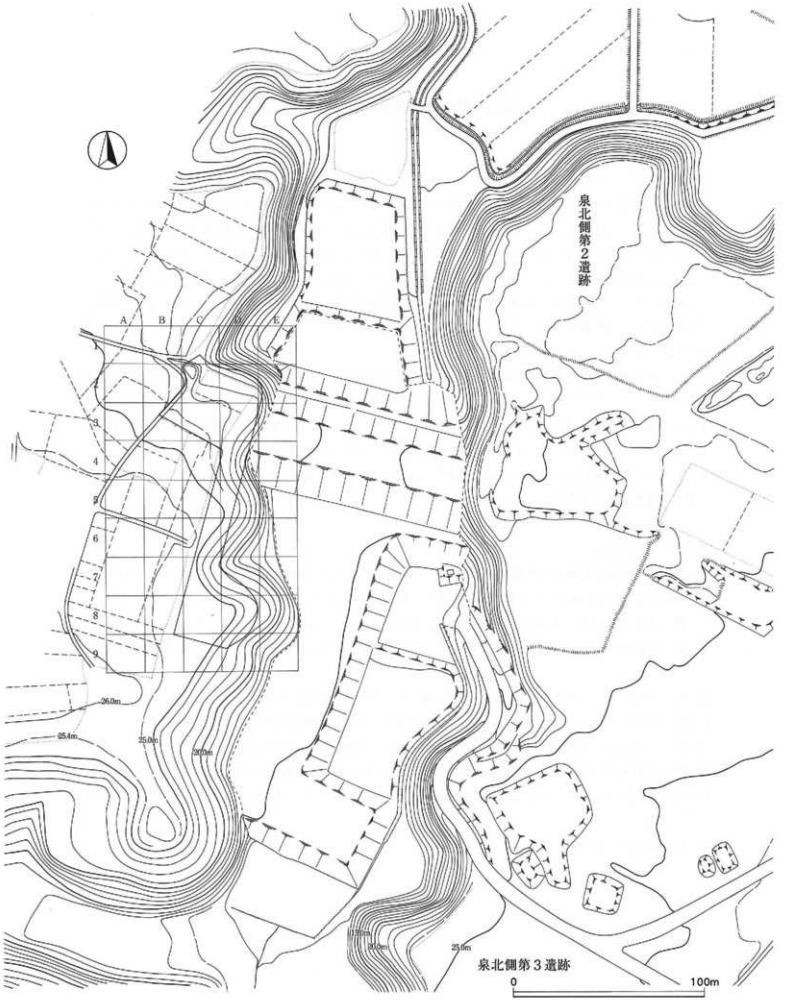
Ⅳ･Ⅴ層　褐色土。20cm～30cmの層厚で、ヒビ割れ状のクラックが第Ⅵ層まで及ぶこともある。

Ⅵ　層　明褐色土。ＡＴ（姶良丹沢パミス）を含む層で、約20cmの堆積が認められた。

Ⅶ　層　暗褐色土。第Ⅸ層の漸移層で、層厚は約20cm。第Ⅸ層よりも色調は淡い。

Ⅸ　層　暗褐色土。40cm～50cmの層厚で、部分的に僅かに明るい層（Ⅸ－ｂ）が認められる場合もあった。

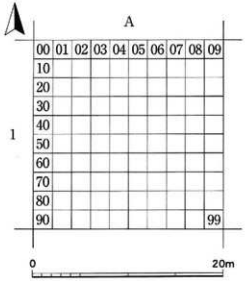
Ⅹ　層　褐色土。立川ローム層最下層。



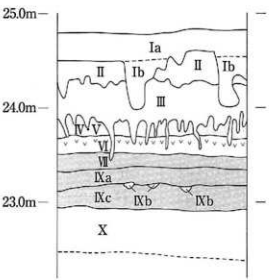
第２図　泉北倜第１遺跡と周辺地形

第3図　上層全体図・確認トレンチ

第4図　下層全体図・確認グリッド



第５図　グリッド呼称図



第６図　基本層序

第３節　遺構と遺物

前節でも触れたように、本遺跡では旧石器時代の石器群と縄文時代の土坑１基及び土器群が調査区の南、８C・８B・９Cの各区から出土している。土器群を型式的にみると、早期の撚糸文系から前期・中期・後期と断続的に出土しており、その出土傾向から台地の南西部に向かって拡大していることは確実で未調査部分に集落が展開していることも予想された。

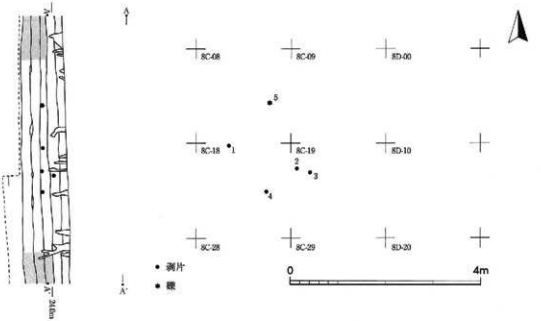
１．旧石器時代

第１地点（第７・８図）

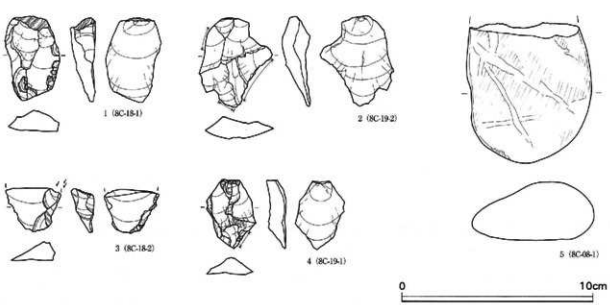
下層確認調査時に８C-19グリッドにおいて、第Ⅵ層下部からメノウ製の剥片が出土した。周囲を拡張して精査した結果、他に４点の石器が第Ⅶ層より出土した。本地点を第１地点としたが、他からの出土は認められなかった。

石材と石器群　１～４は、乳白色を呈したメノウ製である。その色調から４点とも同一母岩から剥離されたものであろう。

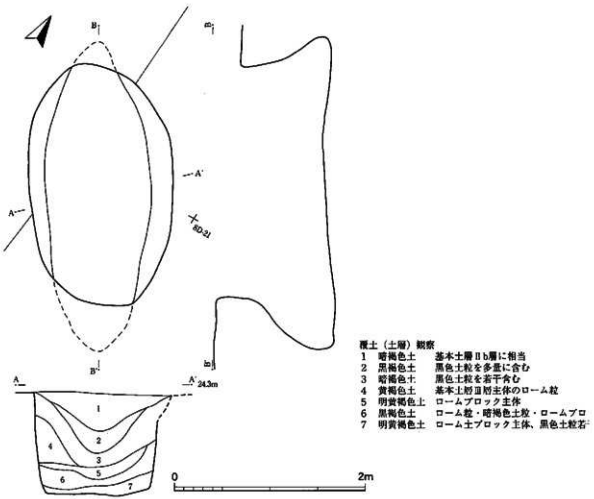
１は打点部に自然面を残すが、形の整った縦長剥片といえる。下部の両側縁に細かな調整剥離が施されており、削器としての使用が考えられる。また背面の一部が削除されていることも石器としての使用を裏付けるものとなろう。２も左右の側縁に使用の痕跡が認められる。とりわけ右側縁に著しい。３は彫器となろう。切断後、右側面に３回の樋状剥離を加えている。裏面でも側縁に沿って二次剥離が施されている。４は縦長の剥片で表面の一部に自然面らしき白色の面を残す。右側縁下半部には微細な調整痕が認められる。裏面にまでは及ばない。いずれにしても４点すべてが石器として使用された痕跡を残すものであった。５は欠損品であるが、敲石となろう。下端左に僅かな敲打痕を認めることができる。表裏面は滑らかで、使用の痕跡は認められない。石材は砂岩である。



第７図　第１地点石器出土状況図



第８図　第１地点出土石器



第９図　001号土坑

２．縄文時代

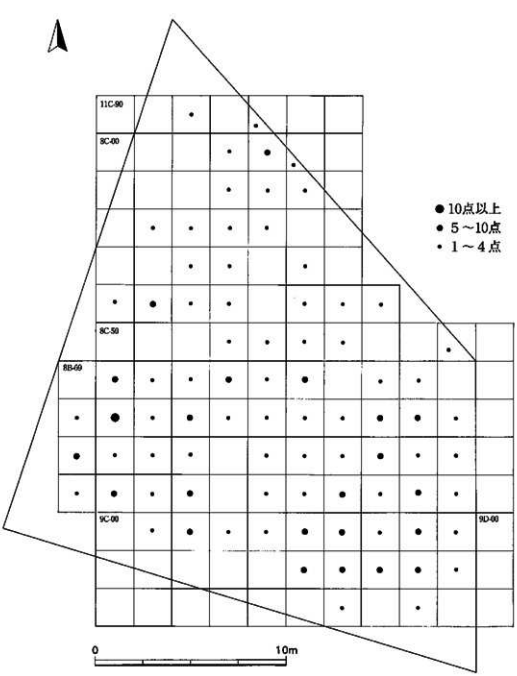
001号跡（第９図・第11図１）

本跡は８D-10・20グリッドにかけて検出された土坑で、いわゆる陥穴として分類されるものとなろう。断面A'破線部分の層序は第Ⅴ層となっているため、掘削当時の深さは２ｍを越えるものとなっていたであろう。堆積土は７層に分離できたが、第５層から第７層にかけてはロームブロック主体の堆積であった。

遺物は、覆土第２層から小破片が１点（第11図１）だけ出土した。器面には撚糸文が施文されており、胎土・色調から撚糸文系土器となろうが、遺構に伴う可能性は少ない。

遺構外出土の遺物（第10図～第13図）

図示した土器群の出土についてみると、その多くは第10図に示したとおり調査区南部から出土したものである。時期的にみると、早期の撚糸文系の土器群が多く、次いで中期・後期初頭の土器群が続く。他には前期の土器群も若干出土しており、各時代の土器群が認められた。



第10図　遺構外出土縄文土器の分布

土器（第11図・第12図）

2～33は撚糸文系の土器群である。施文具の原体により大きく縄文と撚糸文とに分類した。2～21・30は器面に縄文が縦方向に施文されており、肥厚した口縁部にも縄文原体を押しつけているもの（2～13）が多々みられた。中には11のように薄い粘土紐を貼付した上に丁寧に押捺している。ただ口縁直下には横方向に走る縄文は皆無であった。このことから本土器群は井草式でも新しいタイプのものとなろう。30は底部片で、縄文が粗く疎らに施文されている。22～29は撚糸文が施文されており、22～24では、その間隔

が密である。反面、25～29の間隔は粗い。これらは稲荷台式となろう。撚糸の原体についてみると、24・28はLで、その他はRとなる。31～33は、おそらく同一個体となろう。色調は器面が淡褐色で、口縁部から内面全体が淡黒褐色で特徴的な色彩となっている。胎土も精選され砂粒の他には含有物は認められない。出土地点は8C・9C区であった。肥厚した口縁には浅いながらも縄文原体の押圧が施され、口縁を一周しているものと推測できる。器内外面は篦状工具により丁寧な仕上げとなっており、特に内面は磨き痕ともいえる精緻な仕上げである。

34は早期中葉に属する無文土器となる。緩やかな波状口縁を呈しており、色調は淡褐色で胎土に赤褐色の粒子を混入しているが、繊維は認められない。器面の仕上げは粗く、横方向に撫で、整形を兼ねた仕上げとなっている。

35～39は早期後半の条痕文系土器群で、35～37は細い条痕が格子状に施されている。胎土には少量の繊維を含み、色調は内外面が褐色である。施文具も共通するところから同一個体と考えられる。38・39はっきりした条痕で、38は赤褐色、39は淡褐色を呈し、繊維の含有はほとんど認められない。こうした点から、これらの土器群は子母口式に比定されるものとなろう。

40は底部に近い破片で、胎土には繊維を含む。おそらく黒浜式となろう。

41～43は半截竹管による施文で、41・42には円形の刺突が加わる。文様構成から諸磯A式となろう。

44・45は撚糸による施文であり、45は口縁部付近の小片である。撚糸は不規則に器面に施文され、その痕跡は前出の撚糸文系土器群と比較すると、深くそして強く施文されている。色調は赤褐色で若干白色の鉱物を含む。このためこれら2点は前期後半に位置づけられる浮島系土器と考えたい。

46・47・56は加曽利E式に属するものであり、46は4条一組の半截竹管状工具により曲線を描き、47も同様な工具により縦方向に押引きして縄文施文のごとく効果を作り出している。56は底部片であるが、上端の磨耗が著しい。浅鉢状の土器として再利用したものと考えられる。縄文は強く撚られたRLである。

48～50は加曽利E式末期の土器群で、口縁部直下や胴部に隆帯を付すものである。50は大型品となるようで器厚も12mmを計る。

51～53は、明確な沈線と刺突文の組合せから後期初頭の称名寺式である。51は口縁部で、肥厚した口唇部が特徴的である。

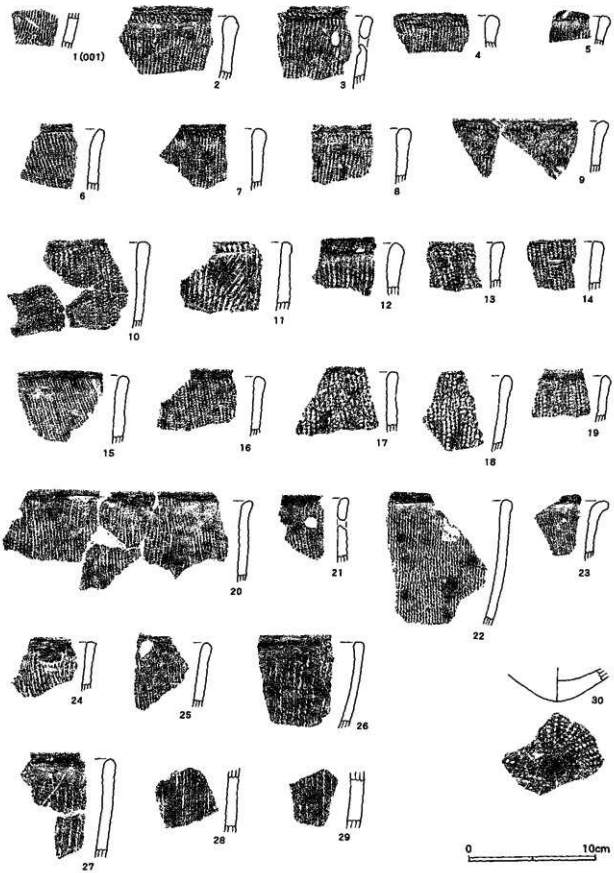
54・55・57は加曽利B式となろう。54は口縁部で粗線文系の深鉢となろうが、口縁部の連続爪形は半截竹管のような施文具を用いている。55は器面に施されている縄文の粗雑さから加曽利B式の粗製深鉢の一部となろう。57は1/2ほどの底部が遺存したものであり、器面での文様は認められない。ただ底部には製作時に敷物を敷いたらしく、一部に編跡が残る。

土製品（第13図1～3）

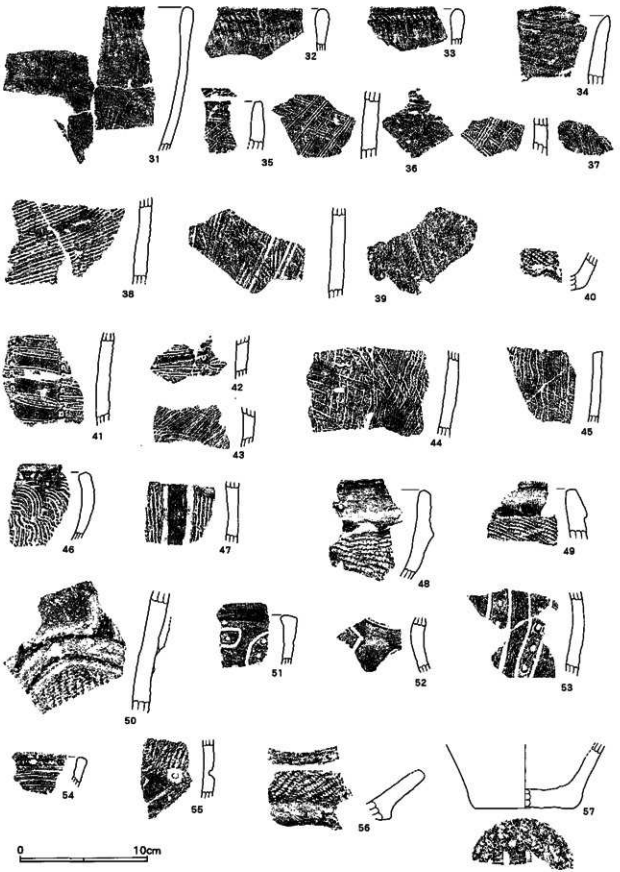
破損した土器片を利用した円板状土製品が3点出土した。1は口縁部片の周囲を整形し、2cm程度口縁部が遺存している。器面には数条の撚糸文が粗い間隔で施文されている。早期の稲荷台式である。2にも同様な整形が認められる。器面の施文は縄文であり、井草式となろう。3は上部に打ち欠いたような整形痕が巡る。下部の1/3は欠損している。時期的には中期末葉となろう。

石器（第13図4～7）

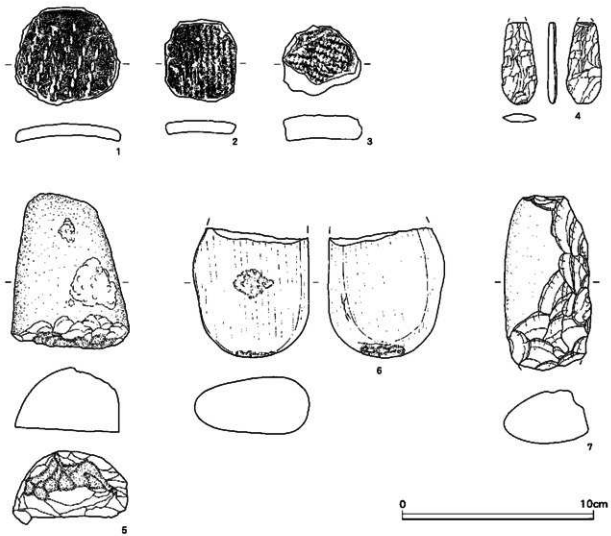
4は先端と基部が欠損している。遺存した形状から有舌尖頭器となろう。石材はデイサイトで器面の風化が著しい。表採品である。5・6は敲石である。5の裏面は節理面となっており、破損したため再利用



第11図　遺構外出土の縄文土器（1）



第12図　遺構外出土の縄文土器（2）



第13図　遺構外出土の土製品・石器

したものと思われる。下端部は使用により磨耗が著しい。石材はフォンフェルス。6は扁平な砂岩を用いたもので、敲打による使用痕は僅少である。7は磨製石斧として製作されたものであり、上部には刃部作出のための研磨が一部に認められる。おそらく使用しているうちに頭部が破損したため打製石斧へ転用したものであろう。右側面を大きな剥離により削除し、刃部は裏面からの鋭角な剥離により整形し刃先にも小さな剥離を加えて形状を整えている。石材はフォルンフェルスである。

第４節　小結

本遺跡での調査結果は前述したとおりであるが、これまでの既調査分の成果を考慮すると遺跡の東側に入り込む谷津を境にして東に位置する泉北側第２（注１）・第３遺跡（注２）では旧石器時代の大規模な石器群や縄文・弥生・古墳時代の集落が展開しており、古代人の活発な活動の痕跡が確認されている。

一方、本遺跡を含む谷津の西側では調査例は少なく比較検討できるまでには至っていない。地形的にみても標高25m前後の平坦な台地が広がり、居住環境という点でも前者と何ら遜色のないような環境といえる。ただ本遺跡の調査結果から強いて共通点を指摘するとすれば、旧石器時代・縄文時代といった部分では、住居跡のような確実な遺構は検出されていないものの遺物包含層から出土した土器群は泉北側第２遺跡検出の縄文時代住居跡と時期的に一致している。このことから当時の人びとの生活を推測すれば、居住域は谷津の東側とし、本遺跡を含めた周辺が日常活動の領域となっていたものと考えられる。

注１　既に報告されており、本遺跡では旧石器時代の石器集中地点（14m×11m）や縄文早期の炉穴群と前期と後期の住居跡、さらに弥生後期から古墳前期に至る集落跡など豊富な遺構・遺物が発見されている。
高橋博文1991『千葉ニュータウン堀蔵文化財調査報告書X』（財）千葉県文化財センター

注２　現在整理中であり、第Ⅵ層中から径60mの範囲で環状を形成する大規模な石器群が検出されている。

第３章　大森割野遺跡

第１節　調査の方法と概要

本遺跡は、前出の第２表に記されているように３年次にわたり調査されたものである。平成８年度では遺跡の北側部分が調査され、次いで９年度に道路に沿った南側部分が残存していた野馬土手と同時に調査された。この結果、中央部に一部未調査部分を残すこととなった。その後、未調査部分は平成19年度に調査を実施した。

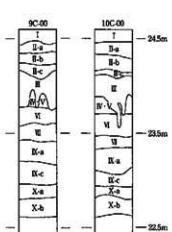
発掘調査の手順としては、従来通りの方法で４ｍグリッドを想定しつつ、第３図のように上層遺構の確認については２ｍ幅のトレンチを東西方向に設置し、西から東へＡ‥‥Ｌ、北から南へは１‥‥10と番号を付し、この組合せをもって大グリッドとした。なお、整理作業については、後述するように上層からは縄文時代の土器群が大量に出土しており、いわゆる土器包含層として捉えることのできる地点が数か所で認められたため遺跡の北側部分を第１地点、南側部分を第２地点として整理作業を進捗させたため、以下の記述では地点別に記載する。

第２節　基本層序

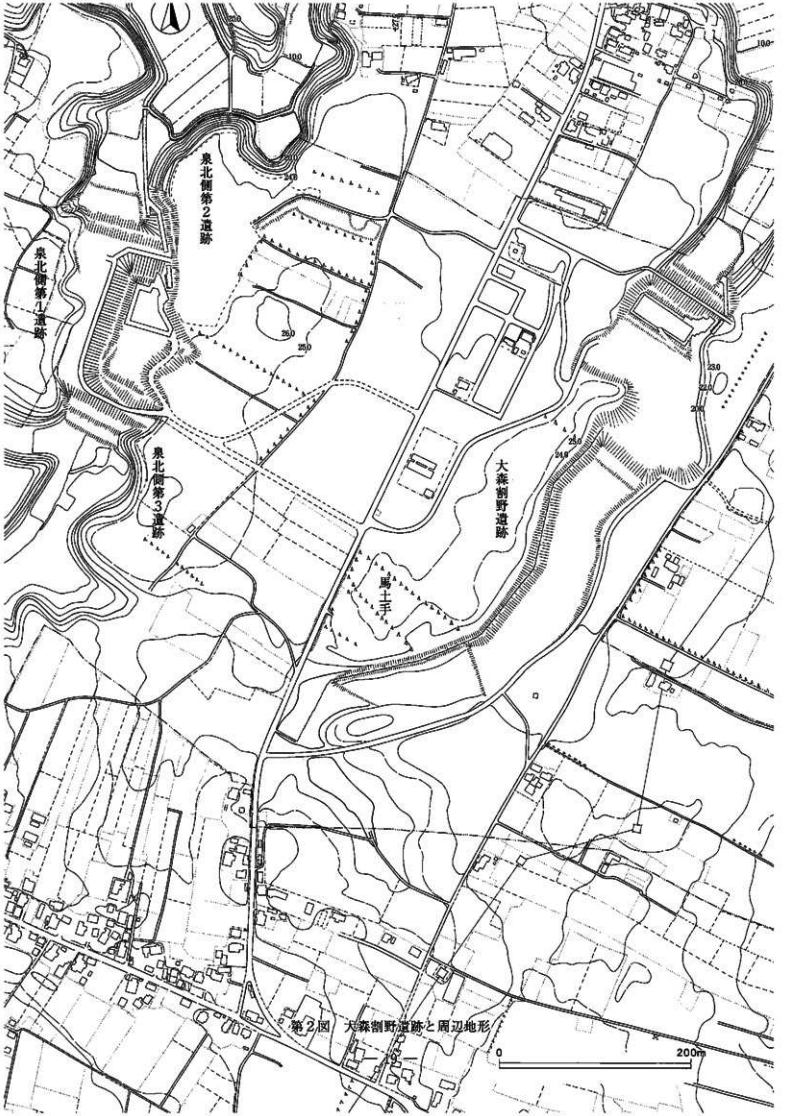
本遺跡で、基本層序として掲載した地点は図示（第１図）したとおり、９C-00グリッド・10C-00グリッドで道路に沿った地点である。この地点は比較的平坦で関東ローム層の堆積もしっかりしたものであったために基本層序として採用した。

層序についてみると、Ⅱ層は縄文期の包含層となっており新期テフラの堆積やソフトローム層への移行が順序よくみられた。図示したように場所によってはⅡ層が３分割されたり、Ⅸ層では若干の色彩の相違からa層・c層に層序区分が可能であった。

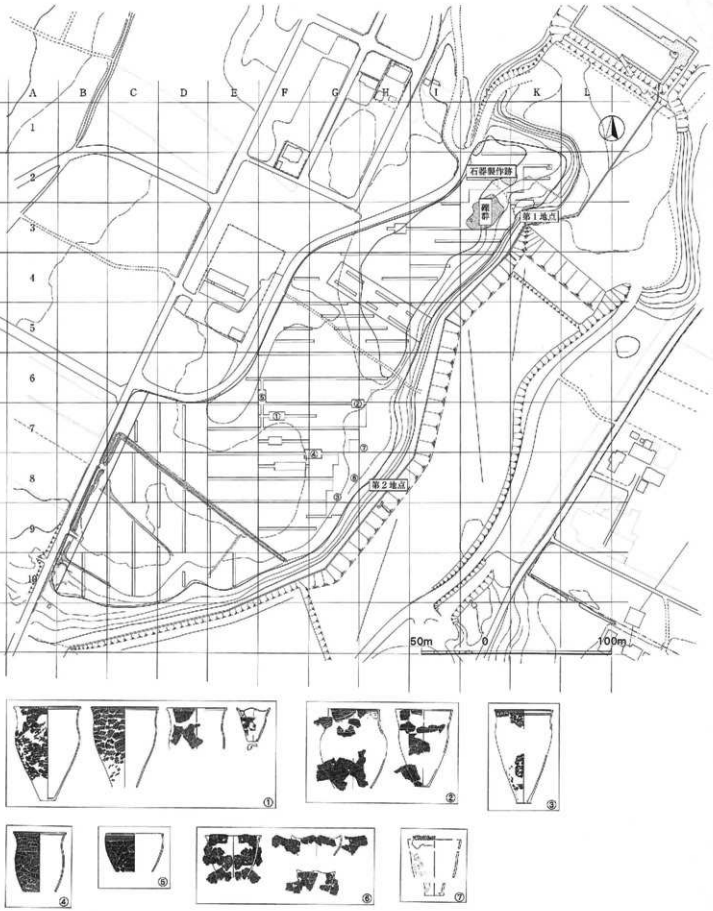
Ⅰ層　表土
Ⅱ－ａ層　黒褐色土（腐植土）
Ⅱ－ｂ層　褐色土（新期テフラ・縄文土器包含層）
Ⅱ－ｃ層　黄褐色土（第Ⅲ層への移行層）
Ⅲ層　ソフトローム層
Ⅳ・Ⅴ層　褐色土（クラックが入り明確に分離できない）
Ⅵ層　明褐色土（ＡＴ含有層）
Ⅶ層　暗褐色土（暗色帯漸移層）
Ⅸ－ａ層　暗褐色土（第２暗色帯上層部）
Ⅸ－ｃ層　暗褐色土（第２暗色帯下層部、ａ層よりもやや明るい）
Ⅹ－ａ層　褐色土
Ⅹ－ｂ層　褐色土（ａ層よりもやや暗い）



第１図　基本層序

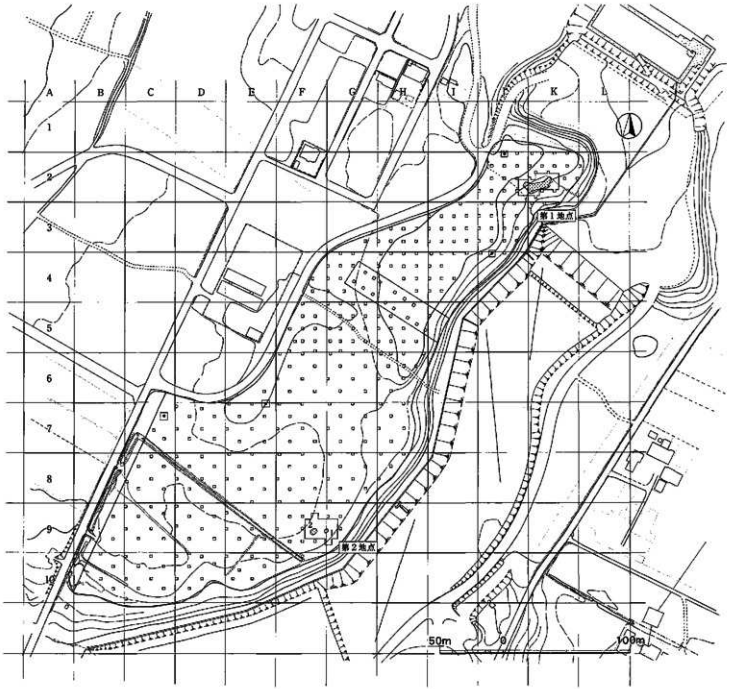


第2図　大森割野遺跡と周辺地形



※○数字は出土地点を示す。

第3図　上層全体図



第４図　下層全体図

第３節　遺構と遺物

本遺跡では前述したように調査が終了するまでに３回にわたって発掘が実施された。出土遺物から時期的には旧石器時代・縄文時代・近世の３時代に大きく区分できよう。遺物の分布についてみると、旧石器時代では２Ｊ区・２Ｋ区を中心とした地点と９Ｆ区・９Ｇ区の２地点で石器群の出土が認められた。後者の地点では２枚の文化層が確認されている。

一方、縄文時代の遺物も大きくは２地点で認められており、第１地点では旧石器時代の石器群に覆い被

さるような形で土器・石器・礫群が集中的に出土した。石器についてみると、黒曜石製の石鏃とともに剥片が多数出土しており石鏃の製作跡と思われるものも存在した。また礫群の表面は熱を受けた痕跡を有するものが多く厨房的な要素を兼ねたものと推察される。また第２地点では８Ｇ区を中心として広範囲に土器群が散布しており（第３図）、時期的にも早期の撚糸文系土器群・沈線文系土器群・条痕文系土器群、さらに前・中・後・晩期の土器群が断続的に認められている。縄文人の生活の推移という点からみると資料的には貴重なものといえよう。

なお、近世の遺物については野馬土手関連の遺物として取り扱ったため、ここでは触れないことにする。

第１地点

１．旧石器時代（第５図～第12図）

概要　２Ｋ区を中心として第Ⅵ層から第Ⅶ層上部にかけて石器群が広範囲にわたり出土した。その分布は２Ｊ区にも及び、石器群は弧状に展開していた（第４・５図）。石器集中地点としては東西方向に20mを超す大きなものとなった。ただ、出土地点については斜面部にあたり図示した層序とは齟齬が生じていることを付記しておく。本地点で出土した石器群の石材は、チャートが主となり黒曜石・頁岩・嶺岡頁岩などで構成されていた。特にチャートについては残核と剥片との接合が多数認められた。また、本石器群の組成はナイフ形石器・彫器・削器・使用剥片などがみられ、出土数の少ない黒曜石製の剥片は図示したとおり大型で石器としてすべて使用されていた。

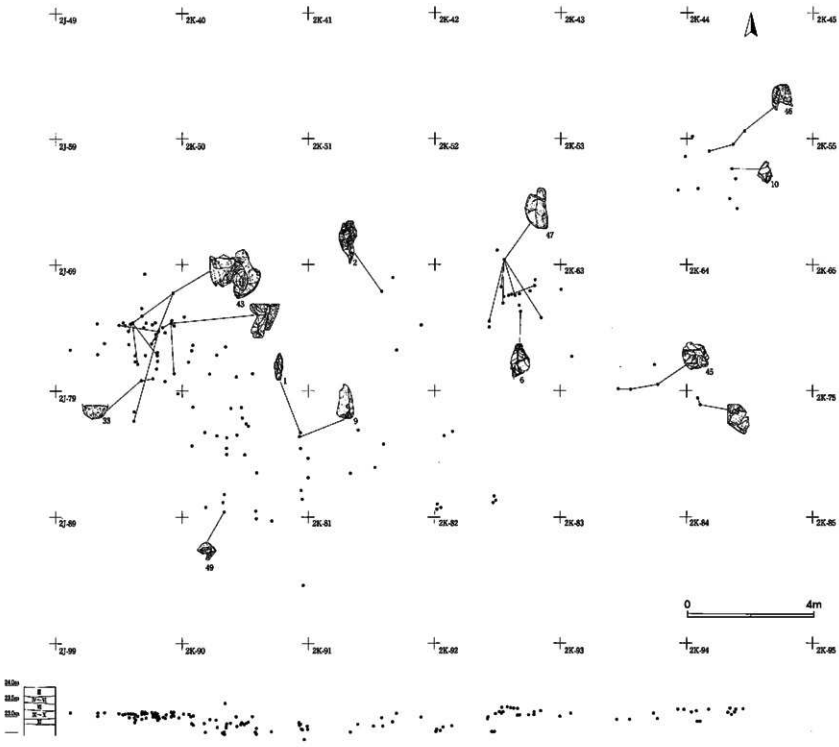
ナイフ形石器（１）　主剥離面から推察すれば横長の剥片を素材としたものであろう。全長21mmの小型品である。基部や右側面は微細な調整を施しナイフに仕上げている。石材はチャートであるが、色調は淡い青白色を呈し、他のチャートとは色彩の点で異なる。

削器（２・６）　２は左側縁に小さな剥離で整形し削器の刃部を作出しており下端部にまで及ぶ。下端部での整形は認められないため錐としての使用も考えられる。石材は黒曜石であるが、節理面が多くみられ質的には劣るものである。６は若干小石状の異物を混入するが半透明の良質な黒曜石である。縦長剥片の一部を折断し石器としての形状を整えている。上部は若干整形されておりつまみの部分に相当しよう。裏面での加工は右下端部にわずかにみられる程度である。

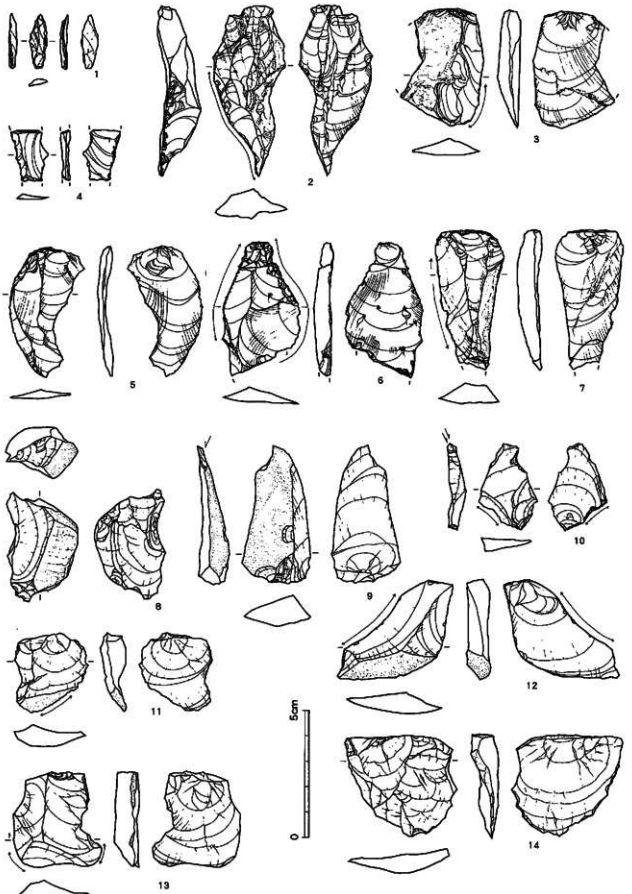
彫器（９・10）　９は縦長剥片の下部に加撃し鋭利な刃部を作り出している。10は小型品で形状の整った剥片とはいえないが、左右の側縁の一部に微細な調整痕が認められる。樋状剥離は下端部を折断後２回加えられている。石材は赤褐色を呈した碧玉で赤玉石と呼称されるものである。

使用剥片（３～５、７・８、11～15）　３・５は石刃状の幅広剥片で、３は右側縁、５は左側縁に使用痕を残す。４は折断されており、主剥離面の右上部に調整痕が認められる。７は２と同様に節理の筋が入るところから同一母岩から剥取されたものと思われる。僅かながら左側縁に使用による刃こぼれ痕が観察できる。８は残核を利用したもので下端に数度の剥離痕が認められるため成品とした。掻器または錐としての機能が考えられる。11は幅広の剥片で下部に刃こぼれ痕が認められるが、二次的な剥離の痕跡はない。12は彎曲したきれいな剥片で側縁に沿って刃こぼれが認められる。13も意識的な剥離はみられないが、使用痕が若干のこる。14は主剥離面に整形の痕跡を残しており削器様の使用が想定できる。16は下部の彎曲部に数回の小さな剥離が認められる。

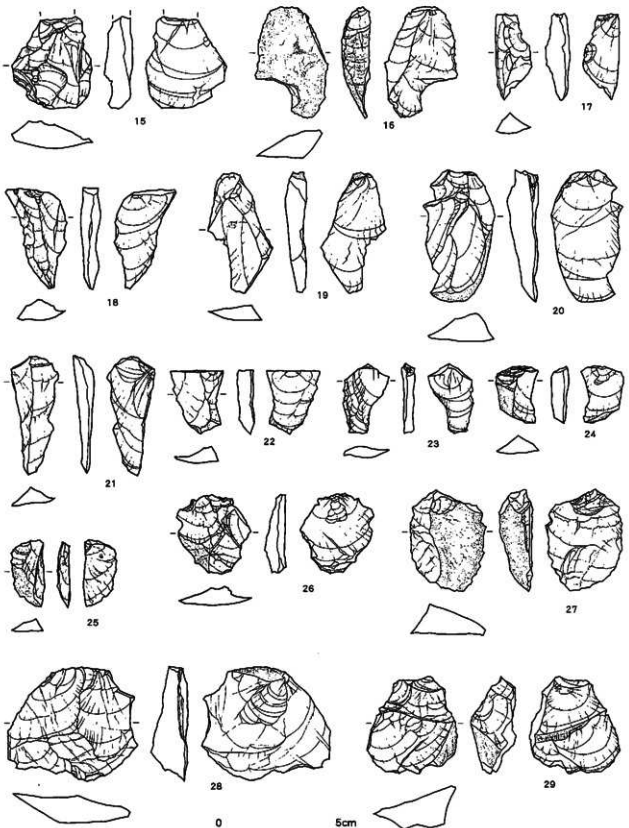
剥片（16～39）　剥片類については石器の素材となるような大型の剥片を中心に図示した。石材はほとん



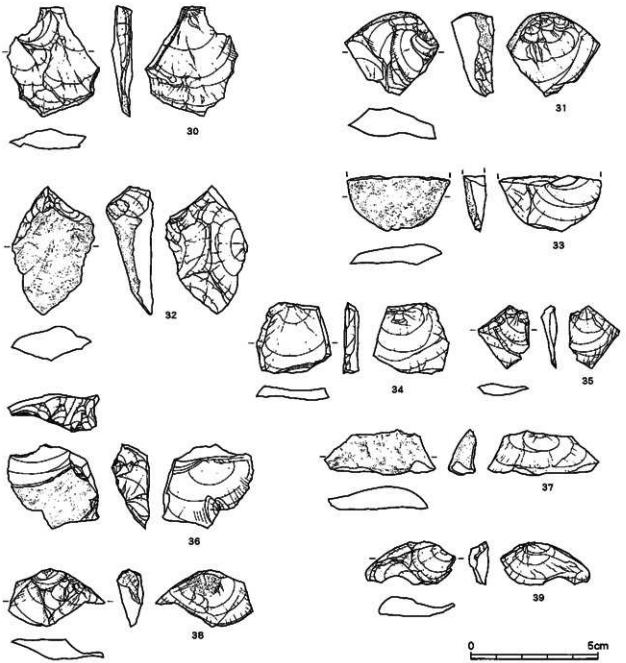
第５図　第１地点石器出土状況図



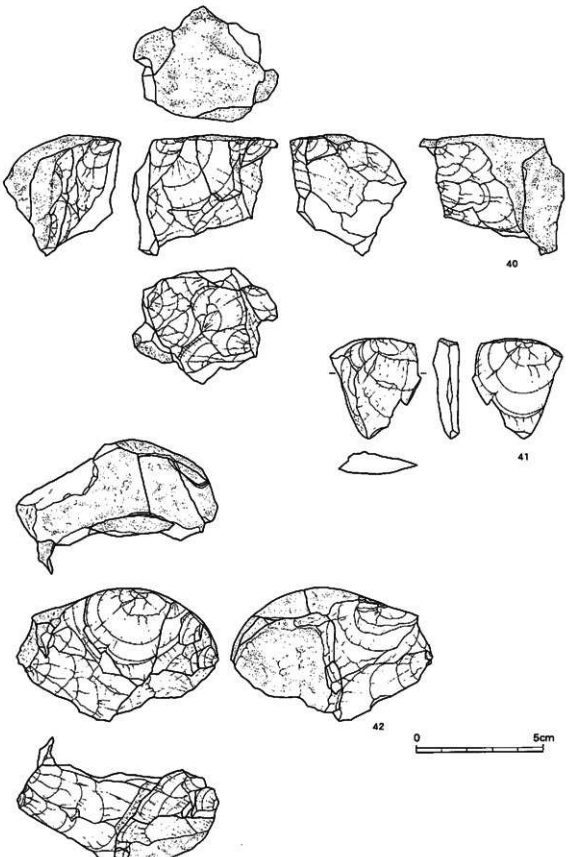
第6図　第1地点出土石器（1）



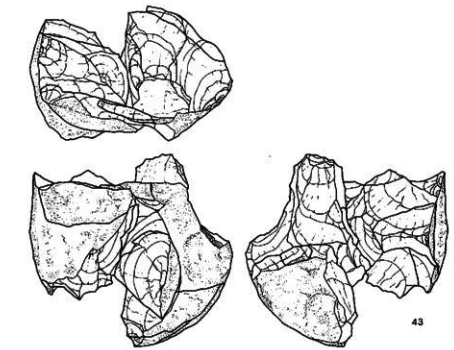
第7図　第1地点出土石器（2）

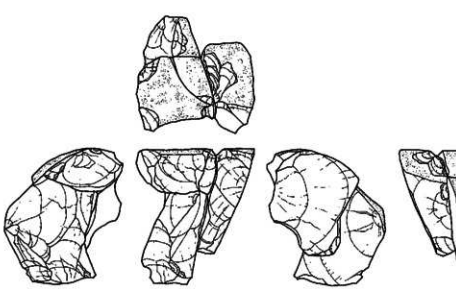


第８図　第１地点出土石器（３）

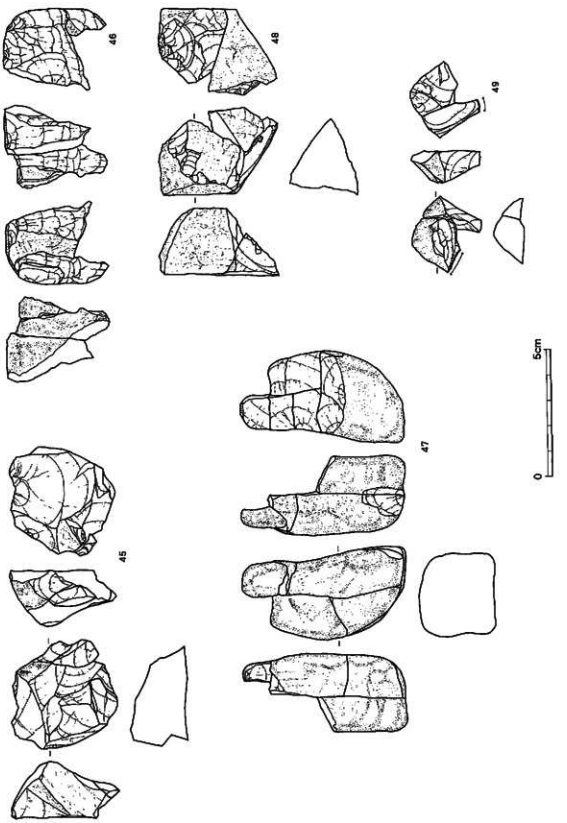


第9図　第1地点出土石器（4）

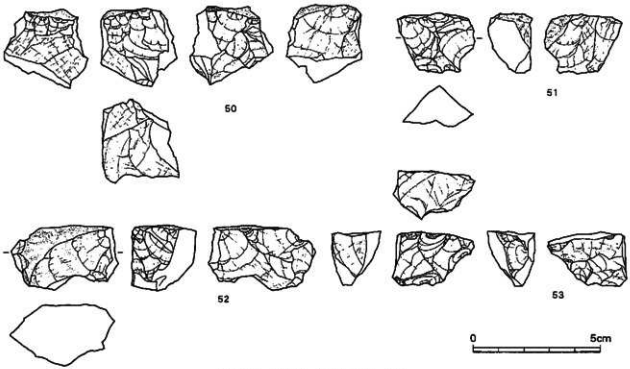




第10図　第１地点出土石器（５）



第11図　第１地点出土石器（６）



第12図　第１地点出土石器（７）

どがチャートで占められていた。18～21などは石器の素材としては十分な大きさと形状を呈している。28なども石器として使用されていた可能性が高い。29と36は打面再生のために剥離された剥片である。29の表面には剥離される以前の打面調整痕が残る。

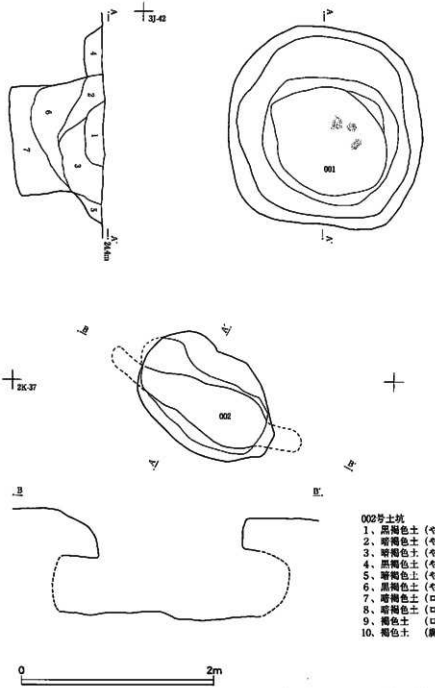
石核（40～53）　ここでは接合した資料を一括した。40～43は９点が接合したものである。これらはほぼ15cmの高低差をもって出土し接合した。接合図から原石は拳大よりも若干大きなものであった。自然面では凹凸が著しく内部には節理が走る。石器素材として利用できる良好な剥片は41の１点のみであった。いずれにしても良質な母岩とはいい難い。44は４点が接合したものである。自然面は滑らかで、石質的には前者よりも良好である。平坦な面を打点部にして順次剥離を重ねたようである。45は残核に２点の砕片が接合したもので、上下左右に自然面がみられるため、小ぶりで扁平な原石であったものと思われる。表面には数条の白色を呈した節理痕が認められる。剥離痕の観察から上下方向より剥片を剥取している。３点接合した46と48・49は、自然面観察だけで判断すると43と同一母岩とも思われたが、46の剥離面には無数に節理が認められ凹凸が著しい。一方、48・49は石質的には近似の色彩を呈していた。46と比較すると剥離面は黒色を呈した良質の石材であったが、接点が認められないため別個体として図示したものである。47は６点が接合した。その結果、６cmほどの小さな礫を割ったもので素材となるような剥片が得られるとは思えないような礫である。出土の高低差は約30cmであった。

50～53は残核となる。前述した接合資料同様すべてチャート製である。50は平坦な自然面を打面として利用している。しかし節理面が各所にみられ良好な石器素材が得られるような母岩ではない。52も剥離面を観察すると、鉄分を含有した鉱物が付着しており凹凸も著しい。51は比較的良質な石材で一定方向からの剥離を認めることができる。53は一次剥離で得られた平坦な面を打面として剥片を剥離している。打面調整の痕跡は認められない。また下部からの剥離は最終のものである。

第１表　第１地点旧石器時代出土石器観察表

出土地点・遺物番号	挿図番号	器　種	石　材	重　量	備　考
2J-69 033	6-11	使用剥片	硬質細粒凝灰岩	6.13	
・ 034					欠番
・ 035	10-43	剥片	頁岩	258.78	同グリッド045・046・049・056・058・069・071、2J-79 004と接合
・ 036	10-44	剥片	頁岩	80.39	同グリッド037・062・066と接合
・ 037	10-44	石核	頁岩	－－	同グリッド036・062・066と接合
・ 038		剥片	チャート	0.20	
・ 040		剥片	チャート	0.13	
・ 041	8-39	剥片	珪質頁岩	3.84	
・ 042	12-52	石核	頁岩	31.63	
・ 043	7-19	剥片	頁岩	7.43	
・ 044	7-17	剥片	チャート	3.90	
・ 045	10-43	石核	頁岩	－－	同グリッド035・046・049・056・058・069・071、2J-79 004と接合
・ 046	10-43	剥片	頁岩	－－	同グリッド035・045・049・056・058・069・071、2J-79 004と接合
・ 047-1		剥片	チャート	1.14	
・ 047-2		剥片	チャート	0.46	
・ 048		剥片	チャート	0.51	
・ 049	10-43	石核	頁岩	－－	同グリッド035・045・046・056・058・069・071、2J-79 004と接合
・ 050		礫	砂岩	132.18	
・ 051		礫片	細粒砂岩	25.08	
・ 052		礫片	砂岩	221.45	
・ 053	7-21	剥片	頁岩	3.86	
・ 054	7-25	剥片	黒色変山岩	1.88	
・ 055	12-50	石核	チャート	31.22	
・ 056	10-43	剥片	頁岩	－－	同グリッド035・045・046・049・058・069・071、2J-79 004と接合
・ 057		剥片	チャート	1.45	
・ 058	10-43	剥片	頁岩	0－－	同グリッド035・045・046・049・056・069・071、2J-79 004と接合
・ 059		剥片	チャート	0.75	
・ 060		剥片	チャート	0.62	
・ 061		剥片	チャート	1.69	
・ 062	10-44	剥片	頁岩	－－	同グリッド036・037・066と接合
・ 063		剥片	チャート	0.89	
・ 064	8-33	剥片	頁岩	7.78	同グリッド055と接合
・ 065	8-33	剥片	頁岩	－－	同グリッド054と接合
・ 066	10-44	剥片	頁岩	－－	同グリッド036・037・062と接合
・ 067		剥片	チャート	2.90	
・ 068		剥片	チャート	1.47	
・ 069	10-43	剥片	頁岩	－－	同グリッド035・045・046・049・056・058・071、2J-79 004と接合
・ 070		剥片	チャート	1.47	
・ 071	9-41 10-43	剥片	頁岩	－－	同グリッド035・045・046・049・056・058・069、2J-79 004と接合
・ 072					欠番
・ 073	12-51	石核	チャート	11.16	
2J-79 002		剥片	頁岩	1.03	
・ 003		剥片	頁岩	0.24	
・ 004	8-37・10-43	剥片	頁岩	－－	2J-69 035・045・046・049・056・058・069・071と接合
2K-44 001		剥片	チャート	2.34	
・ 002	11-46	剥片	チャート	26.14	2K-54 003・004と接合
2K-52 007	11-47	剥片	チャート	81.78	2K-62 007・011・012・013・014と接合
・ 008		剥片	チャート	0.71	
2K-53 003		砕片	ホルンフェルス	135.02	
・ 004		剥片	チャート	1.69	
2K-54 002	11-49	剥片	頁岩	6.55	2K-70 021と接合
・ 003	11-46	剥片	チャート	－－	2K-44 002、同グリッド004と接合
・ 004	11-46	石核	チャート	－－	2K-44 002、同グリッド003と接合
・ 005	6-10	敲磨	赤色碧玉	3.42	通称 赤玉石
・ 006		剥片	チャート	7.38	
・ 007		剥片	チャート	6.16	
・ 008		砕片	砂岩	62.51	
・ 009		剥片	ホルンフェルス	2.42	
2K-60 011		剥片	頁岩	4.81	
・ 012					欠番
・ 013					欠番
・ 014-1		剥片	チャート	0.22	
・ 014-2	7-24	剥片	頁岩	2.22	
・ 015					欠番
・ 016	8-32	剥片	チャート	21.62	
・ 017		剥片	チャート	10.53	
・ 018		剥片	チャート	0.27	
・ 019		剥片	チャート	0.23	
・ 020					欠番
・ 021		剥片	チャート	0.62	

＊	022		剥片	流紋岩	4.40	
2K-61	001	8-38	剥片	頁岩・	5.82	
＊	002	7-28	剥片	チャート	22.39	
＊	003	6-2	掻器	黒曜石	16.78	
＊	004	6-12	使用剥片	チャート	10.94	
2K-62	002	6-7	使用剥片	黒曜石	11.25	同グリッド009と接合
＊	003					欠番
＊	004		剥片	チャート	1.17	
＊	005	6-3	使用剥片	黒曜石	8.44	
＊	006	6-6	掻器	黒曜石	7.77	
＊	007	11-47	剥片	チャート	－－	2K-52 007、同グリッド011・012・013・014と接合
＊	008	8-31	剥片	硬質細粒凝灰岩	16.48	
＊	009	6-7	使用剥片	黒曜石	－－	同グリッド002と接合
＊	010					欠番
＊	011	11-47	剥片	チャート	－－	2K-52 007、同グリッド007・012・013・014と接合
＊	012	11-47	剥片	チャート	－－	2K-52 007、同グリッド007・011・013・014と接合
＊	013	11-47	剥片	チャート	－－	2K-52 007、同グリッド007・011・012・014と接合
＊	014	11-47	剥片	チャート	－－	2K-52 007、同グリッド007・011・012・013と接合
＊	015		砕片	砂岩	33.36	
2K-63	002		礫片	石英斑岩	487.86	
＊	003	7-36	剥片	頁岩	5.51	
＊	004	6-4	使用剥片	黒曜石	0.82	
＊	004	11-45	剥片	頁岩	39.27	同グリッド005・006と接合
＊	005	11-45	石核	頁岩	－－	同グリッド004・006と接合
＊	006	11-45	剥片	頁岩	－－	同グリッド004・005と接合
＊	007		剥片	チャート	12.17	
2K-70	003	7-18	剥片	頁岩	5.22	
＊	004		剥片	チャート	0.40	
＊	005		剥片	チャート	1.40	
＊	006		剥片	チャート	1.36	
＊	007					欠番
＊	008		剥片	チャート	0.26	
＊	009					欠番
＊	010	7-27	剥片	チャート	14.73	
＊	011	7-16	剥片	チャート	11.12	
＊	012		剥片	チャート	1.61	
＊	013		剥片	チャート	0.19	
＊	014	12-53	石核	チャート	12.53	
＊	015		剥片	チャート	0.28	
＊	016		剥片	チャート	0.29	
＊	017	8-35	剥片	硬質頁岩	1.70	
＊	018	6-14	使用剥片	頁岩	15.48	
＊	019		剥片	チャート	0.26	
＊	020		剥片	チャート	0.35	
＊	021	11-49	剥片	頁岩	－－	2K-54 002と接合
＊	022		剥片	チャート	0.18	
＊	023		礫片	砂岩	104.24	
＊	024		礫片	砂岩	93.71	
＊	025		礫片	砂岩	111.79	
＊	026	6-9	掻器	頁岩	13.64	
＊	027		剥片	チャート	0.09	
＊	028	6-1	ナイフ形石器	チャート	0.40	
＊	029		礫片	砂岩	0.63	
＊	030	6-8	使用剥片	頁岩	21.15	
2K-71	001	8-34	剥片	頁岩	0.08	一括出土
＊	004	6-13	使用剥片	頁岩	11.01	
＊	005	8-36	剥片	頁岩	13.76	打面調整
＊	006	7-20	剥片	頁岩	15.28	
＊	007	7-15	使用剥片	硬質頁岩	12.08	
2K-72	001	7-29	剥片	頁岩	16.15	打面調整
＊	002		剥片	チャート	0.98	
＊	003	7-23	剥片	頁岩	1.81	
＊	004		剥片	チャート	0.97	
＊	005		剥片	チャート	0.81	
＊	006		剥片	メノウ	7.23	
＊	007		剥片	チャート	2.08	
＊	008		剥片	チャート	7.89	2K-82 001-2と接合
2K-74	001	11-48	剥片	頁岩	35.02	同グリッド002と接合
＊	002	11-48	石核	頁岩	－－	同グリッド001と接合
2K-80	003		剥片	チャート	2.80	同グリッド004と接合
＊	004		剥片	チャート	－－	同グリッド003と接合
＊	005		剥片	チャート	0.78	
2K-82	001-1	8-30	剥片	珪質岩	9.71	結晶頁岩
＊	001-2				－－	2K-72 008と接合



第13図　001・002号土坑

2．縄文時代

縄文時代に伴う遺構としては、土坑が2基検出されただけで遺物の出土量からみると僅少と言わざるを得ない。これは遺構の掘込みが浅いことに起因しているものと思われる。とりわけ大型破片が出土した中期の阿玉台式期の住居跡などは炉跡を設置しないものが一般的であり、検出しにくいという点も否定できない。その反面、被熱した礫が3J区で多数出土したことは興味深い事実を提示したものといえよう。また2J・49・59グリッドを中心として黒曜石片が集中して出土しており石鏃の製作跡を想起させる状況を呈していたことも特筆できる発見であった。

（1）遺構（第13図）

001号土坑　本跡は3J－42グリッド内に位置し、長径2.1m、短径2.05mを計測する。形状はほぼ円形を呈し、開口部直下が段状に掘り込まれていた。確認面からの深さは95cmを測る。また40cm～60cmほどの深さで若干焼土の痕跡が認められたが、堆積土は自然な堆積を示していた。土器等の遺物は認められず、その性格については把握できなかった。

002号土坑　本跡は2K－27・37グリッド間に位置し、開口部での長径は1.7m、短径は1.1mを計測する。形状は不整楕円形となり、確認面から1.2mほどで底面に達する。底部は北西・東南方向に延びていたが、天井部崩落の危険性があり完掘までの調査には至っていない。土器等の遺物は認められなかった。堆積土はほぼ自然な状態堆積を示しており、遺構の性格として後世の貯蔵穴の可能性も否定できない。

礫群　3J・05・06・07グリッドを中心に分布が認められたが、多く出土した3J・06グリッドでは石器を含めて10点、他は5・6点程度の出土で集中的とはいえなかった。第14図としたものは部分的なものであり、3J・32・33・34の各グリッドでも比較的多くみられた。総体的には第3図に示したように広範囲に散布していたことが確認できた。前者に限って土器の分布をみると、沈線文系の土器群が認められた。また、後者でも沈線文系土器群が他の時期の土器よりも多く出土しているところから、本礫群は沈線文系土器群の時期に形成された可能性が強い。

石器製作跡　第15図に示したように本地点では、2J・48・49、同58・59グリッド内において100点を超える黒曜石片が径4m～5mの範囲に集中していた。調査時にフルイ等を使用したわけではないため、実際には相当数の極小剥片が加わるものと思われる。こうした出土量は、剥片石器すなわち黒曜石製の石鏃を中心とした石器製作がおこなわれていたものと考えて間違いあるまい。時期的には、周辺での出土土器についてみると阿玉台式に属する土器片及び一括品が出土しているため可能性としては阿玉台式期に伴うものと考えることが妥当であろう。

（2）遺物（第16図～第27図）

本遺跡出土の土器は早期の撚糸文系から後期の加曽利B式土器までとなる。量的には撚糸文系・沈線文系・阿玉台式などが多く、他はそれほど纏まって出土しているわけではない。また、石器については各種の石鏃と磨石・敲石・石皿・石棒などの器種がある。一方、石斧類についてみると磨製石斧の破損品が1点出土したのみで量的には極端に少ない。さらに、この2・3J区、2・3K区では礫群も検出されており、出土遺物だけについてみると居住域的な様相を示すものであったが、住居跡等は未検出であり長期の定住を想起させるものではなかった。

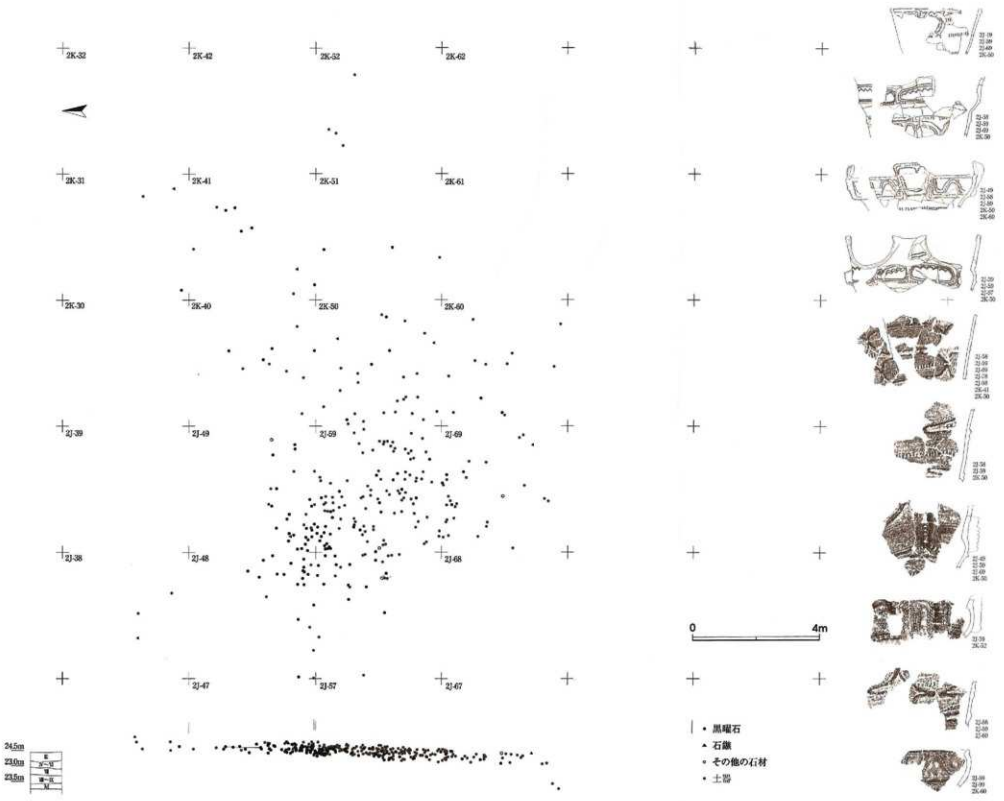
土器（第16図～第23図）

早期（第16図～第19図95～101）　早期に属する土器群では、撚糸文系・沈線文系・条痕文系といった土器群が出土している。出土地点についてみると、撚糸文系は2・3J区、2・3K区で、沈線文系は無文土器群も含めて2・3J区のみにてみられ、条痕文系2・3J区で若干出土している。

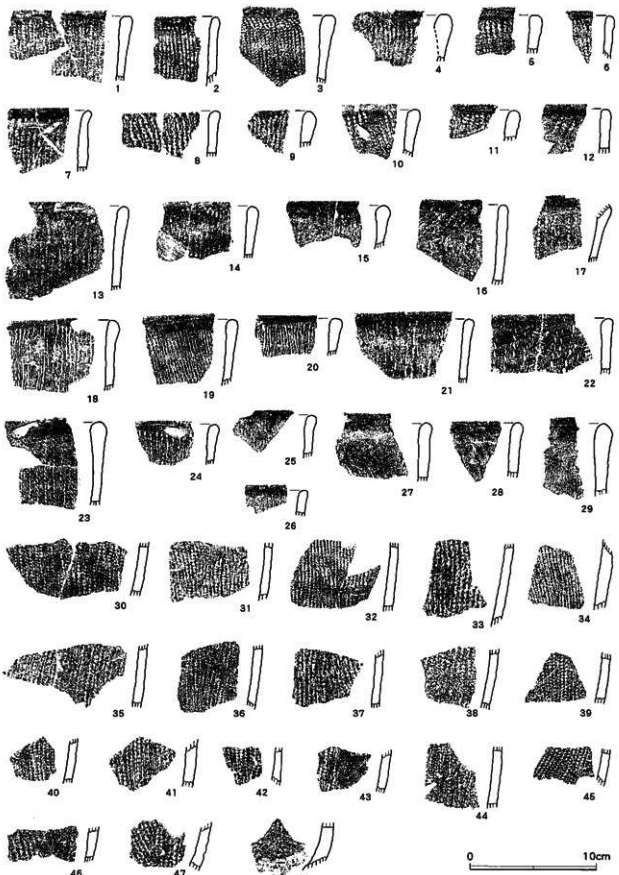
撚糸文系土器群では縄文を器面に施文してるもの（1～17・30～48）がやや多く出土しており、3では口縁直下に施文後、下方に向けて再度原体を回転させている。撚糸施文は間隔の密なもの（18～20）と粗いもの（21～26・49～57）とが混在する。無文の土器（27～29）も出土しており、28では器面をヘラ状工具で丁寧に調整する。これらの大半は夏島式から稲荷台式に該当するものである。

沈線文系の土器群も一括品に近い形状を呈しているものも含めて比較的多く出土している。出土地点は

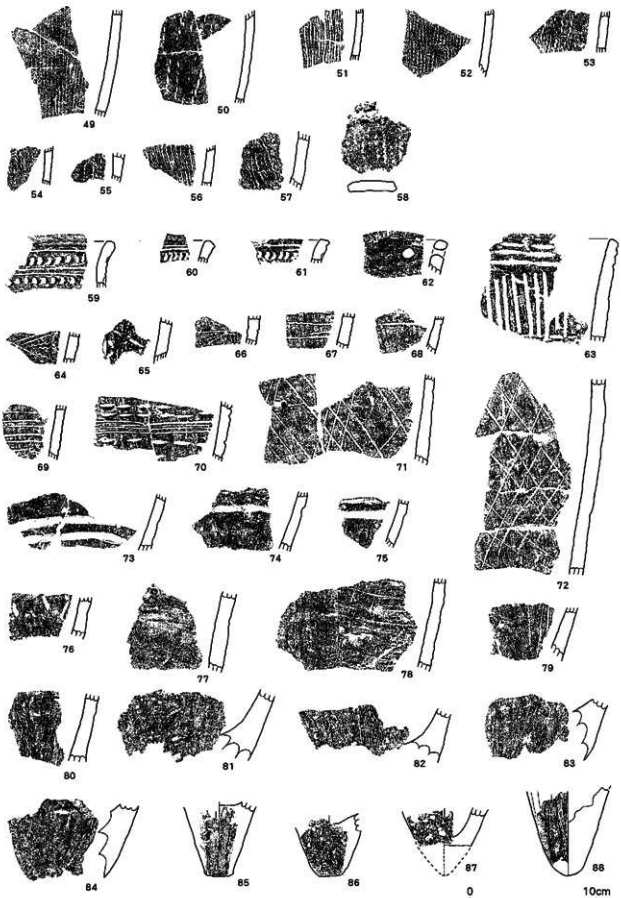
第14図　礫群群等出土状況図



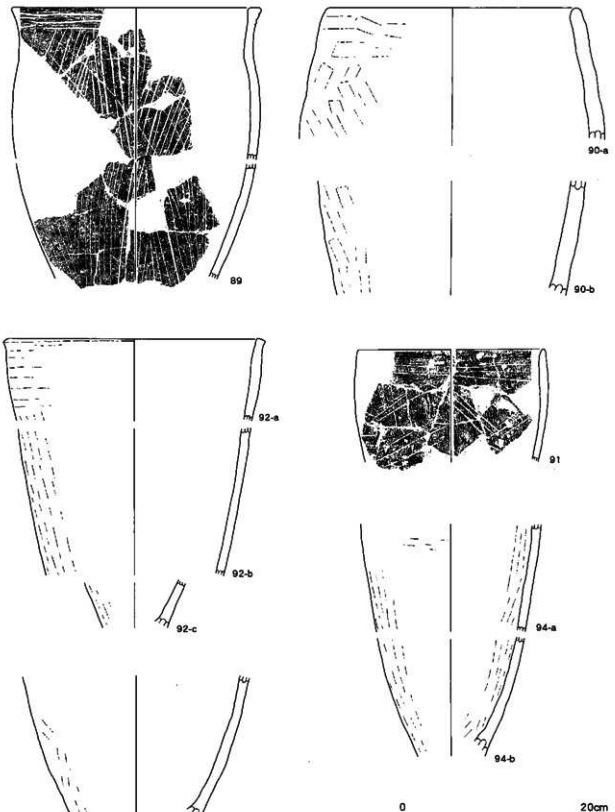
第15図　石器製作跡・阿玉台式土器出土状況図



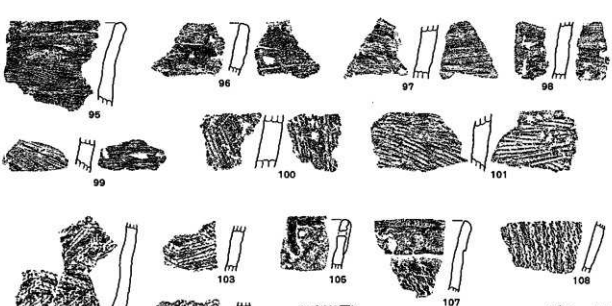
第16図　第１地点出土土器（１）



第17図　第１地点出土土器（２）



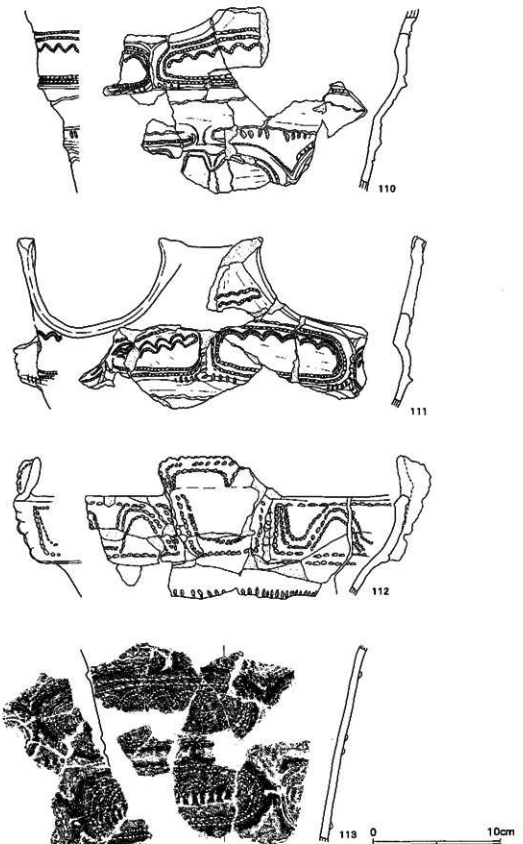
第18図　第1地点出土土器（3）



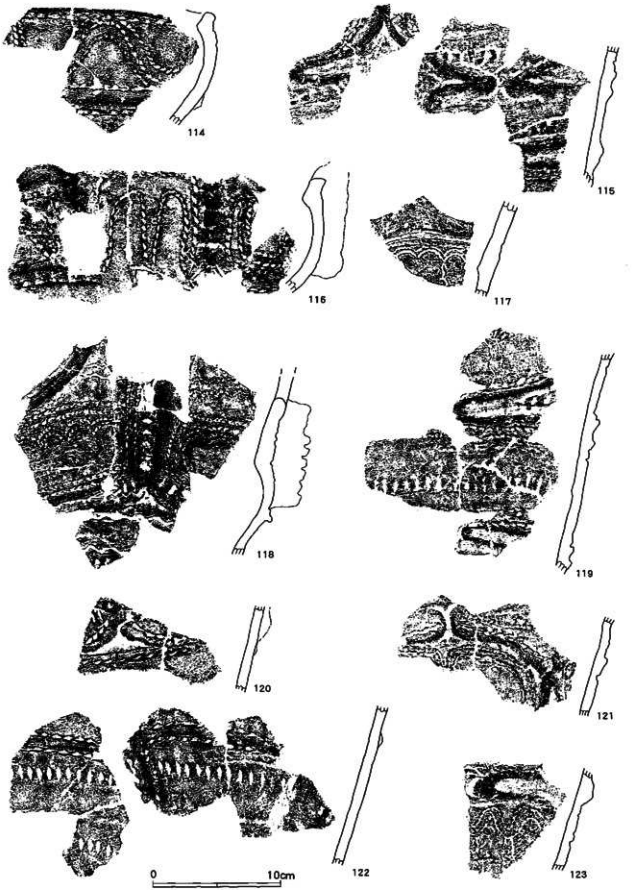
第19図　第1地点出土土器（4）

3J区で、第14図に示したように礫群と重複するような検出状況であった。特に3J・24グリッド周辺では後述する無文土器群が集中的に出土した。これらの底部はすべて尖底となるものと思われる。沈線文系土器群の文様は5～6mm幅のヘラ状工具を斜めに押しつけ器面を一周させるもの（59～61、60・61は同一個体）や貝殻腹縁を用いたもの（64～66）の他に、太い沈線を大胆に縦横に施文するもの（63・73～75、73～75は同一個体）や細い沈線で器面を飾るもの（67～72、89・91、71・72は同一個体）などが見られる。89の一括品は底部を欠損するが、ほぼ器形を推測できるまでに復原できた。口径は26cmほどとなり胴部最大幅と一致する。平坦な口縁部の作りが特徴といえよう。口辺部には細い3条の沈線を巡らした後に縦方向の沈線を器面全体に施している。色調は淡い赤褐色で胎土には白色系の小石が含まれる。焼成は良好で、内面もヘラによりきれいに整形されている。91も同様な工具で施文されており、口唇部は丸味をもたせた作りで、口辺には1と同様に2～3条の沈線が巡る。口径は推定20cmほどで、遺存は口縁から胴部にかけ約2/5程度である。胴部は緩らに沈線を斜行させるのみとなる。器内外面の色調は淡褐色で、胎土は精選され、内面は磨きによりきれいに調整されている。時期的には田戸下層式に包括できるものである。

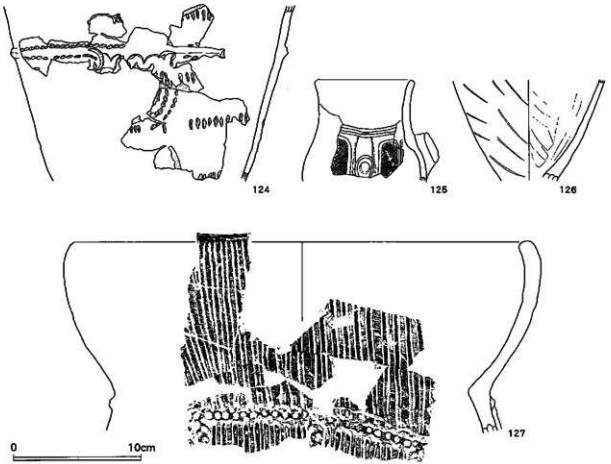
この他に無文の一括品が3J区から数点出土している。90は胴上半部に最大径を有するもので、口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。器厚は15mmほどで、他の土器と比較すれば一段と厚みを増し頑強な作りとなっているが、器面は簡単な整形にとどまり粗雑な仕上げで粗製土器を思わせる。口縁部径は推定約27cmで1/5程度の遺存である。胴部片との接点は認められなかった。色調は褐色を呈し、焼成は甘く内面では剥落が認められる。92～94は同様な形状の深鉢形土器で、底部付近の作りから尖底となることは間違いあるまい。92の口唇部などは89と共通する作りである。胎土も白色を呈した砂粒が混入されている。



第20図　第１地点出土土器（５）



第21図　第1地点出土土器（6）



第22図　第1地点出土土器（7）

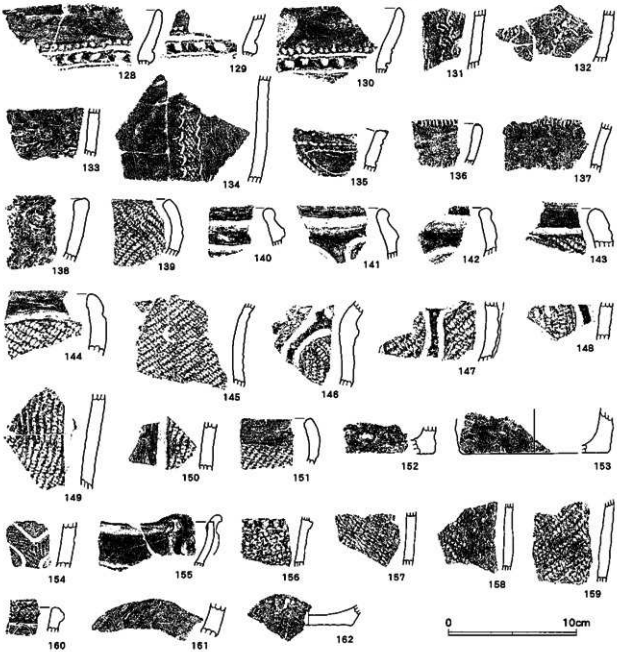
口径は推定約27.5cmで1/5程度の遺存であった。遺存した部位から考えると、器高は45cmから50cm程度はあったものと思われる。いずれも器面は赤褐色を呈し、表面は5mm幅ほどのヘラで丁寧に調整されている。内面の整形も同様に仕上げており、焼成も良好である。以上が無文土器群の内容であり、時期的には上述した田戸下層式の一群としてよいであろう。

条痕文系の土器群（第19図95～101）　2・3J区などから若干出土している。95～99の器面整形は比較的丁寧に施されている。内面での条痕も認められない。95と97は器面が淡い褐色でヘラ状工具での整形が共通しており同一個体と見做される。100・101は胴部片で内外面が条痕により整形されている。

前期（第19図102～109）　前期に比定できるものの出土は少ない。102・103は同一個体である。102は3片が接合したもので3J－05・14グリッドから出土している。原体Rの撚糸2本を一組として器面に押捺したもので菱形の文様を形づくる。104も同じような文様構成となり、胎土には繊維が混入されている。これらは関山式となろう。

105・106はともに口縁部片で、105は口縁直下に3cmほど薄い粘土帯を貼付し、口縁と平行に1条の撚糸を押しつけている。また、粘土帯の脇には焼成前穿孔が認められる。106は半截竹管による平行沈線間に撚糸状の押捺が加えられる。いずれも諸磯A式となろう。

107・108は3K－24グリッドから出土したもので器面に貝殻腹縁を上下・左右に移動させつつ施文しい



第23図　第１地点出土土器（８）

る。折返し状の口縁が特徴的であり、器面の整形は粗雑に仕上げている。109は貝殻腹縁の一部を縦方向に押捺している。浮島系土器の特徴がよくあらわれている。

中期（第20～23図110～125・127～152）　中期に属する土器群もそれほど多いものではなかったが、阿玉台式期に限り実測可能な大形破片が10数点出土している。出土地点は２J－59グリッド（第15図参照）が主体であり、遺構の存在も否定できない出土状況を示していた。

128～134は中期初頭の五領ヶ台式・下小野式に該当する。128～131・134は同一個体の可能性が強い。出土地点は２J－09グリッドを中心に同･79･87･98グリッドとなっている。128は２J－09と79グリッド出土の２点が接合したものである。口辺部では沈線と円形刺突文を組み合わせており、胴部以下は結節した

RLの原体を縦方向に施文し帯状の文様を作出している。器面の色調は淡い褐色ないし暗褐色を呈しており、無文地の部分では軽くヘラで撫でて整形している。132・133も結節状文を器面に施文しているが、前者と異なり方向は一定していない。

110～124・135～138は阿玉台式に分類できるものである。出土地点は2J－59グリッドを中心に隣接する2J－49グリッドや2K－50グリッドなどであった（第14図参照）。主に器形は把手を有した深鉢形土器で、隆帯によって枠組みされた中を2㎜～3㎜幅のヘラ状工具により1条ずつきれいに曲線を描いている。胴部にみられるヘラの幅は広く10mmほどのものを使用している。胎土には雲母・小石などが混入されている。これらの土器群の多くは施文法からⅠ式でも新しいタイプに属するものとなろう。

125・139～152は加曽利E式期の一群である。125は小型品でほぼ器形を想定できるもので胴部に把手を付している。3K－12・22グリッドから一括出土した。撚糸原体は細く緻密な複節のRLとなる。文様は把手を中心に浅い沈線を巡らし沈線間の縄文は擦り消されている。他の破片も渦巻文の一部や力強い沈線を用いた施文から加曽利EⅡ式となろう。これらの出土地点は散漫で集中したものではなかった。器面に施文された縄文は比較的密に撚られている。また151は口辺部に微隆起が認められる波状口縁部で終末期に位置づけられるものである。

127は推定復原の口径が48.5cmを計測する大型の深鉢形土器となる。2J－94・95、3J－04・05・06・15・16・27の各グリッドから19片が出土した。文様は頸部に1条の粘土帯を巡らした後、さらに底部に向けて粘土紐を貼付し、その上を指頭による押捺を加える。最後に器面整形を兼ね半截竹管で空白部を充填する。大型のため器厚は13mm～15mmとなり、焼成も良好であった。色調は表面が淡褐色、内面は褐色を呈している。前記の土器群に伴う信州を基盤とした曽利系の土器となろう。

後期（第22図126、第23図153～152）　この時期の土器群も僅少で小破片のみ出土であった。出土地点も疎らであった。

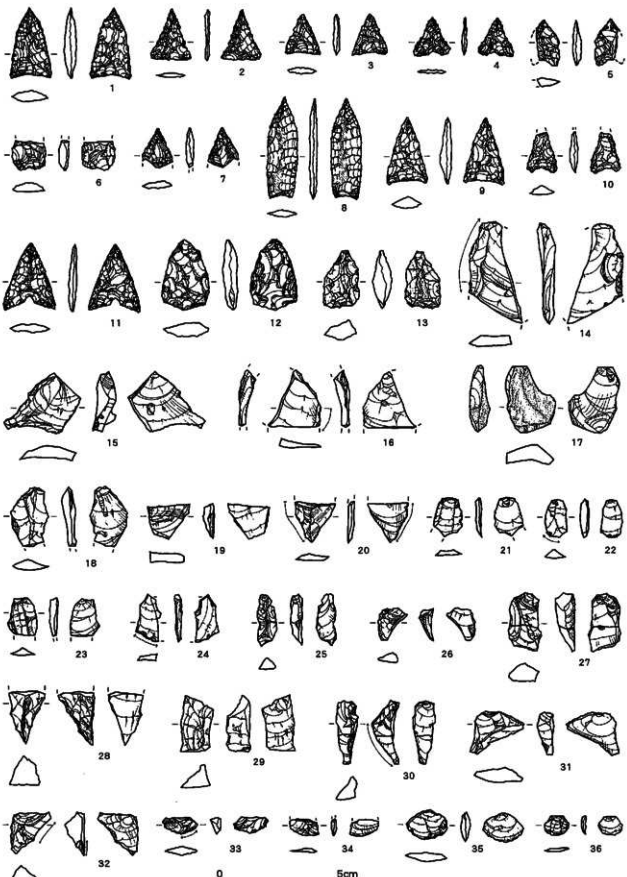
154は太い沈線によって区画された中に浅く縄文が施文されたもので称名寺式である。

153・155～159は縄文原体の撚りから加曽利B式と見做される。153の底部は滑らかな器面の状態であるためここに含めた。155は精製品で、遺存部に文様はみられない。小型の鉢か椀形を呈した器形となろう。156～159は粗製土器となろう。

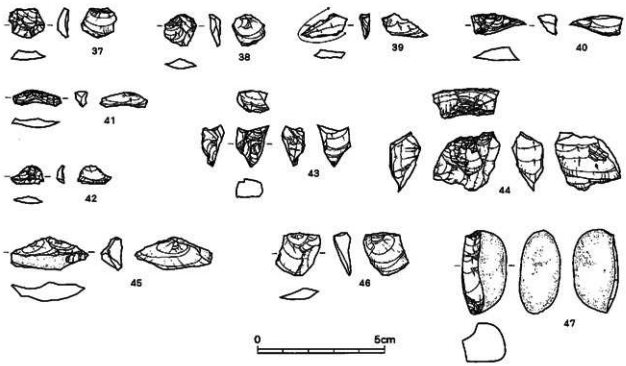
126・160～162　160は口縁部に粘土紐を貼り付け、その表面に縄文を施文しており、直下に曲線を描いているようである。おそらく安行式期に属するものである。第22図126は胴下半部から底部にかけて遺存したもので、浅い沈線が斜行する。器厚も薄く、基底部はやや角張ったように整形されている。162も同様な作りである。安行期の紐線文系の粗製深鉢形土器となろう。

石器（第24～27図）　前述したように本地点では石鏃の他に多数の剥片・砕片が2J区を中心に出土しており、いわゆる石鏃等の製作跡として考えられた。そのため剥片類についてもできる限り掲載するようにした。

石鏃（第10図1～13）　石鏃は計13点出土しており、その形状は一定していない。使用石材については、黒曜石が7点（1～7）、チャートが6点（8～13）となる。1はきれいに整形されたもので基部も弓形に丁寧な調整が加えられる。先端部に特徴がみられ、いわゆる五角形鏃に近い。2～4は三角形を呈しており、2の基部は直線的につくられる。2・4は半透明の黒曜石を素材としている。5～7は欠損品となる。いずれも作りは概して粗雑である。8は縦長の薄い剥片を素材としたものである。表裏ともに入念な



第24図　第1地点出土石器（1）



第25図　第１地点出土石器（２）

押圧剥離により整形し、表裏面の中央部には研磨の痕跡が若干認められる。基部は弧状に調整剥離を施している。その形状から時期的には草創期特有の石鏃と見做される（注）。９は二等辺三角形を呈し、基部の作りは１と同様なものとなる。11の形状も特徴的で基部は深く抉るようにつくられている。12・13は、その作りから未成品とも考えられるが、12の基部はやや舌状形ともいえよう。調整痕も認められるため成品となろう。

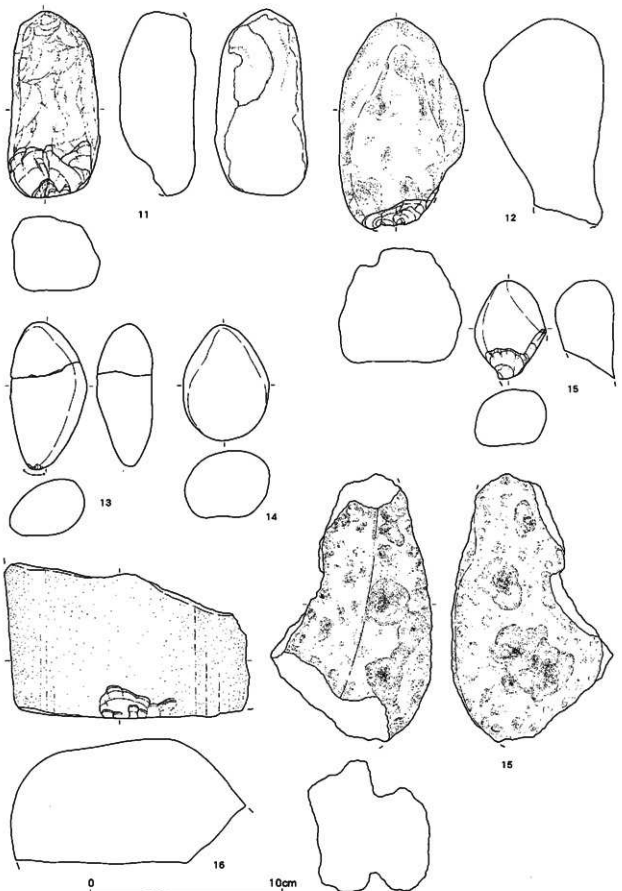
剥片（第10図14～42・45・46）　剥片類は砕片まで含めると約150点が出土し、使用の痕跡が認められるものを中心に図示した。14は幅広の大型片を素材としており、側面の切断面７cm前後の剥片であったようである。裏面では二次剥離が認められ、不純物含有部から折れている。このため下部の折れは使用時に生じたものとなろう。15は下部の両側縁に微細な調整痕が認められる。17は自然面が広く残り、側面での剥離部に使用痕がみられる。20～26でも側縁部を中心に二次剥離・使用痕といった痕跡が認められる。28は下端部を石器として使用することもできるが、剥離面の観察から残核の一部と思われる。33・35では小剥片であるにもかかわらず微細な調整剥離痕が認められる。

石核（43・44・47）　石核の部類に含めたものの形状は小さくすべて残核となろう。43は分厚い剥片からさらに剥離を加えたものである。44は平坦な面を打面とし、一方向からかなりの回数敲打している。残った剥離面から考えると有効な剥片剥取はできなかったようである。47はチャートの小礫に敲打を加えたものである。加工痕が認められないため石核として取り扱った。

石斧（１）　石斧類として唯一の出土品である。表面の一部は研磨されている。使用により破損した磨製石斧を再利用したものであろう。刃部は両面からの大きな剥離によって作出されている。

注　橋本勝雄2008「『木葉形尖頭器』雑考 - 縄文時代草創期における新たな器種の登場 - 」『石器に学ぶ』第10号　石器に学ぶ会

第26図　第１地点出土石器（３）



第27図　第１地点出土石器（４）

磨石（2～5）　磨石は4点出土した。いずれも欠損品であり、2の表面は使用による滑らかな面となり、4の側面では敲打痕が観察できた。

敲石（6～15）　敲石と考えられるものは10点出土しており、6・8は磨石と兼用している。7・10は下部にしっかりとした打痕がみられる。9は軟質の砂岩を用いているため表面は剥落しているような感を呈する。11・12は敲打により破損が生じたものである。13～15は僅かな打痕が観察できるのみである。

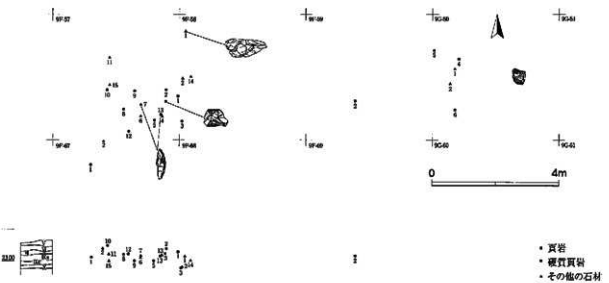
石皿（17）　石皿の破損品が1点みられた。表裏面には数か所の凹部が認められる。

石棒（16）　16は石棒の破片となろう。欠損しているため正確には把握できないが、径は12～13cmと推測できる。中期の所産と思われる。下部には打痕が認められることから破損品を再利用したものであろう。

　以上が本地点から出土した石器群であり、これらの石器類が使用された時期については正確に把握することはできないが、剥片を多量に出土した石器製作跡やそれに近接して出土した土器群を考慮すれば中期の阿玉台式期に属するものが多いものと考えられる。

第2表　第1地点縄文時代出土石器観察表

挿図番号	器種	出土地点	石材	重量(欠損品)	備考
24-1	石鏃	2J-69	黒曜石	1.67	
24-2	石鏃	3J-15	黒曜石	0.40	
24-3	石鏃	2K-31	黒曜石	0.40	
24-4	石鏃	2J-38	黒曜石	0.24	
24-5	石鏃	2K-72	黒曜石	(0.53)	
24-6	石鏃	2K-41	黒曜石	(0.75)	
24-7	石鏃	2J-49	黒曜石	(0.44)	
24-8	石鏃	3J-15	チャート	1.53	縄文時代草創期
24-9	石鏃	2K-71	チャート	1.29	
24-10	石鏃	2K-50	チャート	(0.55)	
24-11	石鏃	3J-13	チャート	1.24	
24-12	石鏃	3J-23	チャート	2.83	
24-13	石鏃	2K-50	チャート	2.01	
24-14	剥片	2K-41	黒曜石	3.75	
24-15	剥片	2K-41	黒曜石	3.33	
24-16	剥片	2K-50	黒曜石	1.26	
24-17	剥片	2K-53	黒曜石	3.41	
24-18	剥片	2J-58	黒曜石	1.51	
24-19	剥片	2J-59	黒曜石	0.88	
24-20	剥片	2J-59	黒曜石	0.50	
24-21	剥片	2J-59	黒曜石	0.33	
24-22	剥片	2J-58	黒曜石	0.32	
24-23	剥片	2J-49	黒曜石	0.35	
24-24	剥片	2J-49	黒曜石	0.52	
24-25	剥片	2J-48	黒曜石	0.61	
24-26	剥片	2J-49	黒曜石	0.50	
24-27	剥片	2K-40	黒曜石	2.22	接合(同一グリッド内)
24-28	剥片	2J-59	黒曜石	2.39	
24-29	剥片	2J-69	黒曜石	2.10	
24-30	剥片	2K-41	黒曜石	1.28	
24-31	剥片	2J-48	黒曜石	1.52	
24-32	剥片	2K-51	黒曜石	1.18	
24-33	剥片	2J-69	黒曜石	0.31	
24-34	剥片	2K-31	黒曜石	0.13	
24-35	剥片	2J-49	黒曜石	0.58	
24-36	剥片	2J-58	黒曜石	0.13	
25-37	剥片	2J-58	黒曜石	0.65	
25-38	剥片	2J-58	黒曜石	0.49	
25-39	剥片	2K-50	黒曜石	0.41	
25-40	剥片	2J-58	黒曜石	0.93	
25-41	剥片	2J-48	黒曜石	0.46	
25-42	剥片	2J-48	黒曜石	0.19	
25-43	石核	2J-49	黒曜石	1.45	
25-44	石核	2J-48	黒曜石	6.28	
25-45	剥片	2J-48	頁岩	2.64	被熱
25-46	剥片	2J-69	硬質頁岩	1.45	
25-47	石核	2J-93	チャート	12.54	礫層礫
26-1	磨製石斧	2K-21	安山岩	(197.71)	磨製石斧の再利用
26-2	磨石	2J-94	流紋岩	(124.51)	被熱
26-3	磨石	3J-25	安山岩	(110.27)	
26-4	磨石	3J-24	砂岩	(289.70)	被熱
26-5	磨石	3J-13	砂岩	(167.72)	
26-6	敲石	3J-05	石英斑岩	99.58	被熱
26-7	敲石	3J-17	砂岩	134.44	
26-8	敲石	3J-06	砂岩	(220.52)	
26-9	敲石	2J-96	砂岩	(44.39)	
26-10	敲石	2K-54	安山岩	(37.64)	
27-11	敲石	3J-05	砂岩	270.92	
27-12	敲石	2K-40	石英岩	541.08	
27-13	敲石	3J-04・06	流紋岩	108.87	接合・被熱
27-14	敲石	3J-29	チャート	135.98	
27-15	敲石	3I-78	流紋岩	(68.86)	
27-16	石棒	3J-22	安山岩	(1,100.00)	
27-17	石皿	3J-42	安山岩(多孔質)	(700.00)	



第28図　第２地点石器出土状況図

第２地点

１．旧石器時代（第28図～第30図）

本地点では、確認調査により４か所で石器の出土が確認された。その後、周辺を拡張し精査した結果、小規模ながらも２か所で石器群の広がりを確認できた。他の２か所については単独出土品として取り扱うこととした。

石器集中１（第29図１～５）

概要　１から４は９G－50グリッドにおいて第Ⅸ層で出土したものである。ここでは使用された石器として、楔形石器と調整が加えられた剥片が出土している。なお、５については９G－70グリッドで第Ⅲ層から出土したものであるが、石材が共通していたためここに掲載した。石材は、４が玉髄で、他は頁岩となる。

楔形石器　１は楔形石器で、上下両端に粗雑な剥離が認められる。

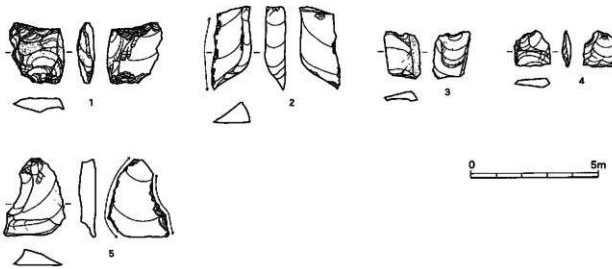
剥片　２は側縁の両面に微細な調整痕がみられる。石器として使用されたものであろう。３・４での加工は認められない。５は左右の側面で調整痕が施される。裏面右下部の剥離は整形のためのものである。

石器集中２（第30図１～10）

概要　本地点で出土した石器群は、ある程度の纏まりをみせている。分布範囲は９F－57・58・67グリッドに及び、合計27点が第Ⅵ層～第Ⅸ層にかけて出土している。これらの中には図示した９のように残核に剥片が接合した資料もみられた。なお、出土状況図については斜面部にあたるため若干の誤差が生じていることを付記しておく。成品としてはナイフ形石器・削器・楔形石器などがみられ、石材には硬質頁岩が多用されていた。

ナイフ形石器（１）　同一グリッドから出土した２点が接合したもので、基部は彎曲するほど大きく整形しており、破損後も左側縁に調整剥離を施している。

削器（２）　形状は整っていないが、裏面右側縁を数回の剥離で刃部に加工している。打点部は両面から



第29図　第２地点出土石器（１）

きれいに削除されており、楔形石器としても使用されたようである。

楔形石器（5）　表裏面の上下を小さな剥離で整形し、鋭い刃部を作出している。典型的な楔といえよう。右側縁部の突出部にも微細な調整の痕跡が認められる。

剥片（３・４・６～８）　５点を図示したが、４・７の剥片は薄く剥離されたもので２と同様な石質を呈しており同一母岩から剥取されたものと考えられた。おそらく打点部を薄く剥離したときに生じたものであろう。

石核（９・10）　９は３点が接合したもので、石材には安山岩を用いている。表面は若干風化しており、石質的には石器石材として適さないようである。自然面らしき部分は観察できないため比較的大きな原石と思われた。10は嶺岡頁岩と称されている石材で、打面部では２～３回の調整剥離が認められる。しかし、実際剥離された面では凹凸が著しく良好な剥片が得られたとは思われないような残核である。

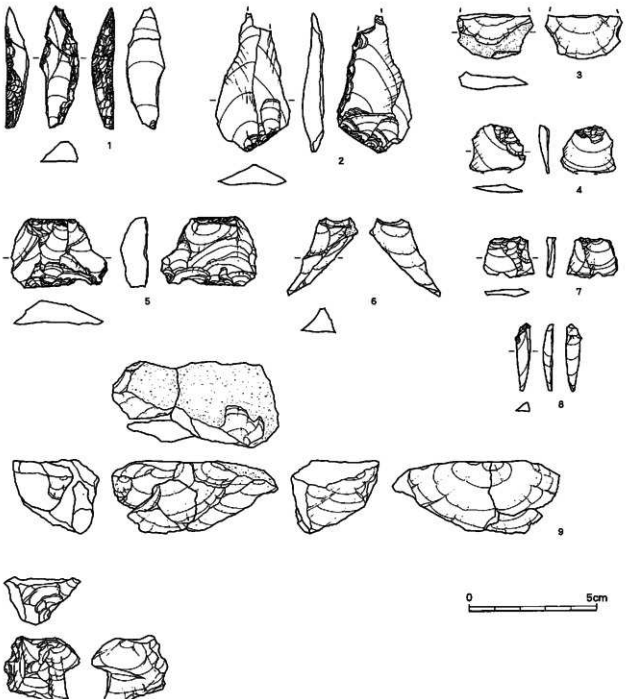
以上が本地点で出土した旧石器時代に属する石器群である。ここでは２地点に分離して記載したが、出土状況等をみると時期的に分離できるか、あるいは同時期の所産となるか今ひとつ明確ではなかったので上記のような形で掲載した。

単独出土の石器（第31図１～４）

これらの石器は試掘時に出土したものである。拡張区を設定し調査を継続したが、周辺での出土は確認できなかった。なお、これらの石器については地点別に扱うことはせず、一括して記載する。

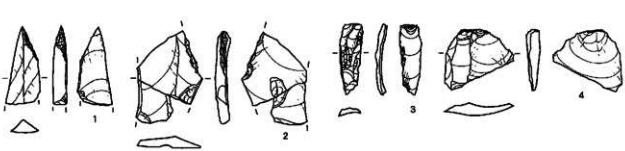
ナイフ形石器（１）　2J－59グリッドで縄文包含層から出土した硬質頁岩製のナイフ形石器であるが、旧石器集中地点の石材と異なるためここに含めた。欠損品で、先端部に刃潰し痕が加えられている。裏面の左側縁にも微細な調整痕が認められる。

剥片（２～４）　２は7C－27グリッドにおいて、クラムシェルによる下層確認中に第Ⅸ層から出土した剥片で出土時に破砕したものである。３は7E－07グリッドで第Ⅲ層上面から出土している。上部が切断された縦長剥片で、裏面には微細な剥離痕が認められる。黒曜石製で、その形状から細石刃とも思わ



第30図　第２地点出土石器（２）

れる。４は２Ｊ－78グリッドにおいて第Ⅱ層から出土した頁岩製の剥片で使用痕等は認められない。他に４Ｊ－02グリッドから剥片が確認されたが図示は省略した。



第31図　単独出土の石器

第３表　第２地点旧石器時代出土石器観察表

出土地点・遺物番号	挿図番号	器　種	石　材	重　量	備　考
9F-57 001		剥片	頁岩	1.20	
＊ 002	30-4	剥片	頁岩	1.02	
＊ 003	30-5	楔形石器	硬質頁岩	3.20	
＊ 004		剥片	砂岩	1.10	
＊ 005		剥片	頁岩	1.35	
＊ 006		剥片	細粒安山岩	0.74	
＊ 007	30-1	ナイフ形石器	硬質頁岩	5.61	9F-57 013と接合
＊ 008	30-8	剥片	硬質頁岩	0.39	
＊ 009		剥片	頁岩	1.47	
＊ 010	30-7	剥片	頁岩	0.80	
＊ 011		剥片	雲山岩	1.44	
＊ 012		剥片	頁岩	5.43	
＊ 013	30-1	ナイフ形石器	硬質頁岩	－－	9F-57 007と接合
＊ 014		剥片	斑糲岩	1.55	
＊ 015	30-3	剥片	黒色安山岩	3.56	
＊ 016-1	30-2	剥片	硬質頁岩	9.42	
＊ 016-2		剥片	硬質頁岩	7.27	
＊ 017	30-9	石核	細粒安山岩	60.97	9F-58 001と接合
9F-58 001	30-9	剥片	同上	－－	9F-57 017と接合
＊ 002	30-6	剥片	黒色安山岩	3.55	
＊ 003		剥片	頁岩	0.48	
9F-59 002		剥片	硬質頁岩	0.29	
9F-67 001		剥片	頁岩	0.10	
＊ 002	30-10	石核	珪質岩	12.41	横岡頁岩
9G-50 001	29-2	使用剥片	硬質頁岩	3.47	
＊ 002		砕片	チャート	0.21	
＊ 003	29-4	剥片	メノウ	3.81	
＊ 004	29-1	楔形石器	硬質頁岩	3.81	
＊ 005	29-3	剥片	硬質頁岩	0.95	
9G-70 001	29-5	剥片	硬質頁岩	3.54	単独出土
2J-59 117	31-1	剥片	硬質頁岩	1.76	同上
2J-78 002	31-4	剥片	硬質頁岩	2.45	同上
7C-27 001	31-2	剥片	硬質頁岩	3.25	同上
7E-07 001	31-1	剥片	黒曜石	0.56	同上

２．縄文時代

本地点で明確な遺構については検出できなかったため、以下、出土した土器と石器について記述していく。

（１）土　器（第32図～第46図）

第２地点として調査した遺跡の南側部分では、縄文時代に伴う遺構は精査したものの検出することはできなかった。土器群については、以下に記述するように早期の撚糸文系土器・条痕文系、前期～晩期まで断続的に出土しており、量的には条痕文系土器群が卓越していた。また、後期の加曽利B式では10点ほど

の一括品が纏まって出土している(第３図参照)。一方、本地点における礫群の出土は皆無であった。以下、土器群を時期別に記載していく。

早期（第32図１、第37図20～42）　早期の土器群は少量の撚糸文系土器と大量の条痕文系土器群で占められていた。出土地点についてみると、前者は6・7・8Ｈ区、6・9Ｇ区などで疎らにみられる程度であった。後者は7・8Ｈ区、8Ｇ区に集中的に出土した。図示できた一括品（1）は8Ｇ－47グリッドを中心として同48・49・57グリッドに散っていた。

撚糸文系土器群（20～42）　本地区で出土した土器群では、器面に縄文を施文したものと撚糸施文の二者がある。20～23、34～37は前者で20のみ口縁直下に再度施文している。21は太さの異なる原体を撚り合わせたものである。36・37は同一個体である。原体の撚りはRL（20・21・35）で、その間隔は粗いものとなる。24～33、38～42は撚糸施文で、間隔の密なもの（38・40）、粗いもの（27・39・42）、斜方向の施文（41）等がある。なお、42は底面が顕著に磨耗しており、後世において鉄器類の研磨に使用されたものと考えられる。器面の色調は赤褐色ないし褐色を呈したものが多く、黒褐色のもの（25・31～33）は少ない。時期的には夏島式から稲荷台式に位置づけられよう。

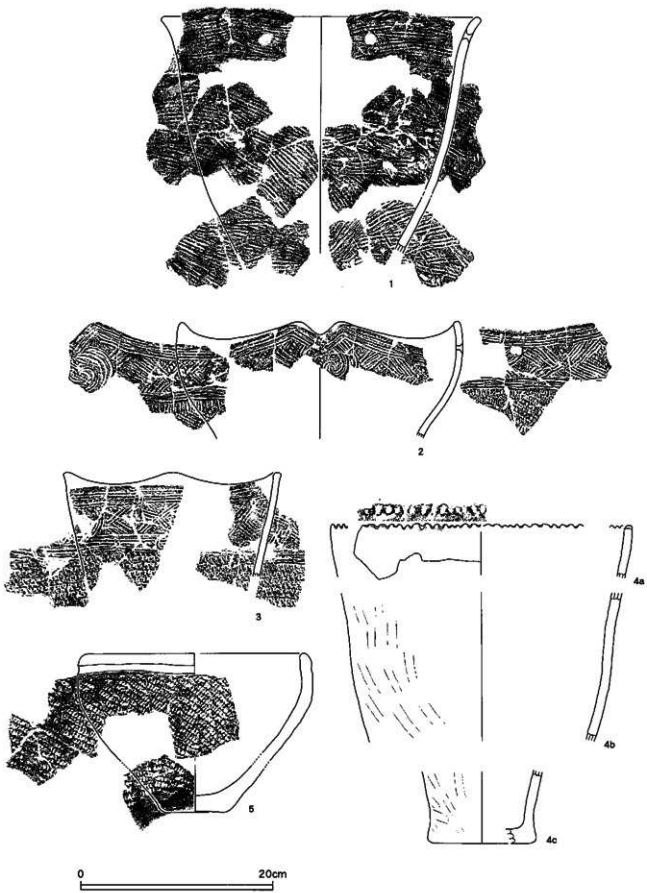
沈線文系土器群（43）　9Ｈ－41グリッドから１点のみの出土している。口辺部片で格子状に細い沈線で器面を飾る。色調は淡褐色で、胎土には石英粒や僅かな雲母が混入されている。田戸下層式となろう。

条痕文系土器群（1、45～175）　7・8Ｈ区と8Ｇ区は条痕文系土器群の包含層ともいえる様相を呈していた。これらの土器群は胴上半部に文様がみられ胎土に繊維を多量に含む。これらは施文具により数種に分類できる。

１の深鉢形土器は、唯一復原実測が可能となったものである。推定口縁径は33.5cmを計測し、胴部は丸味を有し、口縁は外反する。内外面は密な条痕文で覆われ、口唇部にも条痕の痕跡が認められる。器面の色調は淡い赤褐色から暗褐色を呈し、焼成は他と比較すれば良好といえよう。口辺部での孔は焼成後に穿たれたものである。時期的には後述する土器群よりも器形的には新しいものとなろう。

45～68は、口縁直下に指頭で波状文を作出したものである。口唇部には刻目を付し、口縁は波状を呈するタイプが多い。その頂部は64にみられるような楕円状のものもある。胴部には48・63のように粘土帯を貼付し、緩い逆「く」の字状の段をつくる。69～93は口辺部にヘラ状工具や竹管などを組み合わせて使用し文様を形づくる。69・70は同一個体となり、胴部には粘土帯貼付により２段の隆帯を形成する。またヘラ状工具は多様に用いられ曲線で表現される(72・76)こともある。口唇部にはヘラによる刻目文が施され、裏面にまで及ぶもの（72）も認められる。幅の狭いヘラや竹管状工具は、口辺部や隆帯上に押し引きや刺突により施文され（80～92）幾何学的な文様を作出している。93は半截竹管を口辺部に平行に引いている。94～160は口辺部を条痕で充填したもので、口唇部や隆帯には刻目あるいは棒状工具で押捺している。97・113・115の刻目は装飾に付されている。なお、隆帯には刻目の認められないもの（146・158～160）もある。158・159は同一個体となる。ここでの条痕施文は精緻なもの（150・153・157）は少なく、概して粗雑な施文が多い。161～175は底部片を集めたものである。底部の作りは平底（162・164）や上げ底（163・166）の他にやや彎曲したもの（161・167）など一定していない。175は唯一尖底となる。条痕施文は底部（163・164・170）にも及ぶ。162の条痕は表面にはなく、内面と底部に認められる。以上が大量に出土した条痕文系土器群であるが、その大半は器形・施文具等から茅山下層式に属するものである。

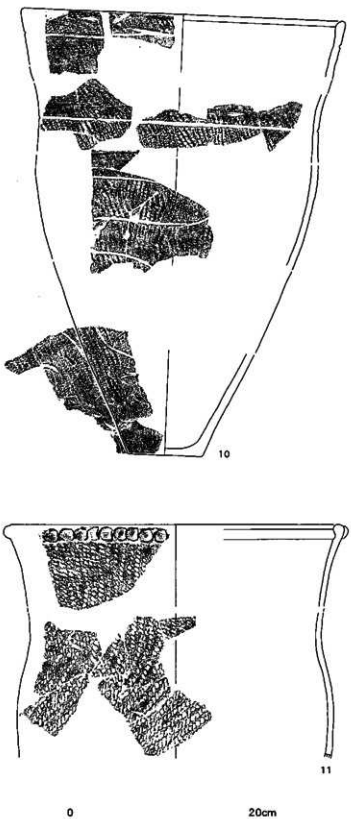
前期（第32図２～４、第44図176～213）　前期の土器群では３点ほど接合により器形を窺うことのできる



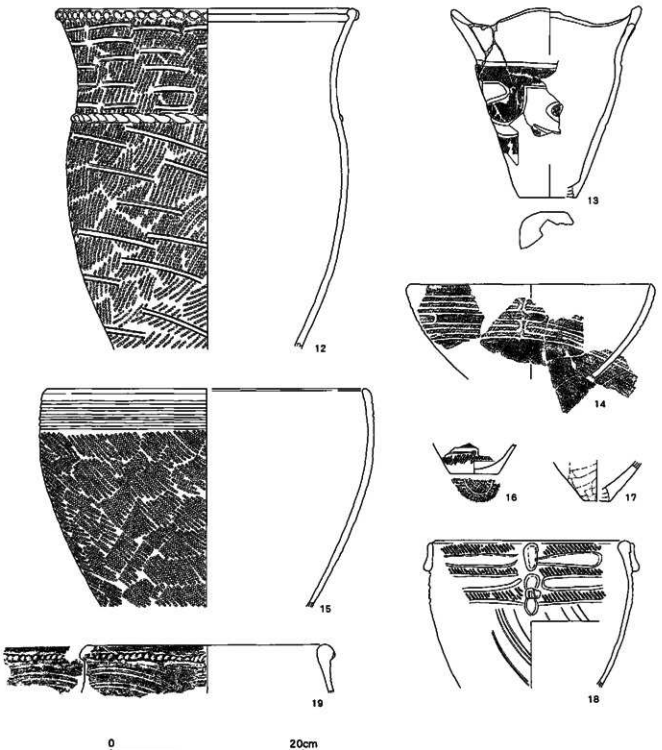
第32図　第２地点出土土器（１）

第33図　第２地点出土土器（２）

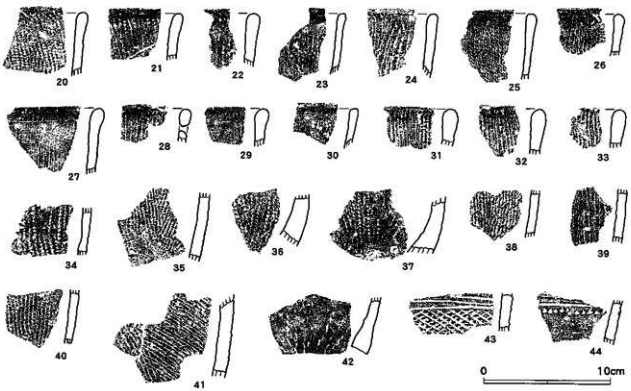
第34図　第２地点出土土器（３）



第35図　第２地点出土土器（４）



第36図　第２地点出土土器（５）



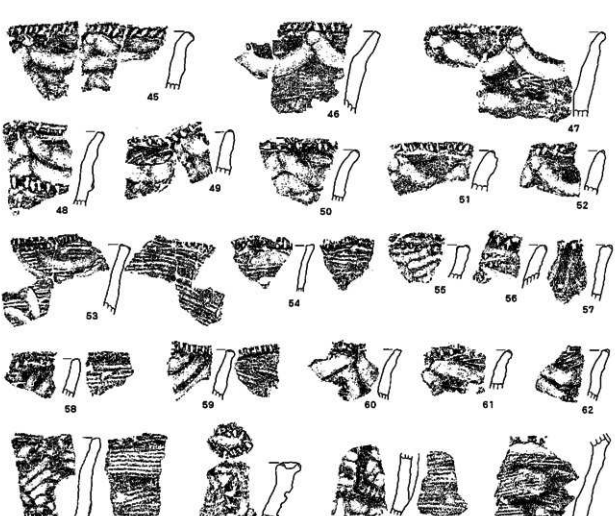
第37図　第２地点出土土器（６）

深鉢形土器が出土した。２は８G－59グリッドを中心に同47･49･58･59･68グリッドで出土し、３も８G－59グリッドで多く同47･58グリッドや８H－60や10D－60グリッドでも１点接合している。４は７H－91･92中心で同81･82･90グリッドに及んでいた。こうした広範な散布は第４章で報告する江戸時代に構築された野馬土手の造営に起因するものであろう。

２は口縁部のみが遺存したもので、口辺には半截竹管により幾何学的な文様が表現される。口縁は波状を呈し、頂部では緩やかな「V」字を形成する。施文されている縄文は、撚りの異なる単節の原体を２本撚り合わせたものとなる。器面の色調は淡褐色ないし黒褐色を呈し、この時期の土器としては焼成は良好といえる。器厚も５mmほどとなり薄い。

３は緩やかな波状を呈した口縁部を形づくる。口辺部の文様帯は２と同様で、以下は縄文原体の末端部を上から下へ移動させつつ器面に施文する。色調等も２と変わらない。

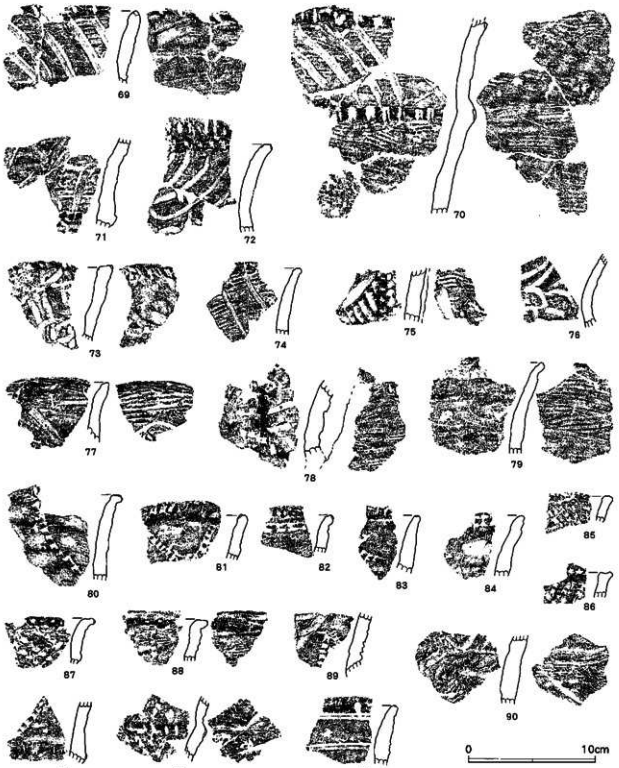
176～182は、179を除き口縁部で、口唇部には半截竹管を押圧し刻目状の文様を付す。178は大きくひらく口縁となる。口辺部は原体の末端部を利用したループ文で満たす。178･179の胴部では羽状縄文がみられる。183～188は胴部以下の破片であり、器面には撚りの異なる原体を用いて羽状縄文を形成する。189～191は頸部を原体末端や半截竹管文を施し、以下は器面を異条縄文で覆う・197･198は同一個体と思われる。異条縄文の上を幾何学文で飾る。200は密な節が特徴であり、RLの原体部分はLの条３組を合わせたものであろう。201～203は底部で、202･203は上げ底となり異条縄文の施文が及ぶ。この種の土器群では、いずれも胎土に多量の繊維が混入され概して脆い。施文法などから関山式でも新しいタイプとなろう。



第38図　第２地点出土土器（７）

204は器面の多方向に細い沈線を巡らす。205はR撚りの原体を２本一組として器面に回転させている。206も間隔を粗くしたR撚りの原体を器面に回転させたものである。207～209はRLの原体を横方向に回転させたもので間隔は前者と比較し密となる。210は短い原体を使用したもので器面に軽く回転させている。本土器群も胎土に繊維を含んでいる点と器面の文様から黒浜式となろう。

４は大型の深鉢形土器で、小破片80点あまりが出土し接合したものである。しかし復原できるまでには至らなかった。器高は底部の大きさから推測すると45cm程度となろう。器面は整形後、一部に調整痕を残す。それに比べ内面の作りは粗雑で底部には凹凸が残る。器面は無文で平縁の口縁となる。口唇部には棒状工具で１cm間隔に刻目を施している。型式認定に迷うところであるが、胎土に繊維の混入はなく平

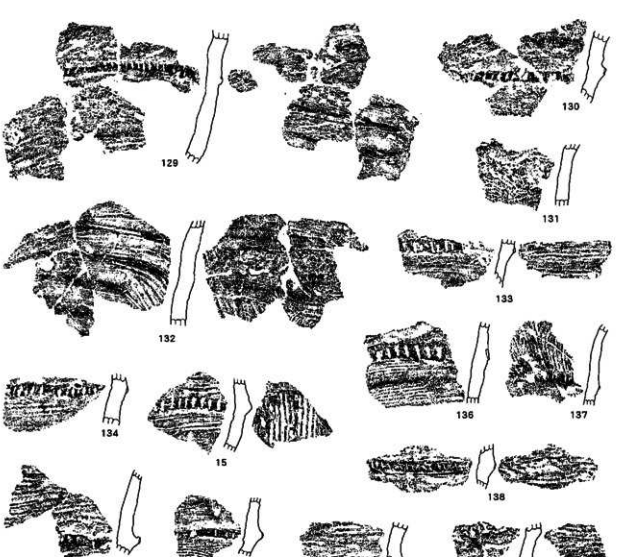


第39図　第２地点出土土器（８）

底という点から浮島系の一群と考えた。

211・212は波状口縁を呈するタイプで櫛歯状工具を用いた文様で器面を飾る。213は半截竹管を連続的

第40図　第２地点出土土器（９）



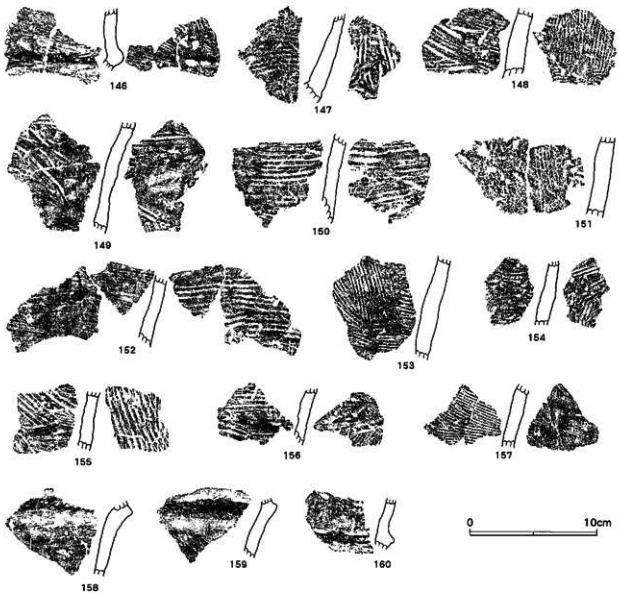
第41図　第２地点出土土器（10）

に押し付けたもので、内外面ともにきれいに仕上げられている。214・215は貝殻腹縁を連続的に横方向に転回させたもので浮島式土器の特徴をよく表している。出土地点は７G－77と８G－08グリッドであるが同一個体であろう。ともに色調は淡褐色で、焼成も良好である。

中期（第32図５、第37図44、第45図216～229）

44は、７H－51グリッドから出土した。竹管状工具で平行な沈線を引き、その下に刺突を加えている。胎土には石英粒とともに雲母の混入が認められる。五領ヶ台式となろう。

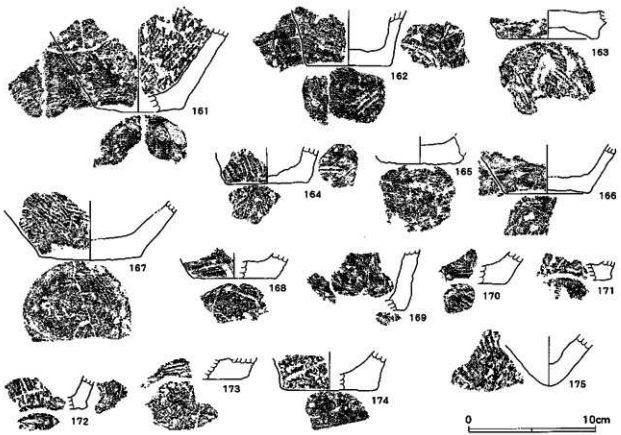
216は野馬土手の盛土内から出土したもので刺突による押し引きと波状の曲線や隆帯により文様が構成



第42図　第２地点出土土器（11）

される。胎土には雲母を多量に含むところから阿玉台式となろう。第１地点と比較すると僅かな出土であった。

加曽利Ｅ式土器に属するものについては一括した。５は浅鉢形土器で底部との接点はない。すべての破片が6Ｈ－76グリッドから出土した。口縁部に１条の沈線を巡らし底部まで縄文を施文する。器厚は10mmと厚く頑強な作りとなり、器面に使用されたRLの原体は太く密に撚られている。色調は赤褐色で焼成は良好である。217～220は口縁部片で、217・218はキャリパータイプの深鉢で、口辺には浅く幅広の沈線で楕円や円形を描く。221・222、226～228には沈線間に磨り消し帯が入る。224・225は波状の口縁で直下に軽く隆帯を巡らしている。229の隆帯は粘土紐を貼付して器面を飾る。これらは加曽利Ｅ式でもⅡ・Ⅲ式の範疇で捉えることができよう。



第43図　第２地点出土土器（12）

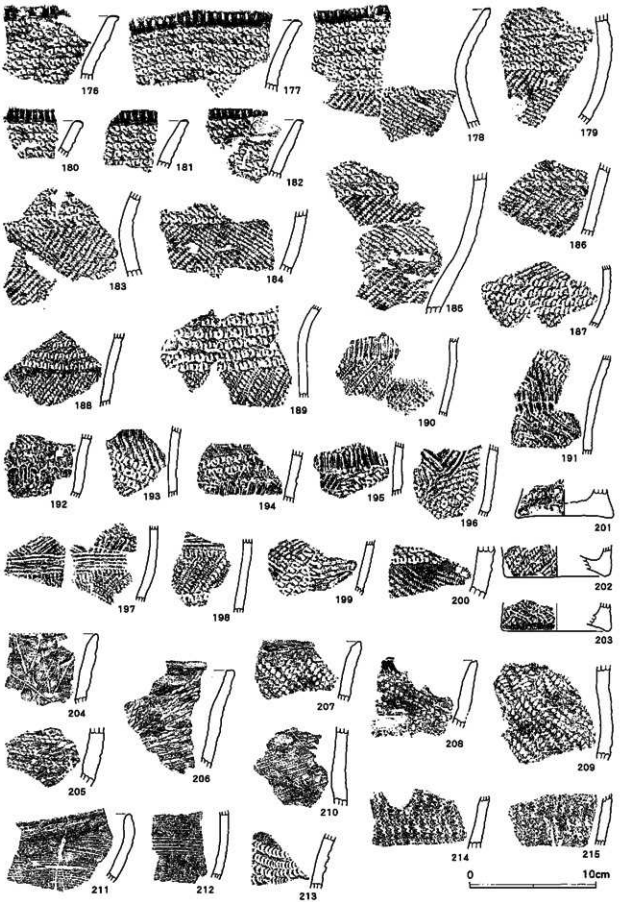
後期（第33～36図、第46図230～249、257）　後期の属する土器群には復原実測が可能となった一括品が10点ほどみられる。出土地点は７F・８G区を中心として７E区、６F区、６・７G区にまで及ぶ。このような出土状況から７F・８G区に小集団の加曽利B式期の人びとが居住していたものと考えられるが、住居跡等の確実な遺構は検出できなかった。６～12は粗製深鉢形土器で器形を把握できる個体である。６は７F－23、７は７G－09、８は８G－96、９は７F－23、10は７G－09、11は７F－23、12は７G－91・８G－01の各グリッドで出土した。一方、精製土器の類である13～16では、13が７F－23、14は７E－00、15は６F－80、16は７F－99グリッドで出土している。７F－23グリッドからは６・９・11・13と４点の一括品が集中的に出土していることに注目できる。

６は口縁部が4/5ほど失われているが底部まで接合できたものである。器面全体をＬＲの縄文施文後、口縁部に一条の粘土帯を貼付している。器面は褐色ないし淡い暗褐色を呈し、風化による軟化が目立つ。

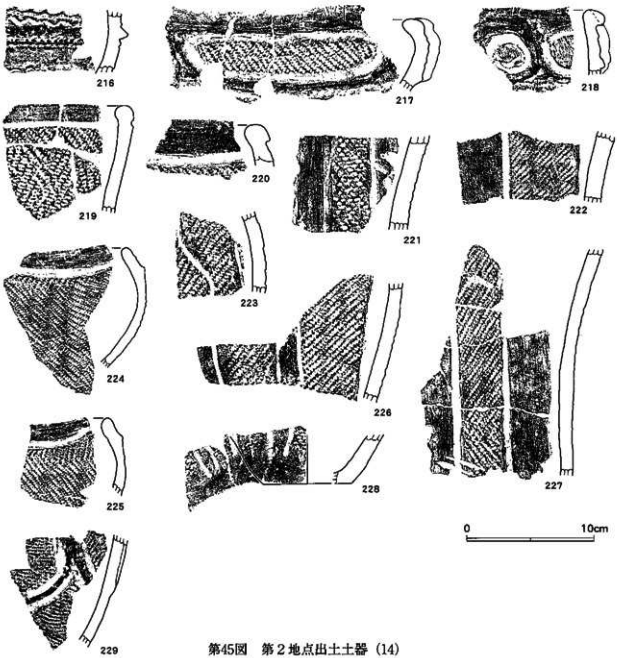
７は口辺部と胴下部が遺存したもので、施文は胴部に縄文を付した後、口辺部に交叉するような形で粘土帯を貼付し、その空間を太い沈線で充填する。沈線間に一部縄文の残影が認められる。色調は淡い赤褐色ないし暗褐色を呈し、焼成は堅緻で精製土器なみである。

８は口縁部と胴下半部が遺存したもので、器厚は約５mmと薄い。指頭により押圧された粘土帯は口縁下にも貼付されている。口縁裏面には浅めの沈線が２条巡り、器面の色調は淡褐色を呈する。

９は、ほぼ６と同様な器形・文様構成といえよう。底部は欠損し、器面は風化による劣化が著しい。



第44図　第２地点出土土器（13）

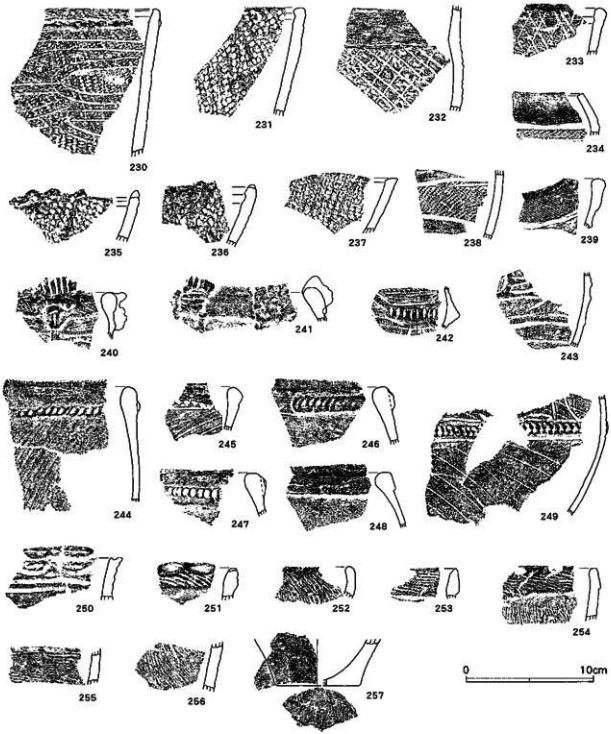


第45図　第２地点出土土器（14）

10は地文としての縄文施文の後に沈線で曲線を描く。沈線間には若干磨消の痕跡が認められる。また通常付される口縁裏面の沈線はみられない。器面の色調は淡赤褐色ないし赤褐色を呈し堅緻に焼成されている。文様構成から加曽利B式でも後半期のものとなろう。

11は口縁部と胴部の一部だけが遺存したもので加曽利B式期特有の粗い縄文が器面を覆う。口縁部の粘土帯は指頭で強く押圧されている。裏面の沈線は1cmと幅広であり、おそらく指頭により引いたものであろう。器面は暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。

12は底部を欠損するが、口縁から胴部にかけては全周する。器面には地文としての縄文が全面に施され、その後、口辺部では平行に、胴部では斜行する半截竹管による押し引きを付している。粘土帯は胴上半部



第46図　第２地点出土土器（15）

にも貼付され、器面の色調は11と同様に暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。

13は小型の鉢で沈線により「丿」字状に区画された部分は撚りの密な縄文で満たされる。製作の最後の段階として器面は調整により縄文が消去されている。文様構成という点では10の深鉢に近い。なお、底部

は円形ではなく略方形の作りとなっている。

14は浅鉢タイプで、器面には丁寧な調整痕が認められる。沈線を多用しており、沈線間には僅かながら縄文の痕跡を認めることができる。

15は上半部が1/3ほど遺存した大型の鉢で、推定口径は33cmを計測する。口辺部には五条の沈線が口縁と平行に巡る。沈線以下ではRLの縄文が斜行する。色調は淡赤褐色ないし暗褐色を呈し、内面ではやや劣化が認められる。

16は底部片のみ遺存したもので、器形は小型の浅鉢と考えられる。文様は円形の刺突文とを結ぶようにヘラで沈線が引かれ、以下には縄文が施文される。底部は刺突文によって飾られている珍しい器といえよう。遺存上部の器厚は3mmと薄く、内面は風化が著しい。

230は細い粘土帯を貼付し、地文の縄文に半截竹管による沈線文を描く。231は縄文のみの施文となる。232・233は地文の縄文に格子状のヘラ書き沈線を加える。無文部には器面調整が認められ器面は精製品に近い。235・236は同一個体となる。緩やかな波状口縁を呈する深鉢形土器となろう。口唇部には粘土塊を貼付しており、器面の縄文は粗い。237は大きな波状を形づくる。内面には明確な稜線を残す。238は口縁部が内彎する鉢形を呈するタイプとなろう。沈線間は縄文で充填される。裏面は丁寧に調整されている。

18、239～243は口縁が肥状（239）であったり、瘤付を有したもので241などは大きく内彎する器形となろう。18は6H－06グリッドから一括出土したものである。唯一平縁の口縁で沈線間を帯縄文で飾る。縄文原体は細くRLとなる。器内外面はきれいに調整されている。他の精製土器は瘤状に貼付された粘土塊の上にはヘラ状工具により刻目を付ける。器面に付された縄文の擦りは細い。17、19、244～249は紐線文系の粗製土器である。器面は条痕や浅い条線による施文が認められるが、無文のもの（248）もある。これらの器形は口縁が大きく内彎するタイプで安行Ⅱ式の特徴を備えるものである。

晩期（第46図250～256）　僅かではあるが、晩期に属する土器群がみられた。7H－76、8H－00・10などのグリッドから出土したものである。

250・251は精製土器の類となろうが、器面は風化により劣化している。ともに口唇部では押圧により窪みをもたせ、その直下には爪形や縄文を施している。色調は淡い褐色を呈している。252はやや内彎する口縁で細い原体LRを複数回器面に回転させている。253・254は撚糸施文の粗製土器で口唇部の作りが若干異なる。口縁は折返した後で横方向に撚糸文を付している。255・256は、粗製の胴部片となる。これらの土器群は粗製土器の特徴から千網式に属するものとなろう。

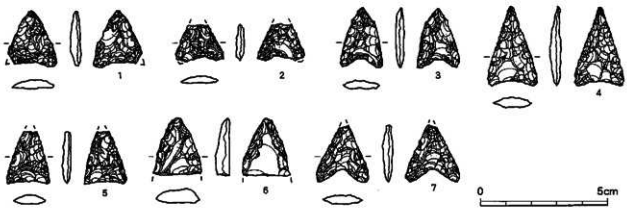
（2）石器（第47図～第49図）

本地点での石器は文末の表に記載したとおり、いわゆる土器包含層として拡張した調査区のうち7G・H区と8G・H区で散漫な出土を示したにすぎず量的にもすくないものであった。

石鏃（第47図1～7）　7点の石鏃が出土したが、ここでの使用石材も黒曜石（1・2）とチャート（3～7）で占められている。3・4は完形品で整った作りとなる。他は、すべて一部が欠損している。基部の作りは弧状で、抉りの大きなタイプ（3・7）もある。3は先端部の作りが特徴的である。

削器（第49図11）　11は細粒砂岩製のスクレイパーとなろう。裏面の一部を整形し、右側縁に刃部を設定している。

石核（第49図12）　12は自然石を分割後、打面を設定し2・3枚の剥片を剥取したようであるが、石質は



第47図　第２地点出土石器（１）

石器製作に適したものではなく遺棄されたようである。

原石（第49図13～16）　これらは、いわゆる自然石であり何ら加工痕等は認められない。ただその大きさや形状といった点から、石鏃等の剥片石器製作を目的とした母岩であると考えた。15・16などは小さすぎて廃棄されたものと思われる。

磨製石斧（第48図１）　唯一の磨製石斧であり、刃部の一部を欠損する。刃部・側面の研磨は精巧であるが、表裏面ともに風化のためややざらついている。

磨石（第48図７～10）　４点の磨石が出土しており、７は完形品で周囲の側面はよく使用された痕跡を残す。８は１/２ほどが遺存したもので表裏面は使用により滑らかな面を呈しており、破損部は敲打に使用されている。９・10は側面の破片であるが、使用の痕跡は著しい。

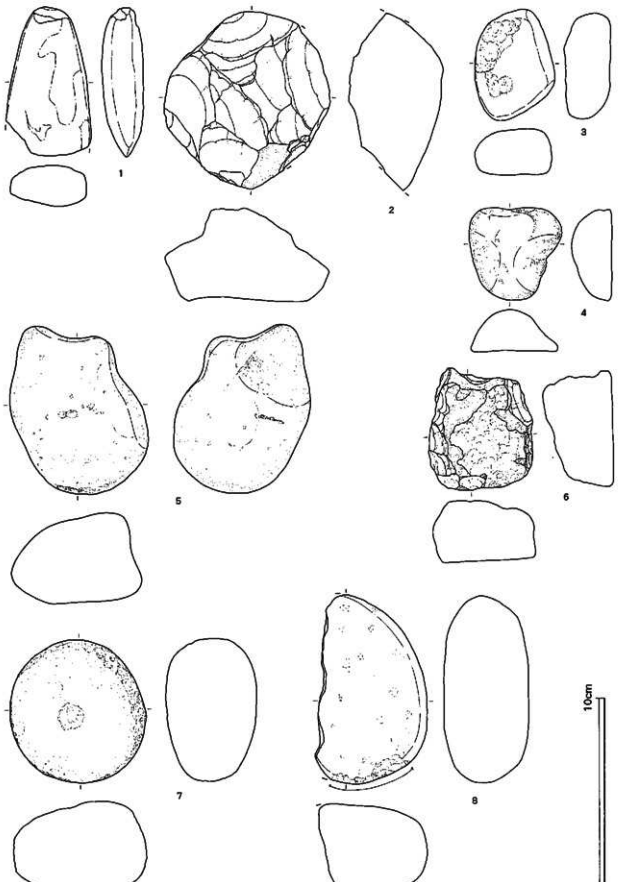
敲石（第48図２～６）　５点出土しており、２は大きな剥離により整形し周縁部をくまなく使用している。６の裏面は平坦で研磨されているため、他器種の転用であろう。整形後に下部を敲石として使用したものと考えられる。３～５はそれほど使用されてはいない。

石皿（第49図17・18）　２点とも破片であり、18は長期間使用したためか破損部は２cm程度まで磨滅している。

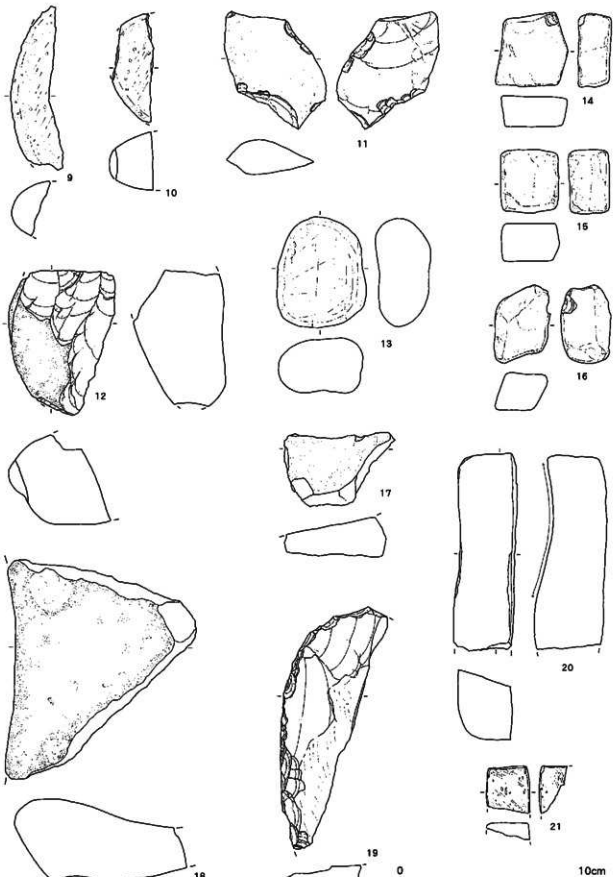
第４表　第２地点縄文時代出土石器観察表

挿図番号	器　種	出土地点	石　材	重量(欠損品)g	備　考
47-1	石鏃	7H-54	黒曜石	1.36	
47-2	石鏃	6H-04	黒曜石	(0.80)	
47-3	石鏃	8H-04	チャート	1.25	
47-4	石鏃	7H-64	チャート	1.81	
47-5	石鏃	7F-29	チャート	(1.12)	
47-6	石鏃	8H-50	チャート	(2.40)	
47-7	石鏃	7F-89	チャート	(1.30)	
48-1	磨製石斧	7F-00	輝緑岩	(107.59)	
48-2	敲石	8H-11	砂岩	419.78	
48-3	敲石	8F-36	砂岩	83.10	
48-4	敲石	8G-46	砂岩	61.00	
48-5	敲石	6G-05	流紋岩	365.81	
48-6	敲石	8H-03	安山岩	(186.10)	
48-7	磨石	7F-24	安山岩	354.34	被熱

挿図番号	器　種	出土地点	石　材	重量(欠損品)g	備　考
48-8	磨石	6G-02	石英斑岩	(403.87)	
49-9	磨石	8H-03	石英斑岩	(64.68)	
49-10	磨石	8G-29	石英斑岩	(44.18)	
49-11	敲器	8G-49	ホルンフェルス	63.78	
49-12	石皿	8H-13	流紋岩	217.66	メノウ礫含有
49-13	原石	6H-57	チャート	120.65	石器素材
49-14	原石	8G-11	チャート	44.26	同上
49-15	原石	7F-78	チャート	45.40	同上
49-16	原石	7F-89	チャート	34.12	同上
49-17	石皿	8G-49	安山岩	(54.26)	
49-18	石皿	8F-09	安山岩(多孔質)	(465.30)	
49-19	砥石	7H-82	緑泥片岩	(69.03)	
49-20	砥石	7D-90	流紋岩	195.05	
49-21	砥石	8G-37	頁岩	7.43	



第48図　第２地点出土石器（２）



第49図　第２地点出土石器（３）

砥石（第49図19～21）　19は緑泥片岩製の成品で、厚みは１cmにも満たない。全長は13cmを超える破損品で、破損部には研磨痕が認められる。側縁部が整形されているところから打製石斧を砥石として再利用したものと考えた。20・21は古墳時代以降のものであり、参考までに掲載した。20は下部が欠損するものの上部には砥ぎによる磨耗が著しい。21は欠損した小片である。

第４節　小結

本遺跡において旧石器時代の石器群が集中的に出土した地点は３地点を数える。第１地点で１か所、第２地点で２か所となり、注目できる石器群として第１地点出土の石器群をあげることができよう。石器群の説明でも触れたが、石器製作に用いられた石材はチャートで、しかも石質的に劣る原石が多く定型的な石器の製作には不向きなものが目立った。調査区に残された多くの剥片は廃棄されたものと考えても、石材の質からみて良好な剥片剥取ができたとは思えない。一方、黒曜石は少ない出土ではあったが石刃状の縦長剥片がみられ、それぞれ石器として使用されていた。つまり本地点で製作されていたチャートを主とした石器は、尖頭器やナイフ形石器など主要な器種に対して補完的な役割を担っていた石器であったと推察できる。

次に縄文時代をとおして本遺跡を振り返ってみると、最も活動が隆盛を極めた時期は早期の条痕文系土器を使用していた時期となろう。なかでも土器の出土量から茅山下層式期が、その時期に該当するものである。次いで、一括土器が多く出土した後期の加曽利Ｂ式期でも一定期間の居住が想定できる時期といえよう。だが、両者に関わる遺構の存在は確認できず遺物のみの出土で調査は終了した。この原因として考えられることは近世において遺跡周辺が野馬の放牧地として利用され、馬の管理するための土手を構築するという土木工事が行われていたことが一つの要因としてあげられる。そうした中にあっても若干の取穫を得た事例も存在した。それが礫群と石器製作跡の検出である。

礫群の出土層位は前述したように、ほぼ縄文期の土器群と変わらない。縄文時代にも早期から中期においてしばしば礫群を伴うことがある。そこで本遺跡の場合、一定期間の定住ということを前提として礫群の検出を考慮したとき、同一形式の土器群の出土量ということが大きな手掛かりとなろう。この条件に該当する土器群として一括品のみられる沈線文系・条痕系と中期の阿玉台式の三群をあげることができる。しかし、条痕文系土器群は第２地点で大量に出土しており、炉跡の痕跡も発見されていないが、距離的に約300mと離れており関連性は薄いものと考えざるを得ない。ここでは沈線文系と中期の阿玉台式期のどちらかとすることが妥当となろう。そこで周辺にみられる遺物を参考にすると、前述したように可能性の最も高い土器群が無文土器を主体とした沈線文系土器となる。根拠は稀薄ではあるが、ここでは沈線文系土器群に伴ったものと考えておきたい。

また、石器製作跡は小規模ながらも黒曜石の剥片が集中している場所を見いだすことができた。そこには近接して阿玉台式期の一括土器が数点出土しており明らかに一定期間居住していたものと理解できる。このような一括土器の出土例から石器製作跡を阿玉台期のものと考えることが妥当となろう。

以上が本遺跡を調査した結果の成果であり、とりわけ本地域における縄文時代遺跡のあり方として規模大きな集落の形成はなされず、一定時間ではあるが断続的に居住するといった点が象徴的であり、本遺跡もこのタイプの遺跡として捉えることができよう。

第４章　割野所在野馬土手

第１節　調査の方法と概要

前章で報告した大森割野遺跡では、地区内に野馬土手が道路に沿って南北方向に１条、それに接して東西方向に３条が認められた（第１図）。その現況についてみると、３条の土手は部分的に地表約1.5mの高さで東西に直線状に構築されており、その形状から近世の牧関連の遺構と考えられた。このため本報告では、これら３条の土手状遺構等を大森割野遺跡とは分離して割野所在野馬土手遺跡として一括して報告することとした。また、同時期の所産である陶磁器類についても野馬土手周辺で出土しているため本章の中で取り扱うこととする。

本遺跡周辺では牧に関係した遺跡・遺構が点在しており、同一台地上に泉新田野馬堀、隣接して天王脇野馬土手などが所在する。遺構としては、既に調査報告されている泉北側第２遺跡や泉遺跡において野馬土手・野馬堀と考えられる盛土遺構や溝状遺構が検出されている。このため遺跡周辺では近世において放牧が盛んであったことが理解できる（注１）。

なお、本来の割野所在野馬土手遺跡は道路に沿った部分であり、平成５年の調査時では既に盛土部分が削平されていたため下層の確認を目的として調査を実施した。この調査では地形測量を実施し、全体の形状を把握した後、特に座標を基にしたトレンチは設定せず２m幅のグリッドを現存する道路に平行して13か所設定し（第１図■部分）、旧石器時代関連の遺物検出を試みたが遺物の確認はできなかった。その後、大森割野遺跡の南側部分の調査時に区域内に所在する土手状の盛土遺構についてそれぞれ001号跡・002号跡・003号跡と命名し発掘調査を開始した。

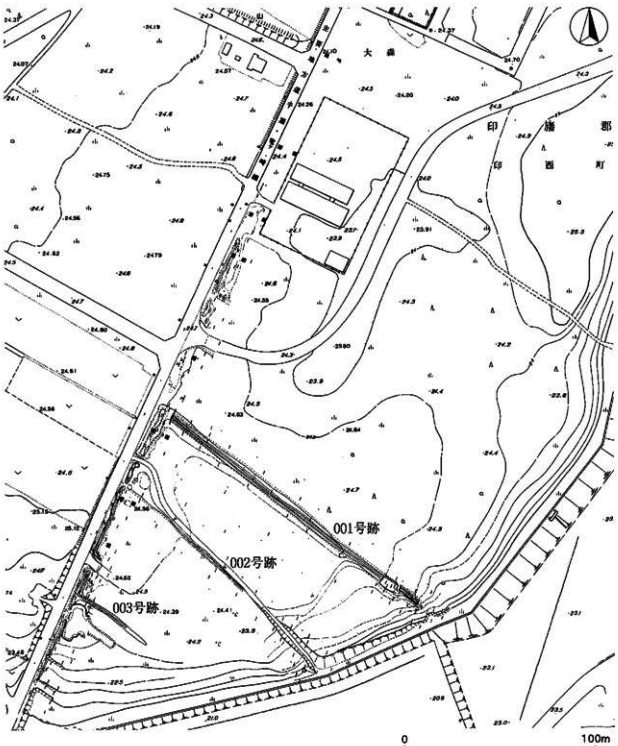
第２節　遺構と遺物

本遺跡の野馬土手は台地斜面部に向かって平坦な土地を区画するごとく東西に平行して構築されており、おそらく当時は数条の土手が存在していたものと考えられる。この野馬土手は001号跡にみられるようにほぼ谷地に接するまで構築されているため、谷地部は水飲み場として利用されていたものであろう。野馬土手の遺存状況についてみると、001・003号跡は比較的良好であったが、002号跡は図示したように農道によって著しく破壊されていた。

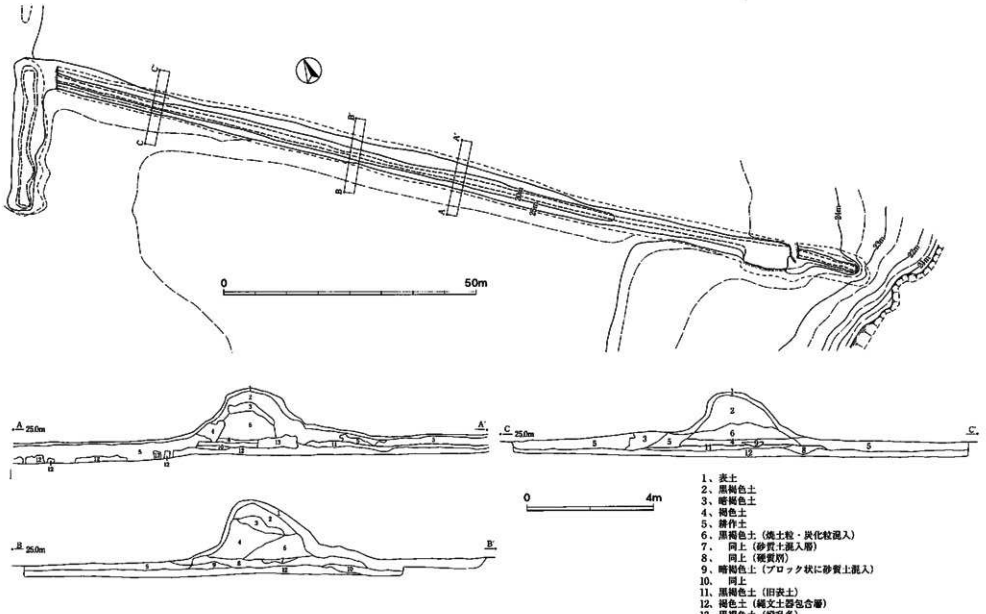
また、出土遺物は野馬土手の盛土中から出土したものは少ないが、大森割野遺跡調査時に設定したトレンチや周辺の拡張区において散見できた。そのため野馬土手調査時には近世陶磁器の出土にも配慮し調査を進捗させていった結果、Ｆ９区において瀬戸美濃系陶器や擂鉢・焙烙といった庶民的な日常什器の出土が確認できた。これらの陶磁器類は牧関連の労働に従事する当時の人びとやその周辺集落に居住した人びとが使用していた什器と考えられるため付随する遺物として一括して掲載した。なお、設定したトレンチは調査順にＴ１‥‥17（大森割野遺跡第３図参照）としたが、詳細は省略した。

１．遺構（第２・３図）

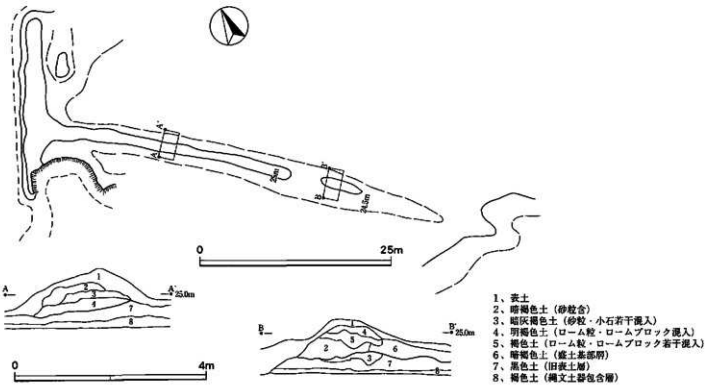
001号跡　本跡は調査した３条のうち最大のもので長さは約160m、幅は約５mを計測する。現地表から約1.5m～２mほどの高さを保ちつつ谷地部へと向かう。しかし、その頂部は削平され幅１mほどの農道



第１図　御野所在野馬土手周辺地形図



第２図　001号墳墳土平・断面図



第３図　003号野馬土手平・断面図

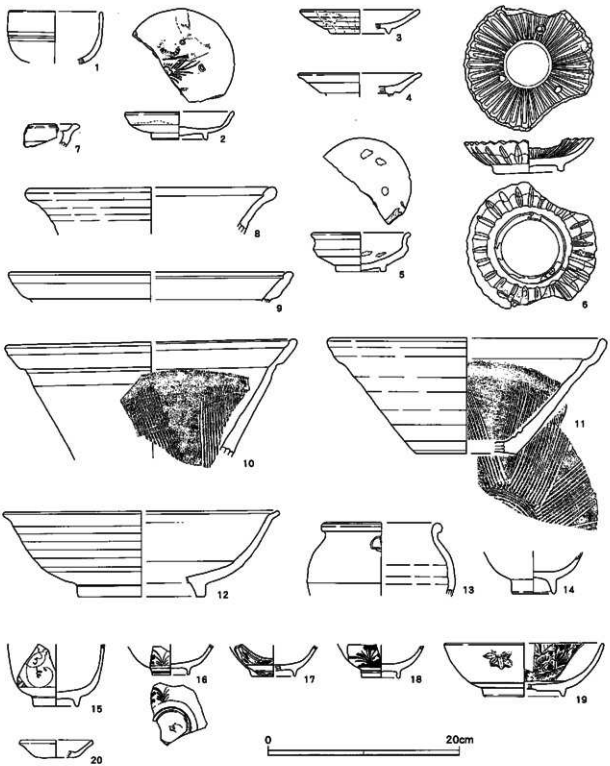
として利用されていた。調査は盛土の状況を観察するため遺存状態の良好な部分に南北方向にトレンチを設定し、ソフトローム層まで掘り下げて土層断面を計測したところ盛土は旧地表から約1.5mの厚さで堆積しておりローム層やロームブロック土は少なかった。主に構築当時の表土層を盛土として利用していたようである。旧地表面以下での掘削痕が確認できなかったこともそれを裏付けるものといえよう。また、第６層とした盛土中には若干の焼土や炭化粒の混入が認められたことも興味深い。

002号跡　本跡は、現状で約80mの長さを計測し、001号跡と平行に盛土されていたが、その幅は農道や耕作等により削平され原状を損なっており遺存状態も劣悪であった。おそらく001号跡同様に谷面まで盛土は続いていたものと考えられる。念のため３か所ほど土層断面の観察のためトレンチを設定したが、良好な結果が得られなかったため図示等の掲載は省略した。

003号跡　本跡は約55mほどの長さで盛土の痕跡が確認できた。T字状に構築された部分から30mほど東へ延びた部分で頂部が若干削平されており、その延長部は緩やかに谷地部へと向かう。盛土の幅は約３mを計測し、その堆積状態を観察するため２か所にトレンチを設定し断面を観察した。土層断面の一部に旧表土と思われる黒色土（第７層）が確認され、その上面では構築当時の表土である砂粒混入の暗褐色土（第２・３層）やローム粒・ロームブロック混入の褐色土（第３・４層）の堆積が認められた。

２．遺物（第４・５図）

本遺跡で出土した陶器類は、その大半が６E区の周辺と９F区（トレンチT６）で出土している。その遺物類の年代（注２）から推察すれば、牧が経営されていた頃のものが多く生活感の漂う什器類といえよう。



第４図　野馬土手関連出土遺物（１）

瀬戸・美濃系陶器（１～11）

腰錆碗（１）　９F区（T６）で出土したものであり、口縁直下に２～３の筋を巡らせている。既ね、その筋から底部に錆釉を掛けている。内面には貫入がみられる。時期的には18世紀後半となろう。

摺絵皿（2）　9F区（T6）で出土したもので、約2/3が遺存する。内面には灰釉を掛け、見込み部分には草花文が認められる。さらに重ね焼きの痕跡を2か所に残す。18世紀前半の産となろう。

灰釉輪禿皿（3・4）　3は9F区（T6）で出土し、1/4程度の遺存である。口縁部に掛けられた釉薬は体部に流れ落ちている。時期的には17世紀後半となろう。4は6E区で出土、約1/8程度の遺存である。釉薬は全面に掛けられている。僅かに反った口縁部の作りから前者よりもやや古く17世紀中葉となろう。いずれも見込部に重ね焼きの痕跡を残しており、畳付部分の削り出しが特徴的である。

鉄釉香炉（5）　6E区で出土したもので約1/2が遺存する。薄い鉄釉は鈍い赤褐色を呈し、外面は口縁部のみに掛けられている。時期的には17世紀後半といえよう。

灰釉菊皿（6）　6E区で出土したもので一部を欠損するが、形状は把握できる。菊花状に型どりし、淡い青白色の釉薬を施している。内面には3か所の重ね痕を残す。時期的には17世紀後半の所産となろう。

鉄釉摺鉢（7～11）　摺鉢は、6E（8）・7F（7）・9F区（8～11）から5点が出土した。7は口縁部のみの小破片で口縁内面の鋭利な稜線が特徴的である。これは比較的古いタイプにみられるもので、大窯時代（中世）の末期に位置づけられよう。色調は暗赤灰色である。8も口縁部片で、大きく外反しており丸みを帯びた口縁の作りが特徴といえよう。その断面を観察すると、整形後の口縁をさらに薄い粘土帯で覆い口縁部を作出している。本資料のみ器面には砂粒や白色の鉱物が認められ滑らかさが感じられない。その特徴から碗種摺鉢の可能性が高い。色調は黒褐色を呈しており、時期的には17世紀末葉となろう。9の口縁は折り曲げるようにして作られ、その内側は7同様に特に整形されることはない。形態的にも8の摺鉢より後出となり18世紀以降となろう。10は口縁部の大形破片で、内面では4cm幅の櫛歯状工具で間隔をとりつつ擂り面を作り出している。内面にみられる稜線の作りから18世紀後半のものとなろう。11は、かろうじて底部が残存しており糸切り痕跡が確認できる。口縁の内側は丸味を持たせつつ稜線を作出している。櫛歯状工具の幅は、10よりもやや広く4.5cmを計測する。時期的には18世紀末葉に位置づけられよう。また、9～11の色調は、現代的なやや黒みをおびた赤褐色である。

唐津系陶器（12～14）

刷毛目鉢（12）　6E区から出土しており、かろうじて畳付部分が2cmほど遺存し、器形全体を復原したものである。器内外面は刷毛によりきれいに施釉し、特に内面では同心円状に鉄釉を巡らし美的に仕上げつつ、口縁部内外面には灰釉を施し色彩感をもたせる。18世紀代のものであろう。

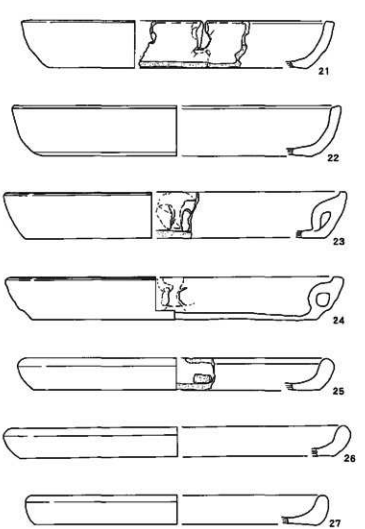
鉄釉壺（13）　9F区から出土した小型の壺であり、口縁から胴部にかけて1/5程度の遺存にすぎない。器面及び口縁の内側に施釉しており、口縁直下に粘土塊の貼付が認められる。耳の部分であろう。年代的には前者と同様となろう。

灰釉厚手碗（14）　この碗も9F区からの出土であり、胴上半部が欠損している。厚手の碗で内外面に淡い褐色の釉が掛かりひび割れ状の貫入が認められる。17世紀末葉～18世紀初頭の産であろう。

肥前系磁器（15～19）

厚手碗（15・18）　15は6E区で出土している。口縁部は欠損しているが垂直に近い立ち上がりを示し、染め付けによる草花文を描いている。18は9F区（T6）の出土で、口縁部は欠失し染付による草花文の一部が認められる。ともに18世紀頃の生産となろう。

半球碗（16・17）　16は9F区（T6）で出土したやや薄手でこぶりの碗となる。染付による草花文の一部が認められる。底部には銘（2文字）が書かれているものの判読はできない。17は6E区から出土したも



第５図　野馬土手間連出土遺物（２）

ので、16と同様な形状を有する。時期的にはともに18世紀頃の生産となろう。

蛇ノ目高台型紙絵付鉢（19）　９F区（T６）から出土した。時期的にも新しいもので幕末から明治初期に生産されたものであろう。

その他（20・21～28）

カワラケ（20）　表採品であるが、18世紀頃のものであり時期的に一致するため掲載した。

焙烙（21～28）　９F区に設定したトレンチ（T６）から集中的に出土し、27・28は８E区（T５）から出土した。個体数としては10点を超えている。口径は約35cm ～33cm、器高は５cm ～2.5cmを計測する。24は13片が接合したもので約１/３が遺存し、内耳が１か所みられる。22は底部が欠損し、口縁から体部の１/３が遺存する。他は口縁が12cm ～13cm程度残存するものを復原実測して提示した。

これらの焙烙には、すべて胎土に雲母が混入されていることが特徴的であり、18世紀頃の産となろう。とりわけ21～24では雲母の混入が目立つ。一方、25～28では控えめな混入といえる。顕著な混入となる21～24はおそらく常陸産（注３）となろう。また、口縁部の作りも大きく異なる。前者（21～24）は平坦な口縁に対し、後者は丸味を帯びている。この相違は、生産地が異なることを意味するものであり県内での出土例からみると、後者は江戸からの影響（注４）と考えられている。

第３節　小結

以上が割野所在野馬土手遺跡の調査成果となる。本地域では前述したように各所で野馬土手の所在が報じられている。だが、遺構の性格上遺物が伴うことは少ない。この点、本遺跡の調査では一定程度の関連遺物を得ることができた。こうした出土例を考えると牧に関連した人びとが使用していたものとは即断できないが、生活に密着する品々であることには相違ない。とりわけ擂鉢・焙烙の類は当時の生活を想起させる。いずれにしても調査の結果からみると、当時近隣に集落が存在していたことを示唆するものである。ここでは牧の管理に携わった人びととの関連で捉えておきたい。

注１　赤坂　信ほか　2006『房総の近世牧跡』　千葉県教育委員会
注２　鳥澤良祐　1998『瀬戸市史陶磁史篇六』　瀬戸市
　　水本和美　1998「陶磁器・土器 分類・係数基準」『伝中・上富士前Ⅱ』　豊島区教育委員会
注３　築瀬裕一・井上哲郎両氏のご教授による。
注４　築瀬裕一氏のご教授による。

第5章　武西近隣遺跡

第1節　調査の方法と概要

1．調査の方法（第2図　図版40）

旧日本測地系の公共座標（国家標準直角座標第Ⅸ系）に基づき40m×40mの大グリッドを設定した。なお、グリッドの名称は本遺跡の東側に近接し、昭和63年度から調査を始めた鳴神山遺跡及び白井谷奥遺跡と共通のグリッドを使用し、名称についてもそれに従っている。

鳴神山遺跡のグリッド設定は、その西側に隣接する白井谷奥遺跡をも包括し、方眼設定の起点を旧公共座標X＝－22.840、Y＝25.360 としている。大グリッドは先述したとおり40m×40mの方眼をまず設定し、大グリッドはさらに4m×4mの小グリッド100個に分割した。

大グリッドは北西の隅を基点に北から南に向かって1、2、3…と算用数字を与え、西から東に向かってA、B、C…とアルファベットを与えた。よって、武西近隣遺跡を包括する大グリッドは、南北が9～12、東西がA～Ⅱの記号・番号で表される範囲となる。小グリッドは大グリッドと同様に北西隅のグリッドを基点として、東に向かって00、01、02、03…とし、南に向かって10、20、30…という2桁数字で示す呼称とした。

調査は、上層確認調査→上層本調査→下層確認調査→下層本調査の順で実施した。上層確認調査については幅2mのトレンチを調査地区の状況に合わせ任意に設定した。遺構が確認されたトレンチでは必要に応じ拡張したが、原則として調査対象面積の10％を目標にして調査を実施し、遺構と遺物の分布状況を確認した。その結果、遺構が検出された周辺を拡張し本調査を行った。下層確認調査については調査対象区域全体に公共座標を合わせて、2m×2mのグリッドを設定し調査を行った。石器が検出されたグリッドの周辺について随時拡張等を行って調査対象面積の4％を目標に調査し、遺物の分布状況を確認した。その結果、さらに周辺に遺物が広がり検出される状況にある地域を本調査範囲として拡張し調査を行った。

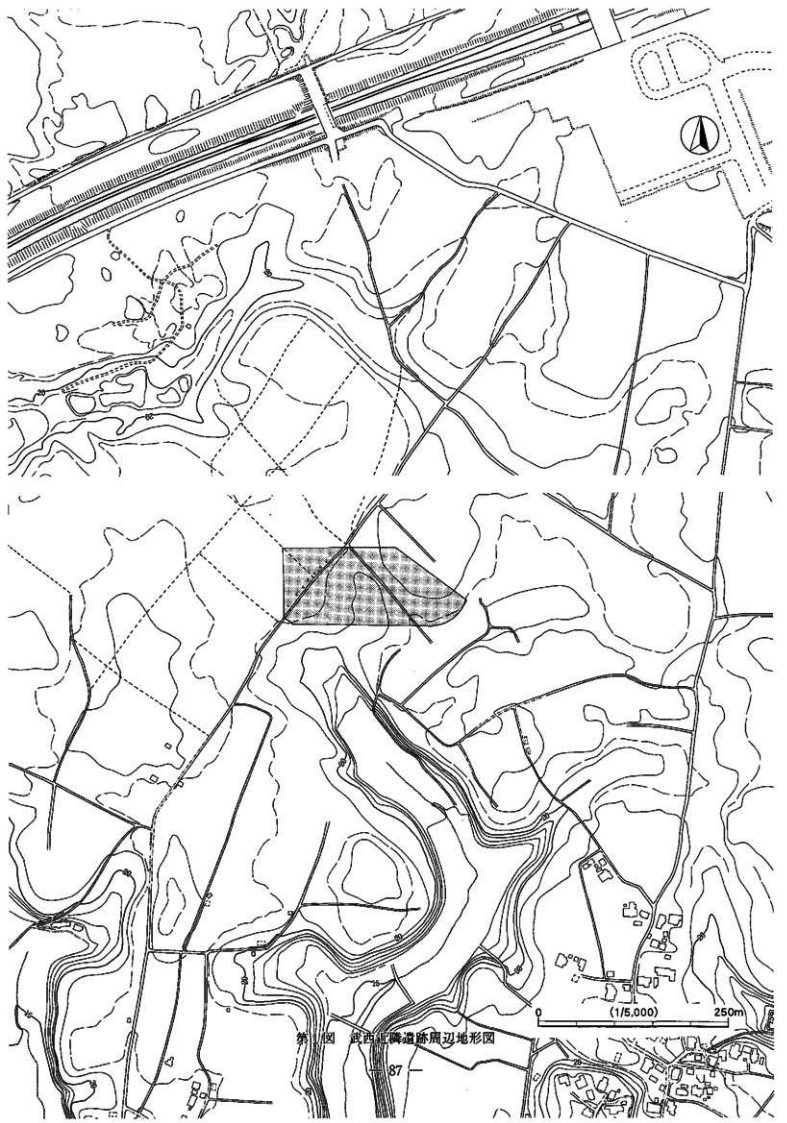
2．遺跡の概要（第1図　図版39）

武西近隣遺跡の立地する位置は、南側に神崎川を望むやや南北に長い広大な舌状台地の奥まった場所、南には浅く入り込む小支谷を囲むような台地肩口に立地する。この浅い小支谷を囲むように、遺構・遺物が検出されている。

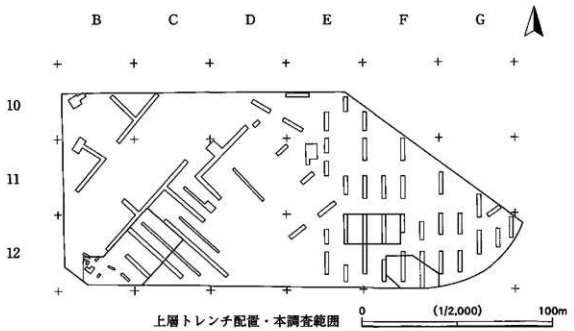
3回にわたる調査の結果、検出された遺構は、旧石器時代石器集中地点6か所、縄文時代陥穴2基、弥生時代後期竪穴住居跡5棟、奈良・平安時代溝1条である。またこれらの遺構とは別に本遺跡の北側に印西市武西から戸神を結ぶ旧道が走り、その北側には道に沿って遺跡を南北に分断するように南西から北東に向かって走る長さ約120mの土手が残る。その上には庚申塔が百基並ぶ。遺物については、旧石器時代、弥生時代の竪穴住居跡を中心にして、縄文時代・奈良・平安時代の遺物が少量と庚申塔列に伴うと思われる近世の遺物が見られる。

第2節　基本層序（第3図　図版40）

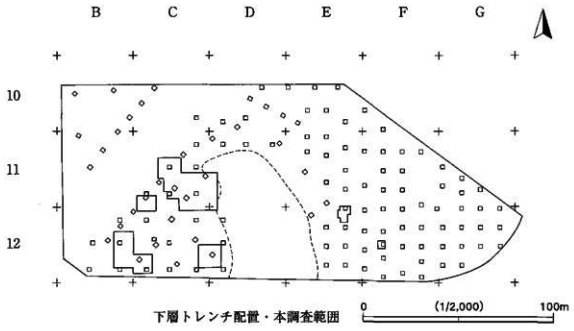
本遺跡は南側に入り込む小支谷を挟んで東西に細長いが、基本層序として比較的良好な堆積状況を残す



第1図　武西北横遺跡周辺地形図

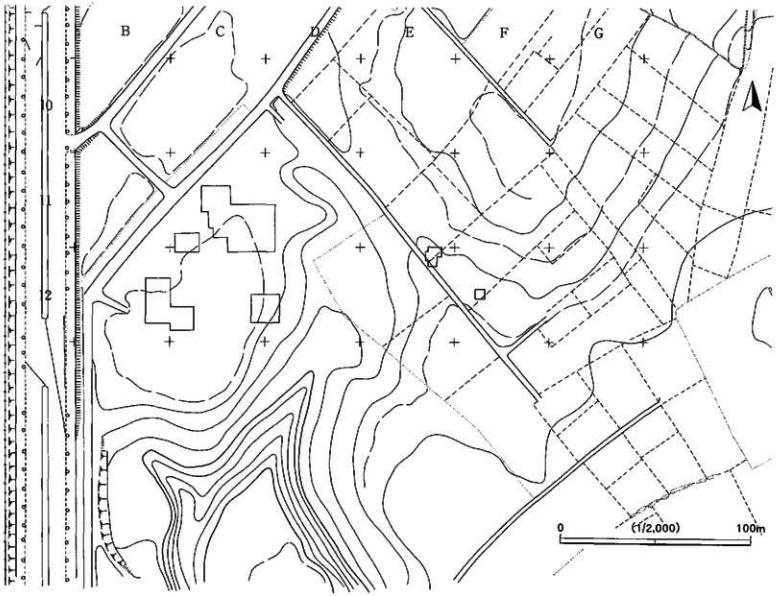


上層トレンチ配置・本調査範囲



下層トレンチ配置・本調査範囲

第２図　確認調査状況図



第３図　下層本調査位置図

下層確認グリッド12D－81の土層断面を基本層序（第３図）として示し、説明することとする。

Ⅰ層：黒（暗）褐色土、地点により若干土層の色調が異なるが、本遺跡では広い範囲で有機物の蓄積が一様ではないが見られた。

Ⅱ層：暗黄褐色土、立川ロームへの漸位層。本遺跡では厚さはまちまちではあったがほぼ全域で確認された。本来ならば二層にも分層が可能だが、残念ながら本遺跡では明確な分層は認められなかった。

Ⅲ層：黄褐色土、いわゆるソフトローム層に相当。場所により層の厚さに変化があった。なお、本層以下は、全域で観察されている。

Ⅳ層：明褐色土、硬質ロームである。軟質化が進みⅢ層と一体になっているところが多い。一断面ではブ

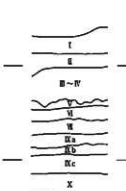
ロックが連続するように観察されるところもある。

Ⅴ層：本来ならば黄褐色土を呈する硬質ロームである。赤色スコリアを含む、微量にガラス質の粒子を含む。武蔵野台地での第Ⅰ黒色帯に相当するが、本遺跡では多くの箇所でⅣ層とⅤ層が明確に分層できず、両層合わせ一層とみなして観察される状況にある。

Ⅵ層：明黄褐色土、硬質ロームである。姶良Tn火山灰（TA）を連続するブロックの様に多く含むことが見られる。

Ⅶ層：褐色土、硬質ロームである。Ⅵ層と比べ若干柔らかく赤色スコリアを含む。Ⅵ層と比べやや黒っぽい、第Ⅱ黒色帯の上部に相当。

Ⅸ層：暗褐色土、硬質ロームである。Ⅶ層と比べて堆積も厚く色調も黒く、下層に向かって黒さを増す、赤色スコリア・黒色スコリアを多く含む。第Ⅱ黒色帯下部に相当。本遺跡ではⅨ層の中央附近に褐色のⅨｂ層が認められることは少なく、ほとんどがⅨａ・Ⅸcの二層として識別されている。



第４図　基本層序

（参考）　Ⅸａ層：暗褐色を呈する。赤色スコリア・黒色スコリア
Ⅸｂ層：褐色を呈する。厚さはそれほどでもない。
Ⅸc層：Ⅸaと比べて黒い。

Ⅹ層：黄褐色土、硬質ロームである。スコリアはあまり見られなくなり、Ⅸ層と比べても若干ではあるが柔らかい。地点により厚さは15cm～30cmとまちまちである。

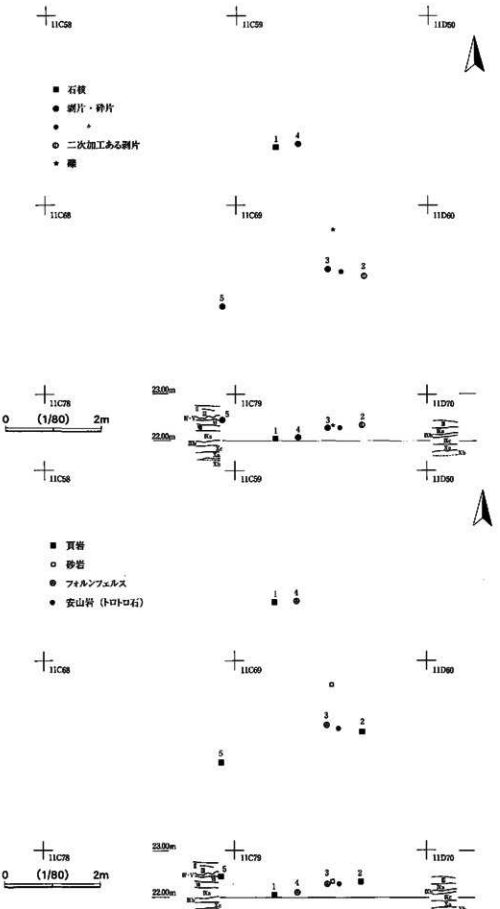
以上、立川ロームを中心として基本層序を述べたわけだが、谷附近と平坦な台地部分と層序の様相が異なることがある、特にⅢ層からⅤ層にかけてと最も厚いⅨ層の分層状況が大きく変わる。

また、立川ローム層の最下層であるⅩ層以下に続く武蔵野ローム層の存在は、谷部を除く遺跡のほぼ全域で確認されている。

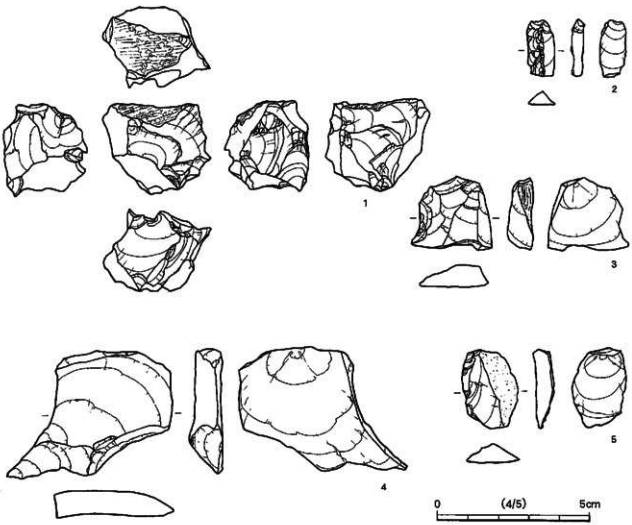
第３節　遺構と遺物

１．旧石器時代（第４図）

旧石器時代の遺物は、平成４年度・平成５年度に調査を行った地区、遺跡中央付近に南から入り込む小さな支谷に面する西側の台地を中心に調査を行った。その結果石器が集中する地点が５か所、単独に石器が出土した地点が２か所の合計７地点である。平成20年度に行った調査地区からは、集中して出土した地点及び単独での出土地点が１か所の合計２か所であった。石器総数は176点とそれほど多くはなかった。出土石器の石材で最も数の多い種類は頁岩で、全体の半分に近い43％を占める。次に多いのは安山岩類で30％を占める、そのほかには黒曜石、砂岩、流紋岩、石英斑岩、フォルンフェルス、チャート、メノウと全部で９種の石材が出土している。これらを器種別に見ていくと剥片・砕片が多く、全体の70％の量を占める、次に多いのは礫で12％を占めるがほとんどは礫破片である。これらで全体の85％ほどの量を占める。



第５図　石器集中１出土状況（器種別・石材別）



第６図　石器集中１

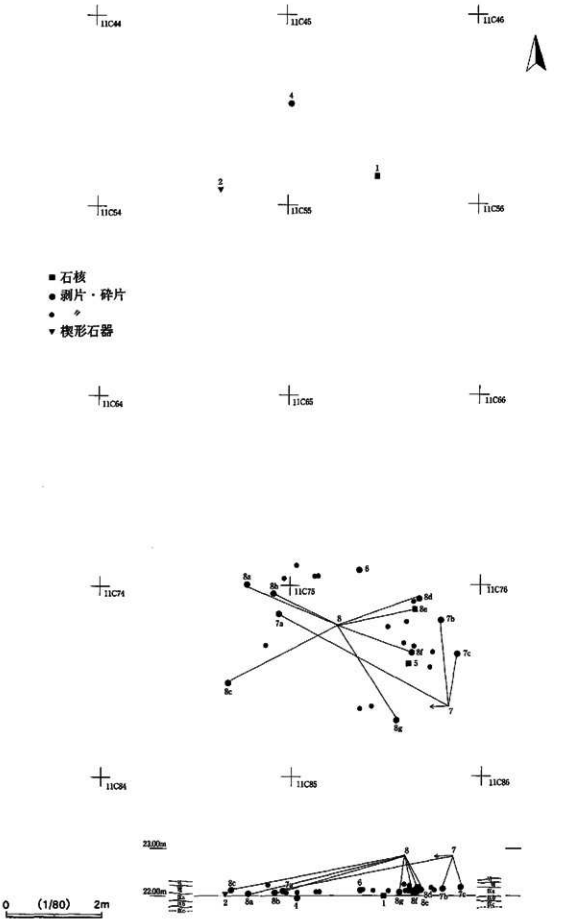
残りの15％がナイフ形石器などの製品等である。出土層位は、遺物の大半、とくに西側の多くがＡＴ降灰以前の立川ローム層Ⅶ層～Ⅸ層にわたって出土している。東側の台地からの遺物はすべてＡＴ降灰以降の層からの出土である。

（１）石器集中地点

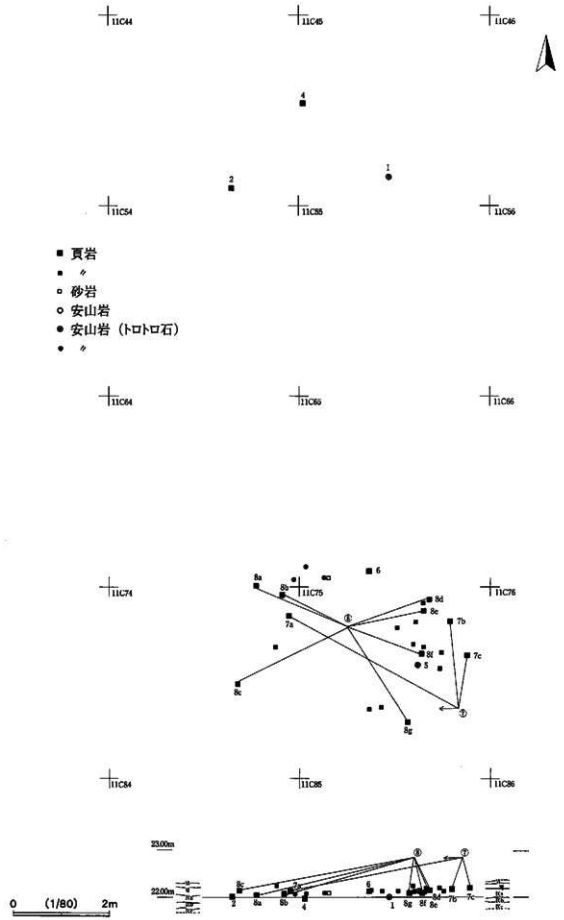
石器集中地点は６地点で検出された。出土石器の総点数は172点である。出土層位はＡＴ降灰以降に当たる立川ローム層Ⅲ層を中心とする石器群が２地点、ＡＴ降灰以前にあたる立川ローム層Ⅶ～Ⅸ層を中心とする石器群が４地点である。これらのうち約85％がＡＴ降灰以前の石器群である。各地点ごとの石器出土状況及び石器の内容については以下に述べるとおりである。

石器集中１（第５・６図　図版41・44）

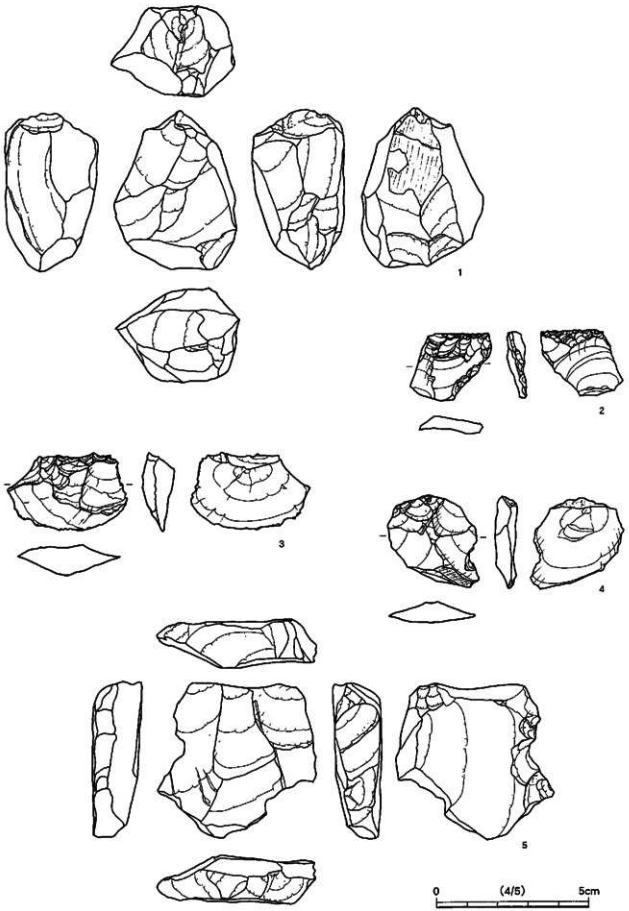
調査区中央やや西寄り、南から入り込む小支谷の西、台地肩口あたりグリッド11C－59・68・69に位置する。石器総点数は７点で、小規模な石器群で、径４ｍの範囲に分布する。主な出土層位はⅨａ層である。石材は頁岩、フォルンフェルス、安山岩（トロ）、砂岩の４種類である。１は茶色い頁岩の石核である。



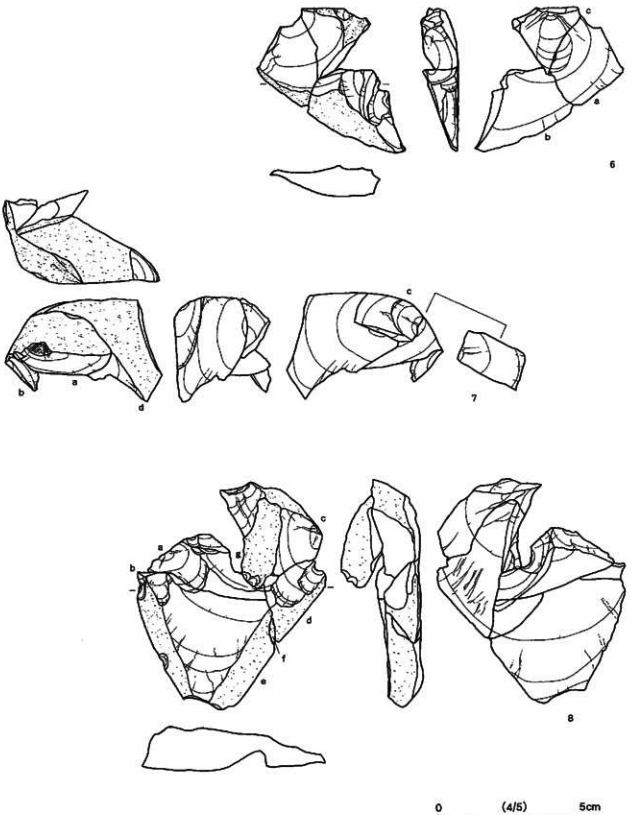
第7図　石器集中2出土状況（器種別）



第８図　石器集中２出土状況（石材別）



第9図　石器集中2（1）



第10図　石器集中２（２）

打面を頻繁に変えている。2は頁岩の小型の石刃状剥片である。途中で背面からの加圧により切断している。背面の稜から右辺に向かって調整が連続して加えられている。3・4はフォルンフェルスの剥片である。5は頁岩の剥片である。

石器集中2（第7～10図　図版41・44）

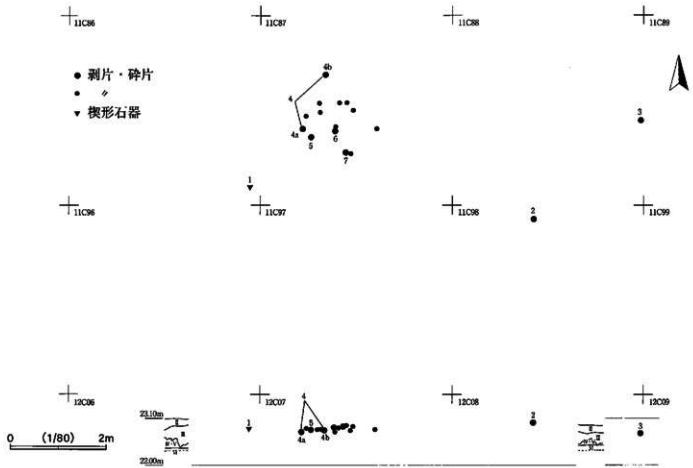
石器集中1の西側、調査区中央やや西寄りグリッド11C－44·45·64·65·74·75に位置する。石器総点数は33点で、本遺跡では2番目の規模の石器群である。北側の径4mの範囲に散在するグループと南側の径5mの範囲に分布するグループに分けられる。主な出土層位はⅧ～Ⅸa層である。石材は頁岩が最も多く全体の8割を占め、他に安山岩（トロ）、メノウ、砂岩の4種類である。1は安山岩（トロ）の石核である。打面を頻繁に変えている。2はチョコレート色の頁岩製の楔形石器である。剥片基部側の直線的な縁辺には両面に小さな階段状の剥離が連続して見られ楔形石器の様相が見られる。また、左辺にも連続した剥離が見られる。3はメノウ製の横長の剥片である。4は頁岩の剥片である。5は安山岩（トロ）の石核である。6は頁岩の剥片3点が接合する資料である。うち2点は、南西に約45m離れた石器集中4（グリッド12B-47）から出土した剥片である。本来は礫原面を一部に残す厚みのあるやや大型の縦長剥片である。製品の接合はなく、すべて剥片であり加工調整の跡はない。7は頁岩の剥片4点が接合する資料である。接合する破片はすべて礫原面を有している剥片である。製品はなく、二次的な調整痕も観察されない。なお7dはグリッド12C-70から単独で出土したものが約40mの距離を置いて接合している。8は頁岩の剥片が7点接合する資料である。やや大型の礫から扁平な剥片石核を作り、横長の剥片を作り出しているようである。この接合した資料には製品はなく、すべて剥片である。

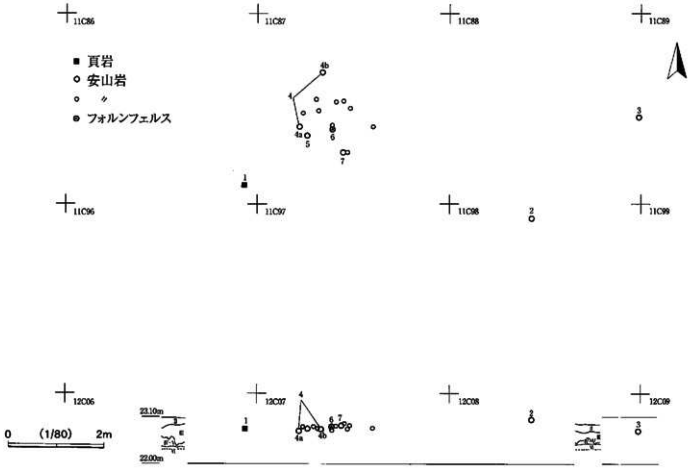
石器集中3（第11・12図　図版42・45）

石器集中1の南西側、調査区中央やや西寄りグリッド11C-86·87·88·98に位置する。石器総点数は17点で、やや小規模な石器群である。径2mほどの範囲に集中する石器群とその周辺に散在する石器とから成る。主な出土層位はⅢ層である。石材は安山岩（トロ）が15点と9割を占め、頁岩・ホルンフェルスが各1点である。1は頁岩の石器である。稜を除いた痕跡も見られ、切断して一部が欠損しており詳細は不明だが、残る平行する二辺には一部階段状の剥離が見られることから楔形石器としてよいであろう。2は安山岩の断面が台形を示すやや厚めの縦長剥片である。3は安山岩の一部に礫原面を残すものの石刃状の剥片である。4は安山岩の本来は縦長剥片の剥片同士が接合する資料である。5は安山岩の剥片である。先端部側が切断している。6は安山岩（トロ）の礫が縦長に割れた破片の片割れである。先端部側に細かな凹凸が見られ一部摩滅欠損している様に見えるのは使用によるものであろう。7は安山岩の縦長剥片である。

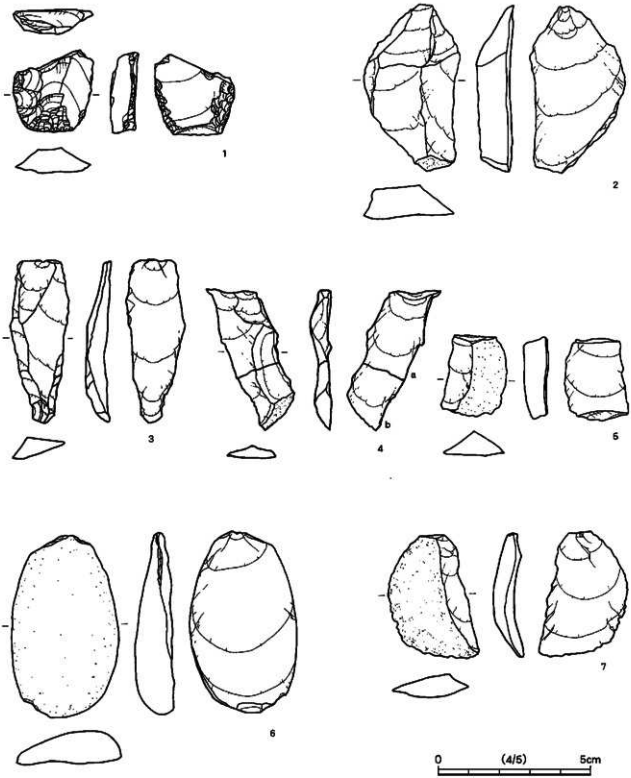
石器集中4（第13～21図　図版42・46～48）

調査区の南西グリッド12B－47·48·57·58を中心に分布する。石器総点数は100点で、本遺跡の石器群中最も多い数である。北側と南側に2つのグループに分布が分かれるが、石器の構成、接合関係、層位等から同じ石器群と考えられる。主な出土層位はⅧ～Ⅸa層である。石材は頁岩が41％と最も多く、安山岩（トロ等含む）が21％、砂岩（10％）、黒曜石（9％）と続き、ほかには流紋岩、石英斑岩が少量である。1は頁岩のナイフ形石器である。縦長剥片の両側縁に腹面側から、右辺は全体に、左辺は中程まで打撃を加えての調整が丁寧に行われている。2は頁岩の縦長剥片である。先端部は折れて欠損している。左辺全体と基部附近に腹部側から連続して調整が加えられている状況を見るとナイフ形石器か。3は頁岩の石刃状の剥片である。先端部は折れて欠損している。4は頁岩の剥片である。先端部は折れて欠損している。2

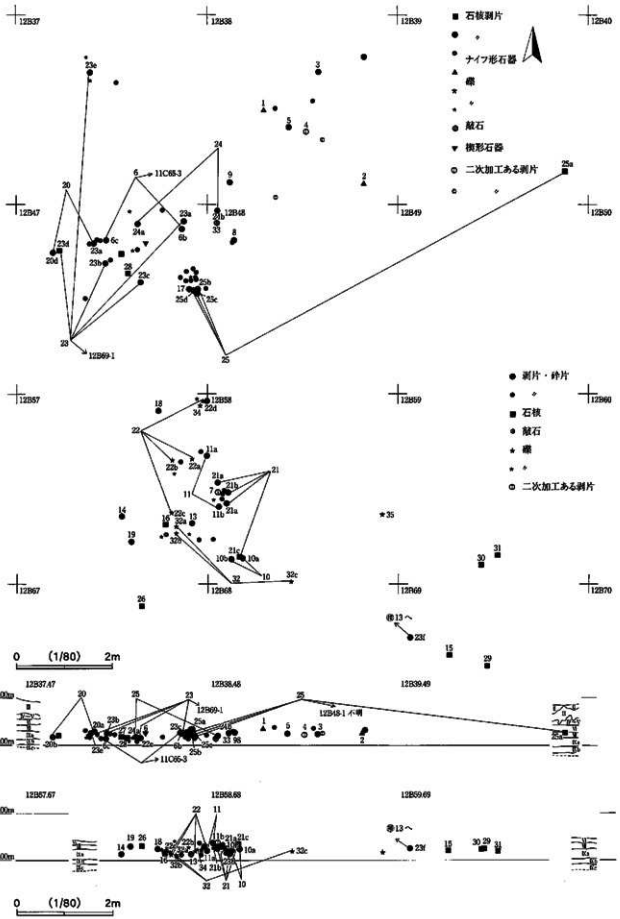




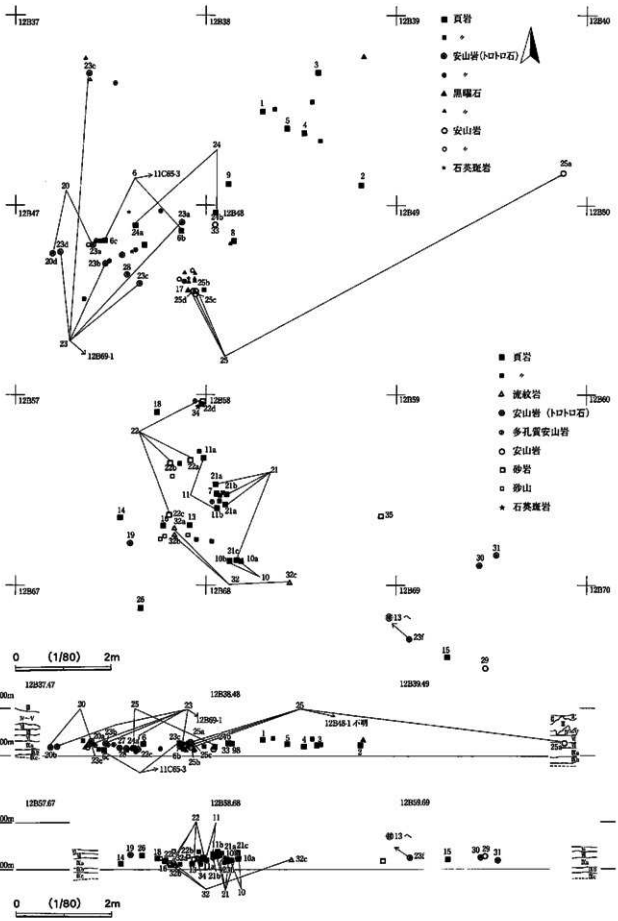
第11図　石器集中３出土状況（器種別・石材別）



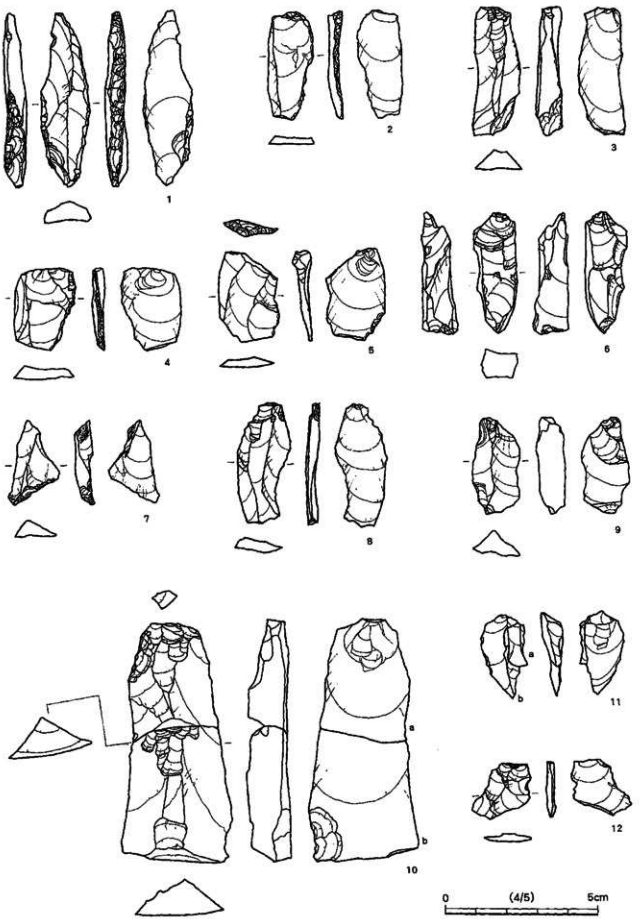
第12図　石器集中３



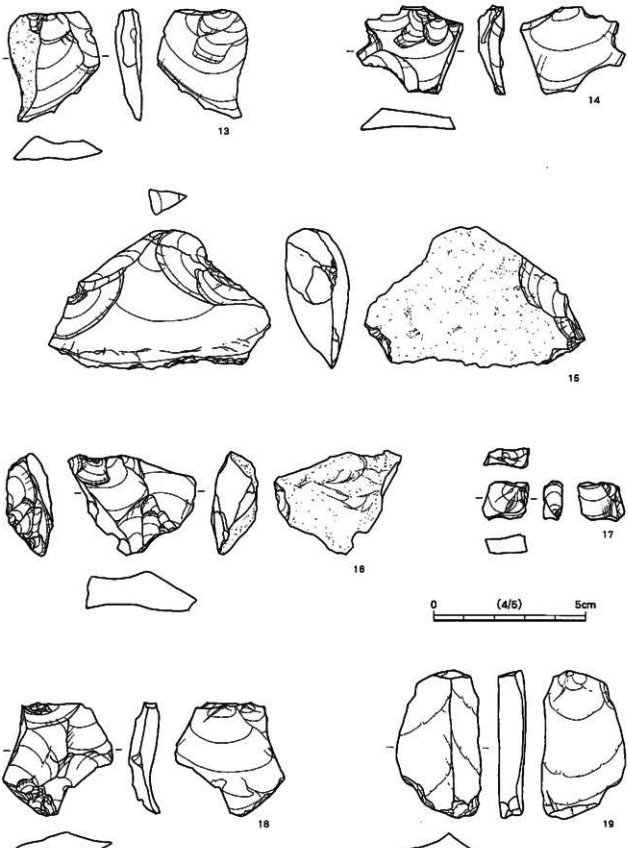
第13図　石器集中４出土状況（器種別）



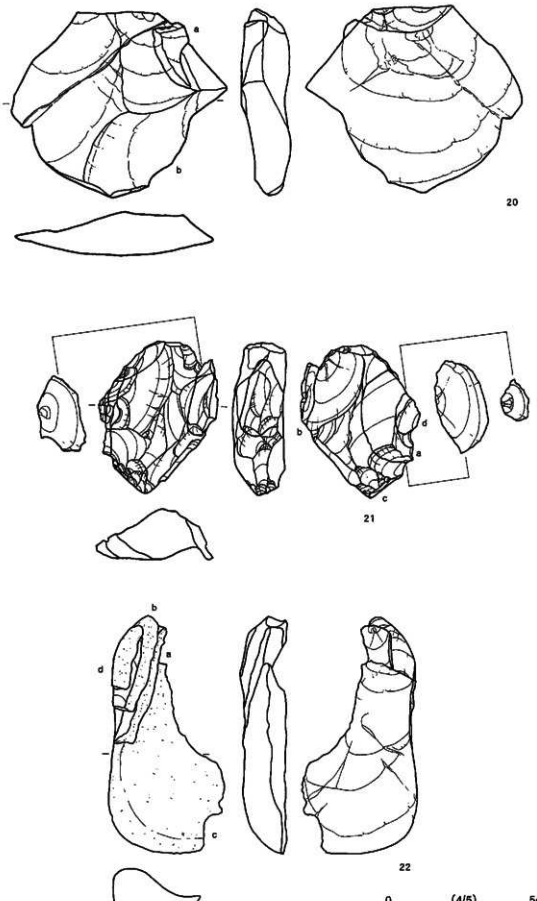
第14図　石器集中４出土状況（石材別）



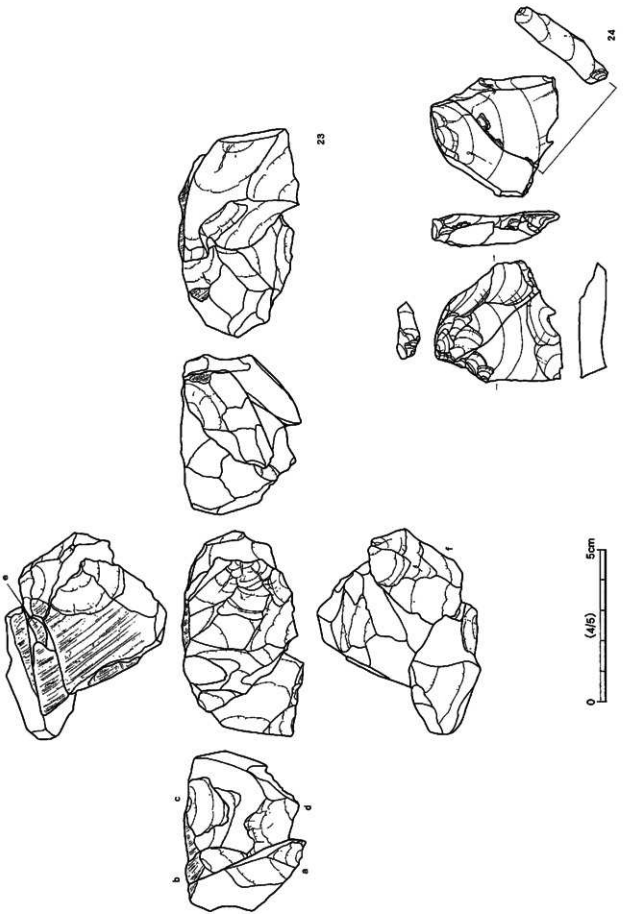
第15図　石器集中４（１）



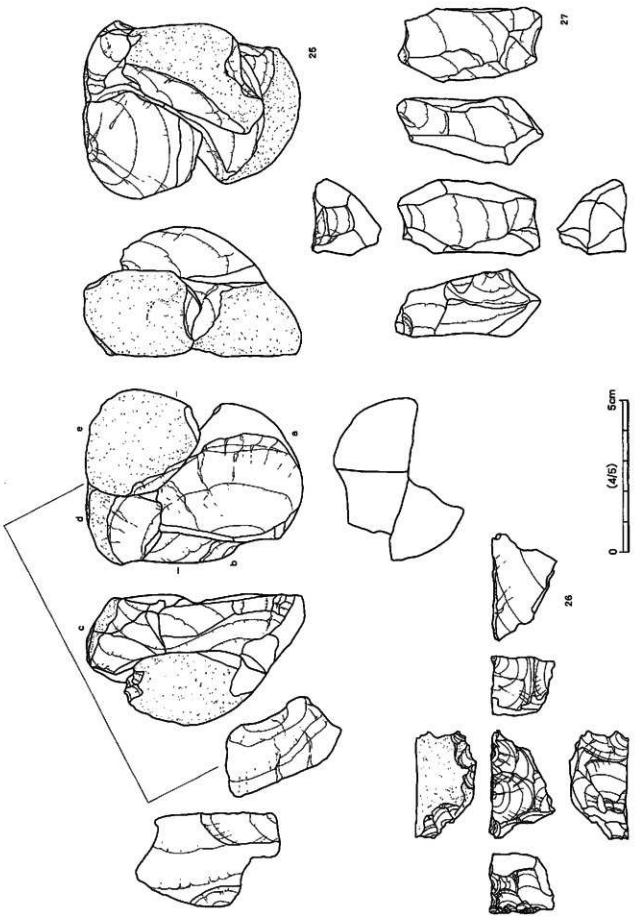
第16図　石器集中4（2）



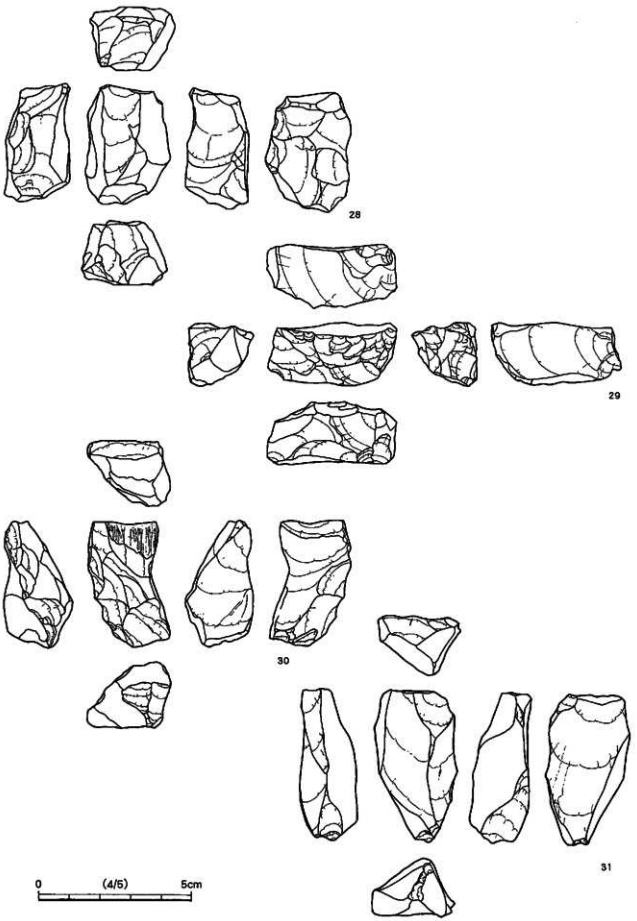
第17図　石器集中４（３）



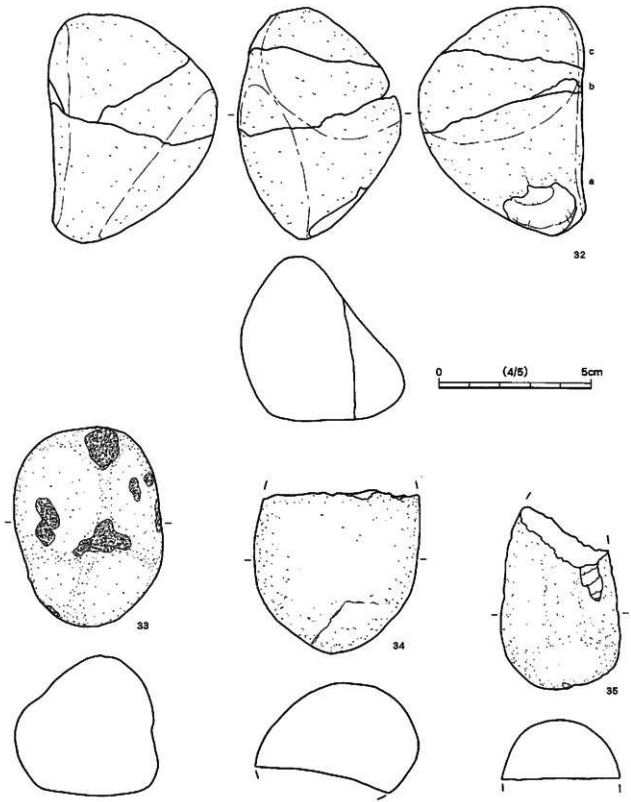
第18図　石器集中４（４）



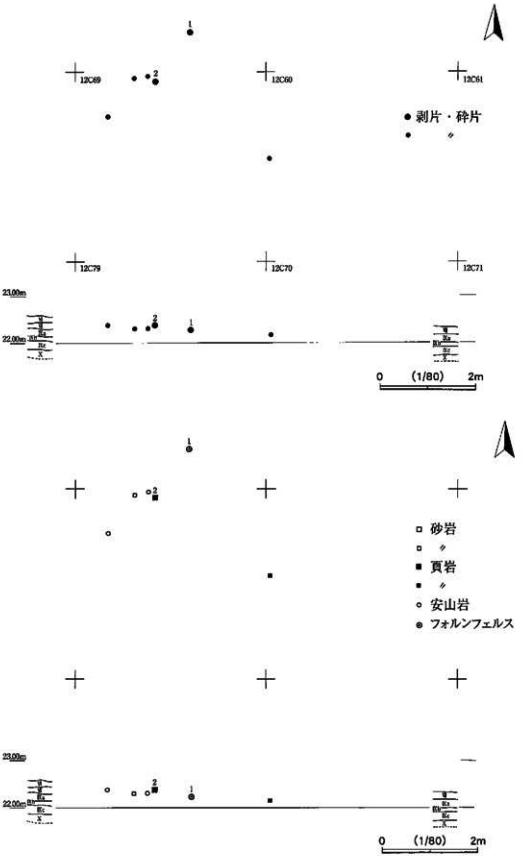
第19図　石器集中４（５）



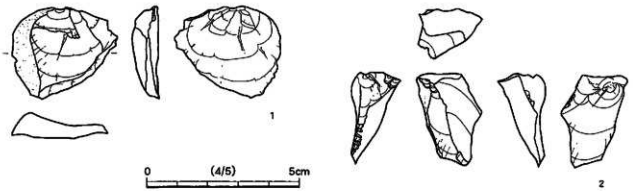
第20図　石器集中４（６）



第21図　石器集中４（７）



第22図　石器集中５出土状況（器種別・石材別）

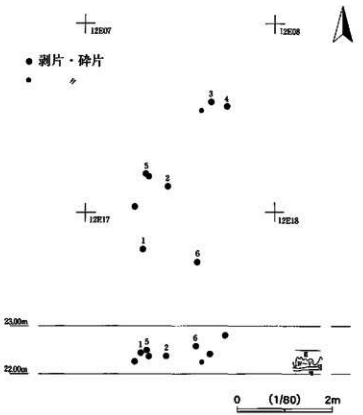


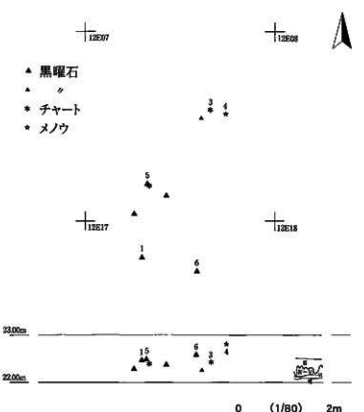
第23図　石器集中５

と同様に左辺全体に腹部側から調整が連続して加えられている。５は頁岩の剥片である。先端部は折れて欠損している。打面右側附近に背部から調整を加えている。６は厚みのある縦長剥片である。打面は欠損している。先端部は潰れており階段状の細かな剥離が見られる。楔形石器の可能性もある。７は頁岩の剥片である。基部側は摂理面で折れ欠損している。先端部左辺には腹部から調整が加えられている。９は頁岩の縦長の剥片である。先端部は折れて欠損している。９は頁岩の剥片である。10は頁岩の接合資料である。本来は長さ10cmを超える石刃状の剥片であったと考えられる。ａは基部附近の破片である、基部右辺側と打撃点附近の２か所に腹部からの調整が加えられている。ｂはａとの切断後にさらに切断しており先端部側を欠損している。基部側の切断面には細かな階段状の剥離が見られ、楔形石器の様相を示す。11は頁岩の破片である。破片２点が接合する。12は黒曜石の破片である。13・14は頁岩の剥片である。ともに基部側に細かな階段状の剥離が見られる。15は頁岩の礫原面を多く残すやや大きめの剥片であるが、ここからさらに横長の剥片を取り出した痕跡があり、石核として利用されていたと考えられる。16は礫原面を多く残す頁岩の剥片である。15同様に石核として利用されていたと考えられる。17は黒曜石のやや厚みのある小剥片である。18は頁岩の剥片である。19は安山岩の剥片である。20は安山岩２点の接合資料である。大型の剥片に小剥片が接合する。21は頁岩の石核に剥離された破片が３点接合する資料である。石核の打面を頻繁に変えて剥片を作り出している。製品の接合はない。22は砂岩の礫破片の接合資料である。23は安山岩（トロ）の石核を中心とした６点の接合資料である。22と同様に打面を頻繁に変えている。24は頁岩の厚みのある剥片同士の接合資料である。25は安山岩の接合資料である。礫破片の接合状態を呈するが、ａの様に剥片を作り出した痕跡があり、石核として利用されたものもある。26は頁岩の礫原面を一面に残す石核である。打面を頻繁に変え剥片を作り出している。27～31は安山岩の石核である。いずれも打面を頻繁に変え剥片を作り出している。32は流紋岩の礫破片の接合である。ほぼ原形を復元できる。外面は被熱し赤色に変色している。33は安山岩の敲き石である。礫面には打撃による細かな凹みが数多く見られる。34は石英斑岩の礫破片である。被熱し、礫外面は赤色に変化している。35は砂岩の礫破片である。34同様に被熱し、礫外面は赤色に変化している。

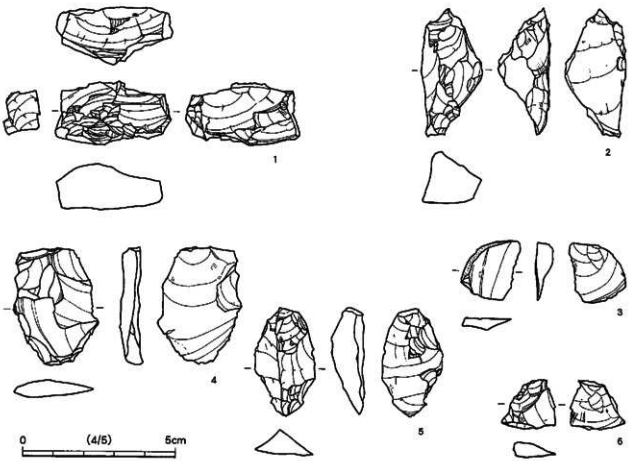
石器集中５（第22・23図　図版43・45）

調査区中央付近やや南寄り、南から入り込む小支谷の西、台地肩口あたりグリッド12C-59・69、12D-60





第24図　石器集中６出土状況（器種別・石材別）



第25図　石器集中６

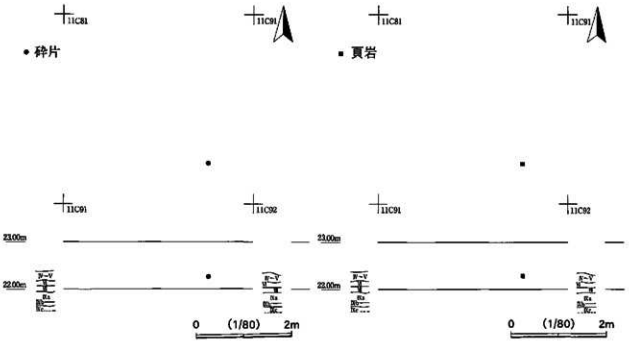
に位置する。石器点数は６点で、石器集中１と同様小規模な石器群である。主な出土層位はⅦ層である。石材は頁岩、安山岩が各２点、ホルンフェルス・砂岩が各１点である。１はホルンフェルスの剥片である。２は頁岩の剥片である。

石器集中６（第24・25図　図版43・45）

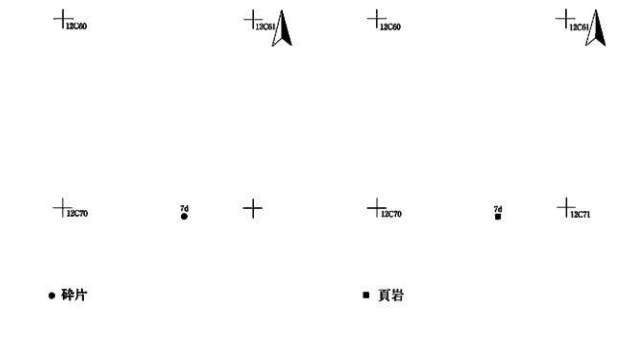
調査区中央東寄り、南から入り込む小支谷の東側の台地グリッド12E－07・17に位置する。石器総点数は９点と小規模な石器群である。主な出土層位はⅢ層である。石材は黒曜石が最も多い６点、チャート２点、メノウ１点である。１・２は黒曜石の剥片である。いずれも厚みのある剥片である。３はチャートの剥片である。４はメノウの剥片である。５は黒曜石のナイフ形石器である。基部の両側辺を腹部から調整を加えている。６は黒曜石の剥片である。

（単独出土）（第26～29図　図版43・48　）

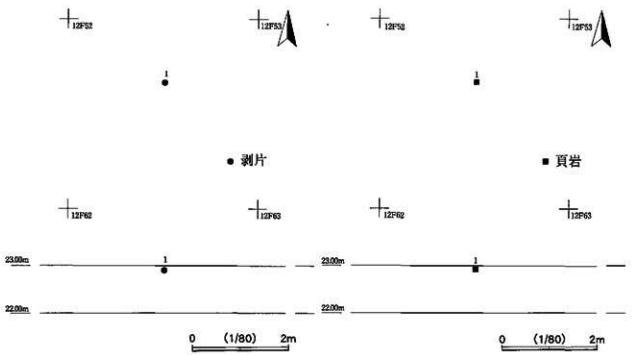
ここには石器集中から距離を置き、単独で出土した石器及び遺構等から出土したが旧石器時代の所産と考えられる石器をまとめた。１はグリッド12F－52から出土した頁岩の横長剥片である。２は住居跡から



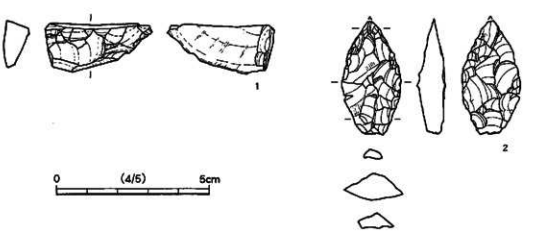
第26図　単独１出土状況（器種別・石材別）



第27図　単独２出土状況（器種別・石材別）



第28図　単独３出土状況（器種別・石材別）



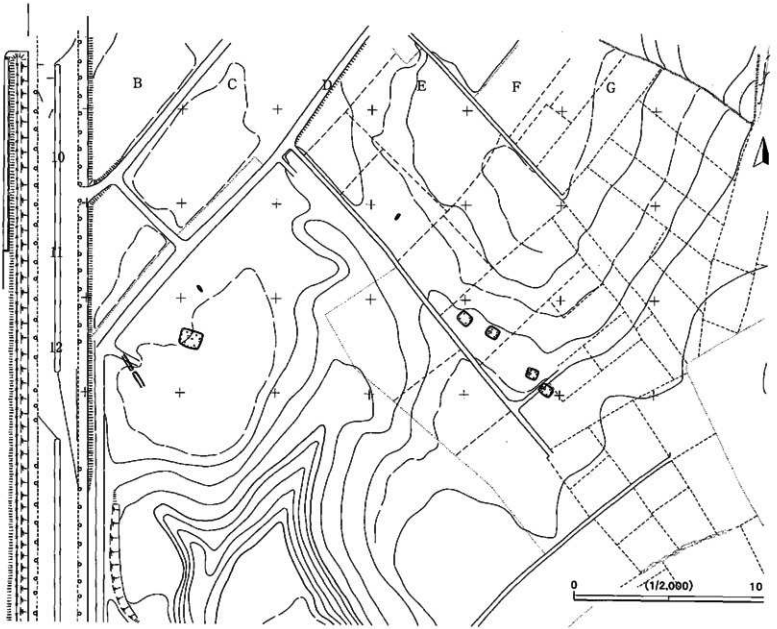
第29図　単独出土・遺構出土旧石器時代石器

第1表　武西遺跡旧石器時代石器一覧

グリッド	遺物番号	石器集中地点	層位	標高(m)	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	掲図番号	備考
11C-59	1	1	IXb	22.052	石核	頁岩	30.1	35.1	27.0	26.0	第6図-1	
11C-59	2	1	IXb	22.092	剥片	フォルンフェルス	41.2	56.2	11.0	22.4	第6図-4	
11C-68	1	1	II	22.470	剥片	頁岩	25.9	18.2	6.8	2.54	第6図-5	
11C-69	1	1	III	22.132	砥片	砂岩				16.6		
11C-69	2	1	IXa	22.148	二次加工ある剥片	頁岩	18.5	8.7	4.1	0.7	第6図-2	
11C-69	3	1	IXa	22.094	剥片	安山岩（トロ）	30.1	19.4	6.7	3.2		
11C-69	4	1	IXa	22.088	剥片	フォルンフェルス	23.5	26.2	8.3	5.9	第6図-3	
11C-44	1	2	VII	-	剥片	メノウ	24.9	39.2	10.7	6.7	第9図-3	
11C-44	2	2	VII	22.010	楔形石器	頁岩	22.0	26.4	6.3	2.9	第9図-2	
11C-45	1	2	VII	22.020	石核	安山岩（トロ）	52.7	40.5	30.3	67.2	第9図-1	
11C-45	2	2	VII	21.980	剥片	頁岩	30.2	30.1	7.6	5.3	第9図-4	
11C-64	1	2	IXa	22.048	剥片	頁岩	40.5	20.8	12.6	7.7	第10図-8a	
11C-64	2	2	IXa	22.075	砕片	安山岩（トロ）	7.1	10.0	1.5	0.1		
11C-65	1	2	VII～IXa	22.094	砕片	安山岩（トロ）	10.0	9.5	1.8	0.2		
11C-65	2a	2	VII～IXa	22.090	砕片	砂岩	6.5	5.0	2.2	0.1		
11C-65	2b	2	VII～IXa	22.090	砕片	安山岩（トロ）	7.5	5.4	1.3	0.1		
11C-65	3	2	VII	22.143	剥片	頁岩	24.1	21.3	7.1	3.3	第10図-6a	
11C-74	1	2	IXa	22.060	剥片	頁岩	14.2	10.4	3.7	0.5	第10図-8b	
11C-74	2	2	VII	22.122	剥片	頁岩	23.5	42.1	12.9	10.1	第10図-7a	
11C-74	3	2	VII	22.225	砕片	頁岩	8.6	11.1	3.1	0.2		
11C-74	4	2	VII	22.117	剥片	頁岩	39.1	25.8	13.6	8.4	第10図-8c	
11C-75	1	2	VII	22.160	石核	安山岩（トロ）	50.8	51.6	16.0	49.4	第9図-5	
11C-75	2	2	VII	22.141	剥片	頁岩	16.9	14.5	5.5	1.5		
11C-75	3	2	VII	22.145	剥片	頁岩	12.1	13.2	2.8	0.4		
11C-75	4a	2	VII	22.157	剥片	頁岩	46.0	21.5	9.5	4.8	第10図-8d	
11C-75	4b	2	VII	22.157	砕片	頁片	4.1	8.4	1.0	0.03		
11C-75	5	2	VII	22.088	砕片	頁岩	10.5	6.9	1.2	0.1		
11C-75	6	2	VII	22.168	石核	頁岩	42.3	50.4	13.9	26.7	第10図-8e	
11C-75	7a	2	VII	22.226	砕片	頁片	12.5	13.0	4.6	0.5		
11C-75	7b	2	VII	22.226	砕片	頁岩	10.8	4.8	1.4	0.06		
11C-75	8	2	VII	22.132	剥片	頁岩	16.2	23.0	7.0	2.5		
11C-75	9	2	VII	22.183	砕片	頁岩	12.9	7.8	3.7	0.4	第10図-7b	
11C-75	10	2	VII	2.138	砕片	頁岩	5.5	4.5	1.1	0.02		
11C-75	11	2	VII	22.157	砕片	頁岩	7.9	9.9	2.0	0.2		
11C-75	12	2	VII	22.102	剥片	頁岩	20.4	14.7	5.3	1.2	第10図-8f	
11C-75	13	2	VII	22.131	砕片	頁岩	6.5	11.3	1.8	0.1		
11C-75	14	2	VII	22.198	剥片	頁岩	23.2	13.2	4.3	1.7	第10図-7c	
11C-75	15a	2	VII	22.182	剥片	頁岩	13.8	21.4	2.5	0.7		
11C-75	15b	2	VII	22.182	砕片	頁片	14.0	9.9	3.0	0.3		
11C-75	16	2	IXa	22.063	剥片	頁岩	30.0	15.0	8.8	3.3	第10図-8g	
11C-86	1	3	III	22.747	尖頭器様石器	頁岩	26.4	26.8	8.8	6.7	第12図-1	
11C-87	1	3	III	22.818	砕片	安山岩	8.7	13.5	2.2	0.4		
11C-87	2	3	III	22.744	剥片	安山岩	15.9	19.8	2.3	0.8		
11C-87	3	3	III	22.756	剥片	安山岩	25.5	25.8	4.3	2.8		
11C-87	4	3	III	22.813	剥片	安山岩	27.3	22.0	8.3	4.9	第12図-5	
11C-87	5	3	III	22.800	剥片	フォルンフェルス	59.8	35.5	12.5	31.8	第12図-6	
11C-87	6	3	III	22.776	剥片	安山岩	40.9	29.9	9.6	7.8	第12図-7	
11C-87	7	3	III	22.710	剥片	安山岩	30.8	18.0	6.0	3.3	第12図-4a	
11C-87	8	3	III	22.801	砕片	安山岩	19.3	8.8	2.7	0.5		
11C-87	9	3	III	22.768	剥片	安山岩	18.5	18.0	5.1	1.5		
11C-87	10	3	III	22.760	剥片	安山岩	38.1	33.7	10.8	11.0		
11C-87	11	3	III	22.756	剥片	安山岩	19.8	14.5	4.9	1.5	第12図-4b	
11C-87	12	3	III	22.795	剥片	安山岩	24.3	14.3	2.7	1.0		
11C-87	13	3	III	22.815	剥片	安山岩	19.1	26.9	4.9	2.3		
11C-87	14	3	III	22.700	砕片	安山岩	9.7	14.7	1.9	0.3		
11C-88	1	3	III	22.690	剥片	安山岩	53.4	19.4	8.4	5.0	第12図-3	
11C-98	1	3	II	22.924	剥片	安山岩	55.0	31.4	12.5	19.5	第12図-2	
12B-37	1	4	IXa	22.190	礫片	流紋岩				42.1	第15図-12	
12B-37	2	4	IXa	22.232	剥片	安山岩（トロ）	15.3	13.6	5.2	1.2	第18図-23e	
12B-37	3	4	IXa	22.208	礫片	流紋岩				1.3		
12B-37	4	4	IXa	22.212	剥片	安山岩（トロ）	22.3	14.0	7.2	1.5		

グリッド	遺物番号	石器集中地点	層位	標高(m)	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	掲載番号	備考
12B-38	1a	4	Ⅶ	22.332	剥片	黒曜石	18.4	19.5	3.0	0.7		
12B-38	1b	4	Ⅶ	22.332	砕片	黒曜石	10.7	7.7	1.0	0.1		
12B-38	2	4	Ⅶ	22.427	剥片	頁岩	41.8	14.7	8.6	4.1	第15図-3	
12B-38	3	4	Ⅶ	22.374	剥片	頁岩	25.9	12.4	1.9	0.5		
12B-38	4	4	Ⅶ	22.388	剥片	頁岩	23.6	23.3	3.1	2.4		
12B-38	5	4	Ⅶ	22.362	ナイフ形石器	頁岩	57.3	16.5	7.0	7.0	第15図-1	
12B-38	6	4	Ⅶ	22.435	剥片	頁岩	29.7	19.6	6.3	2.0	第15図-5	
12B-38	7	4	Ⅶ	22.350	二次加工ある剥片	頁岩	27.4	19.5	4.5	2.6	第15図-4	
12B-38	8	4	Ⅶ	22.323	二次加工ある剥片	頁岩	25.1	30.7	3.6	1.7		
12B-38	9	4	Ⅶ	22.380	ナイフ形石器	頁岩	35.9	14.7	5.0	2.2	第15図-2	
12B-38	10	4	Ⅶ	22.281	剥片	頁岩	31.4	16.0	8.9	3.2	第15図-9	
12B-39	1	4	Ⅶ	22.294	石核	安山岩	49.5	47.6	25.3	71.7	第19図-25a	
12B-47	1	4	Ⅸa	22.190	礫片	石英斑岩				18.0		
12B-47	2	4	Ⅸa	22.180	砕片	安山岩（トロ）	15.9	18.3	1.9	0.8		
12B-47	3	4	Ⅸa	22.192	剥片	頁岩	42.5	18.4	9.1	9.6	第18図-24a	
12B-47	4	4	Ⅸa	22.222	剥片	安山岩（トロ）	53.3	34.9	15.5	24.5	第18図-23a	
12B-47	5	4	Ⅸa	22.225	剥片	頁岩	23.1	35.6	10.5	6.9	第10図-6b	
12B-47	6	4	Ⅸa	22.180	剥片	安山岩	23.6	25.3	7.7	4.5		
12B-47	7	4	Ⅸa	22.190	剥片	安山岩（トロ）	22.1	26.7	9.2	4.0		
12B-47	8	4	Ⅸa	22.320	剥片	安山岩	29.9	51.5	21.9	35.4	第19図-25b	
12B-47	9	4	Ⅸa	22.340	剥片	安山岩	29.2	26.3	16.7	16.2	第19図-25c	
12B-47	10	4	Ⅸa	22.260	楔形石器	頁岩	40.1	14.1	11.6	6.8	第15図-6	
12B-47	11	4	Ⅸa	22.157	礫片	石英斑岩				5.5		
12B-47	12	4	Ⅸa	22.165	石核	安山岩（トロ）	47.2	25.1	22.1	27.2	第19図-27	
12B-47	13	4	Ⅸa	22.260	砕片	安山岩（トロ）	10.3	11.3	2.7	0.3		
12B-47	14	4	Ⅸa	22.270	剥片	安山岩（トロ）	20.2	25.7	9.1	3.6	第18図-23b	
12B-47	15	4	Ⅸa	22.150	石核	安山岩（トロ）	39.4	27.6	20.1	27.0	第20図-28	
12B-47	16	4	Ⅸa	22.157	砕片	安山岩（トロ）	21.4	13.1	3.4	0.9	第18図-23c	
12B-47	17	4	Ⅸa	22.117	剥片	頁岩	24.5	22.6	8.6	4.2	第10図-6c	
12B-47	18	4	Ⅸa	22.125	剥片	頁岩	16.2	13.2	3.7	0.8		
12B-47	19	4	Ⅸa	22.225	砕片	安山岩（トロ）	17.8	9.9	6.2	0.6		
12B-47	20	4	Ⅸa	22.285	砕片	安山岩（トロ）	22.3	11.8	3.2	0.7	第17図-20a	
12B-47	21	4	Ⅸa	22.195	石核	安山岩（トロ）	36.1	42.5	35.9	62.2	第18図-23d	
12B-47	22	4	Ⅸa	22.188	剥片	安山岩（トロ）	61.5	71.1	15.9	56.9	第17図-20b	
12B-47	23	4	Ⅶ	22.335	剥片	頁岩	20.0	23.7	6.7	2.6		
12B-47	24	4	Ⅸa	22.155	剥片	頁岩	16.5	27.7	3.3	2.0		
12B-47	25	4	Ⅸa	22.118	砕片	黒曜石	7.9	5.4	2.6	0.1		
12B-47	26	4	Ⅸa	22.283	剥片	安山岩	25.4	26.2	9.1	6.8	第19図-25d	
12B-47	27	4	Ⅸa	22.294	砕片	黒曜石	5.7	9.3	1.5	0.1		
12B-47	28	4	Ⅸa	22.300	礫片	石英斑岩				66.7		
12B-47	29	4	Ⅸa	22.177	剥片	安山岩	11.9	21.9	2.9	1.0		
12B-47	30	4	Ⅸa	22.139	砕片	黒曜石	16.3	8.7	3.0	0.4		
12B-47	31	4	Ⅸa	22.110	剥片	安山岩（トロ）	32.5	23.9	5.7	4.4		
12B-47	32	4	Ⅸa	22.180	砕片	安山岩	26.2	7.7	3.3	0.6		
12B-47	33	4	Ⅸa	22.173	砕片	黒曜石	4.8	9.2	2.4	0.1		
12B-47	34	4	Ⅸa	22.215	剥片	黒曜石	12.8	15.3	6.2	1.3	第16図-17	
12B-47	35	4	Ⅸa	22.172	砕片	黒曜石	6.0	9.8	1.7	0.1		
12B-48	1	4	Ⅸa	不明	石核	安山岩	71.9	59.0	43.2	46.5	第19図-25e	
12B-48	2	4	Ⅸa	22.200	剥片	頁岩	37.0	30.2	8.2	9.8	第18図-24b	
12B-48	3	4	Ⅸa	22.172	敲石	安山岩	66.1	48.3	45.5	203.2	第21図-33	
12B-48	4	4	Ⅶ	22.314	砕片	黒曜石	14.4	7.0	3.0	0.2		
12B-48	5	4	Ⅸa	22.280	剥片	頁岩	40.1	17.2	4.3	1.8	第15図-8	
12B-57	1	4	Ⅸa	22.220	砕片	頁岩	14.0	8.8	3.1	0.3	第15図-11a	
12B-57	2	4	Ⅸa	22.110	砕片	頁岩	10.0	12.3	2.6	0.3		
12B-57	3	4	Ⅸa	22.215	礫片	砂岩				1.8	第17図-22a	
12B-57	4	4	Ⅸa	22.115	砕片	頁岩	9.3	10.0	1.0	0.9		
12B-57	5	4	Ⅸa	22.110	礫片	砂岩				0.8	第17図-22b	
12B-57	6	4	Ⅶ	22.415	礫片	砂岩				6.6		
12B-57	7	4	Ⅸa	22.155	剥片	頁岩	29.1	34.5	8.3	4.9	第16図-14	
12B-57	8	4	Ⅶ	22.320	剥片	安山岩（トロ）	48.6	27.6	9.1	11.8	第16図-19	
12B-57	9	4	Ⅸa	22.220	礫片	砂岩				1.1		
12B-57	10	4	Ⅸa	22.215	敲石	砂岩	33.2	44.2	38.8	72.8		

グリッド	遺物番号	石器集中地点	層位	標高(m)	器種	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	挿図番号	備考
12B-57	11	4	IXa	22.200	石核	頁岩	33.8	41.2	15.1	15.1	第16図-16	
12B-57	12	4	IXa	22.120	剥片	砂岩				26.6	第17図-22c	
12B-57	13	4	IXa	22.115	剥片	流紋岩				47.8	第21図-32a	
12B-57	14	4	IXa	22.115	剥片	流紋岩				50.1	第21図-32b	
12B-57	15a	4	IXa	22.295	剥片	砂岩				0.9		
12B-57	15b	4	IXa	22.295	剥片	砂岩				0.2		
12B-57	16	4	IXa	22.120	剥片	頁岩	36.9	29.9	8.6	7.1	第16図-13	
12B-57	17	4	VI	22.405	剥片	頁岩	13.4	10.0	2.5	0.4		
12B-57	18	4	IXa	22.240	剥片	多孔質安山岩				573.0		
12B-57	19a	4	IXa	22.230	剥片	砂岩				3.1	第17図-22d	
12B-57	19b	4	IXa	22.230	剥片	頁岩	10.7	23.4	6.1	1.1		
12B-57	20	4	IXa	22.257	剥片	頁岩	36.9	36.1	9.9	8.6	第16図-18	
12B-57	21	4	IXa	22.202	剥片	石英斑岩				135.0	第21図-34	
12B-58	1	4	VII	22.345	砕片	頁岩	14.1	6.8	4.8	0.8		
12B-58	2	4	VII	22.305	砕片	頁岩	27.2	12.5	7.2	1.3	第16図-11b	
12B-58	3	4	VII	22.300	剥片	多孔質安山岩				3.3		
12B-58	4	4	VII	22.305	砕片	頁岩	19.2	7.4	2.3	0.2		
12B-58	5	4	VII	22.245	剥片	頁岩	17.2	31.4	6.3	2.7	第17図-21a	
12B-58	6	4	VI	22.390	二次加工ある剥片	頁岩	27.6	16.7	6.2	1.4	第15図-7	
12B-58	7	4	VII	22.350	剥片	頁岩	21.4	13.5	2.6	0.9		
12B-58	8	4	VII	22.270	剥片	頁岩	18.4	24.2	2.3	1.1	第17図-21b	
12B-58	9	4	IXa	22.220	剥片	頁岩	45.0	35.5	13.8	24.0	第16図-10b	
12B-58	10	4	VII	22.345	石核	頁岩	48.5	31.5	17.5	27.6	第17図-21c	
12B-58	11	4	IXa	22.190	礫片	流紋岩				124.3	第21図-32c	
12B-58	12	4	IXa	22.175	礫片	砂岩				54.2	第21図-35	
12B-58	13	4	IXa	22.245	剥片	頁岩	40.3	27.9	1.28	11.6	第15図-10a	
12B-58	14	4	IXa	22.185	剥片	頁岩	12.3	26.8	6.4	2.2		
12B-58	15	4	IXa	22.160	砕片	頁岩	8.6	14.4	0.3	0.3	第17図-21d	
12B-59	1	4	VII	22.245	石核	安山岩（トロ）	41.2	27.1	22.3	23.6	第20図-30	
12B-59	2	4	IXa	22.190	石核	安山岩（トロ）	49.8	27.3	19.3	22.5	第20図-31	
12B-67	1	4	VII	22.305	石核	頁岩	21.6	35.7	19.4	15.2	第19図-26	
12B-69	1	4	VII	22.265	剥片	安山岩（トロ）	39.6	67.8	53.1	183	第18図-23f	
12B-69	2	4	VII	22.210	石核	頁岩	46.1	72.1	21.0	51.9	第16図-15	
12B-69	3	4	VII	22.245	石核	安山岩	20.7	42.2	20.9	20.7	第20図-29	
12C-59	1	5	VII	22.282	剥片	フォルンフェルス	30.3	34.9	8.4	6.5	第23図-1	
12C-69	2	5	VII	22.363	砕片	安山岩	8.5	13.9	0.5	0.2		
12C-69	3	5	VII	22.317	礫片	砂岩				0.7		
12C-69	4	5	VII	22.388	剥片	頁岩	30.0	22.1	15.7	5.9	第23図-2	
12C-69	5	5	VII	22.308	剥片	安山岩	24.5	11.6	10.3	3.1		
12D-60	1	5	VII	22.164	剥片	頁岩	10.8	21.5	1.2	0.4		
12E-07	1	6	III	22.806	剥片	メノウ	38.3	27.3	6.7	6.7	第25図-4	
12E-07	2	6	III	22.422	剥片	チャート	19.5	18.8	5.0	1.2	第25図-3	
12E-07	3	6	III	22.244	砕片	黒曜石	7.1	4.2	1.4	0.0		
12E-07	4	6	III	22.366	剥片	黒曜石	42.4	20.4	17.1	10.7	第25図-2	
12E-07	5	6	III	22.490	剥片	黒曜石	35.4	19.7	9.9	5.3	第25図-5	
12E-07	6	6	III	22.265	剥片	黒曜石	16.1	10.9	2.8	0.3		
12E-07	7	6	III	22.386	剥片	チャート	15.0	12.3	5.1	0.9		
12E-17	1	6	III	22.454	剥片	黒曜石	20.1	34.0	19.4	13.8	第25図-1	
12E-17	2	6	III	22.566	剥片	黒曜石	15.9	18.1	5.6	1.3	第25図-6	
11C-81	1	単独	V	22.280	砕片	頁岩	12.4	16.7	2.4	0.4		
12C-70	1	単独	VII	22.262	剥片	頁岩	48.0	29.6	16.5	17.5	第10図-7d	
12F-52	1	単独	III	22.906	剥片	頁岩	15.7	35.2	7.2	4.8	第29図-1	
021	7	-	-	23.177	尖頭器	黒曜石	(37.1)	19.3	8.5	(4.8)	第29図-2	



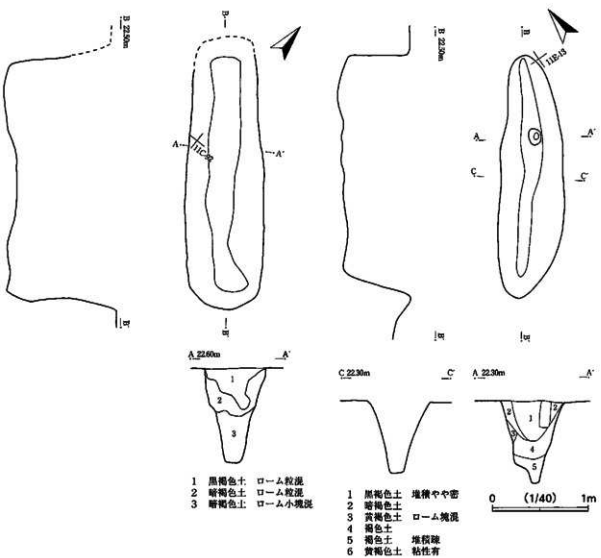
第30図　上層遺構検出状況

出土の黒曜石の尖頭器である。両側辺の両面に調整を加えている。なお、グリッド12C－70出土の石器は石器集中２の石器（7）と接合し、集中２のなかで図示している。

２．縄文時代（第30図）

縄文時代については、検出された遺構は僅かで縄文早期に見られる陥穴２基を検出したにとどまる。また遺物についても遺構からの出土はなく、確認調査の中でグリッドから土器破片が僅かに出土しているのみであった。以下のその概要を述べることとする。

（1）遺　構



第31図　012号・025号陥穴

平成４年度の第１次調査及び平成20年度の第３次調査でそれぞれ１基ずつ計２基の陥穴を検出した。

012号陥穴（第31図　図版49）

調査区の中央に入り込む浅い谷の西側、グリッド11C－92に位置する。標高は約23mの台地上である。本遺構は下層調査中に検出されたため、北端部が一部削平されている。

平面形は長楕円形である。推定規模は、2.88m×0.84mである。検出面からの深さは最大で1.2mである。長軸の方位はN－38°－Wである。底面は開口部と比べ幅が狭くなり、横断面が漏斗状を呈する。

遺物の出土はないが、Ⅲ層上面からの検出及び形態等から、早期の陥穴と考えられる。

025号陥穴（第31図　図版49）

調査区の中央に入り込む浅い谷の東側、グリッド11D－19に位置する。、標高は約22mの台地上である。上層確認作業のトレンチ内で検出された。

平面形は長楕円形である。規模は、2.55m×0.70mである。検出面からの深さは最大で0.75mである。長軸の方位はN－37°－Eである。底面は開口部と比べ幅が狭くなり、横断面が漏斗状を呈する。

遺物の出土はないが、検出及び形態等から、早期の陥穴と考えられる。

（2）遺　物

（1）土　　器（第44図　図版56）

遺構に伴っての出土ではなかったが、確認調査のトレンチ中から少量の縄文土器が出土している。第44図1～10までが縄文土器である。1・2は口縁部の土器破片である。ともに地文は無文で、胎土に金雲母片を含んでおり、口縁部の特徴から中期初頭の阿玉台式であろう。3～5は縄文のみが施紋されている土器胴部の破片である。中期中頃の加曽利E式期の土器片であろう。6～8は、いずれも地文に縄文が施されたのち工具を使い沈線で模様を描いている土器胴部の破片である。文様の特徴から後期の堀ノ内式期の土器であろう。9は縄文のみ、10は地文の縄文の上に半裁竹管やあるいは櫛歯状の工具を用いて細い平行な沈線を描いている。

（2）石　器（第44図　図版48）

チャート製の石鏃が1点確認のトレンチから出土している。長さ24.25㎜、幅16.95㎜、厚さ4.65㎜、重さ1.20ｇを測る。二等辺三角形を呈し、底辺部に腹抉を加え、脚としている。

3．弥生時代

（1）遺　構

遺跡の南側に入り込む浅い谷を挟んで西側にやや大型の竪穴住居跡1棟、東側にややまとまって西側と比べてやや小さい規模の竪穴住居跡4棟、合計5棟の弥生時代後期の竪穴住居跡を検出した。

009号住居跡（第32図　図版49）

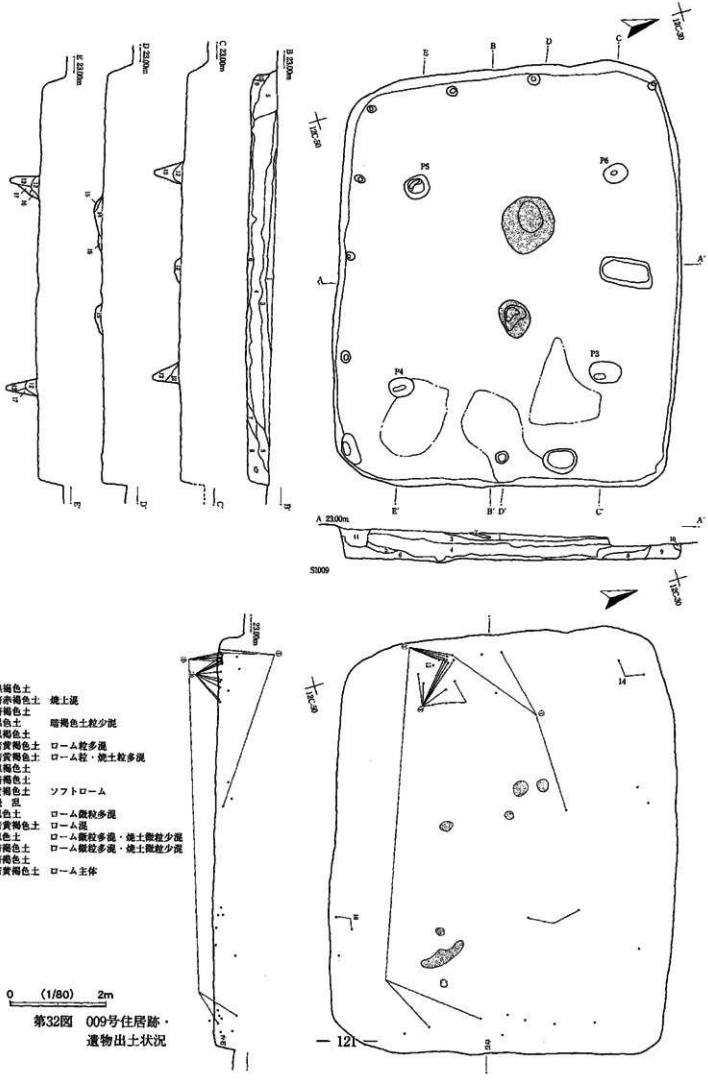
調査区西部グリッドは12C－30・31・32・40・41・42に位置する。標高は約23mである。平面形は縦長の隅丸方形で、規模は8.9m×7.2mと大形である。検出面からの深さは43cm～58cm、床面積は64.08㎡である。長軸の方位はN－72°－Wである。

床面は平坦で、東壁下付近が硬化している。壁溝はない。主柱穴は4か所検出され、平面形状は楕円形及び円形である。規模は、P1が52cm×39cm、深さ62cm。P2は、68cm×44cm、深さ55cm。P3は、52cm×40cm、深さ65cm。P4は、径47cm、深さ61cm。主柱穴以外に小ピットP5が東壁下に検出された。平面形状は円形を呈し径22cm、深さ6cmと掘り込みは浅いが、出入口ピットと考えられる。

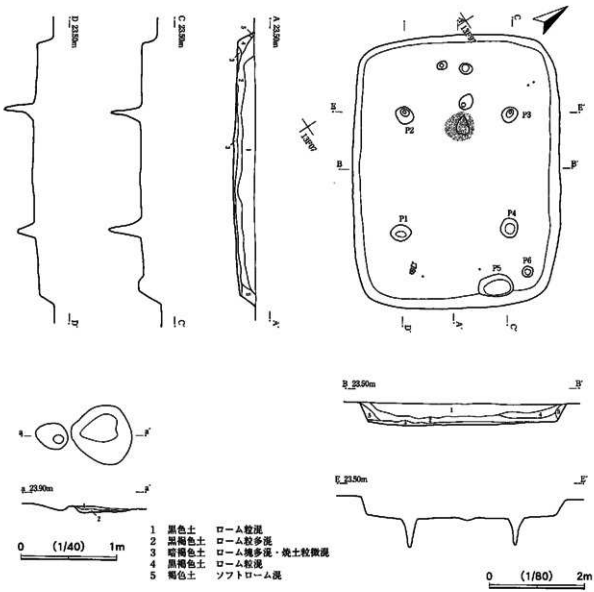
炉は床面中央に2基東西に長軸上にやや距離をいて検出された。

東壁下にP6が検出された。長軸が東壁と平行な楕円形状のピットである。規模は72cm×53cm、掘り込みは27cmである、貯蔵穴と考えられる。また、主柱穴P1とP2の中間にP7が検出された。長方形で、111cm×57cm、掘り込みは13cmである。性格は不明。

西壁と南壁にはほぼ等間隔に並んで、いずれの径も10cmほどの小ピットが8基検出された。深さは16cmから70cmと幅があり一様ではない。壁柱穴であると考える。



第32図 009号住居跡・遺物出土状況



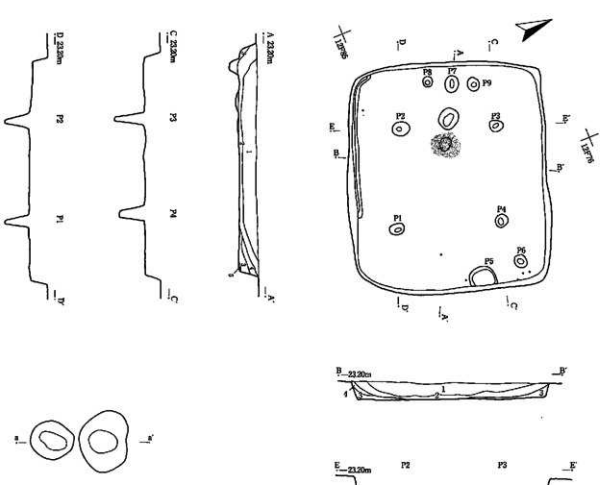
第33図　021号住居跡

住居跡の覆土は黒色土がが大半を占めており、自然堆積による埋没と考える。遺物は少量であるが住居跡全体に散漫に出土している。その中で南西隅寄り床面と、東壁下床面付近にはややまとまって遺物が出土している。

021号住居跡（第33図　図版50）

調査区東部グリッドは12F－87・96・97・98・13F－07・08に位置する。標高は約23mである。平面形は縦長の隅丸方形で、規模は5.8m×4.4mである。検出面からの深さは最大で50cm、床面積は25.52㎡である。長軸の方位はN－58°－Wである。

床面は平坦で、壁溝はない。主柱穴は４か所検出され、平面形状は楕円形及び円形である。規模は、Ｐ１が44cm×33cm、深さ35cm。Ｐ２は、37cm×32cm、深さ61cm。Ｐ３は、33cm×29cm、深さ59cm。Ｐ４は、46cm×33cm、深さ69cmである。主柱穴以外に東壁に接して平面形状が楕円形の長径73cm、短径47cm、深さ10



第34図　022号住居跡

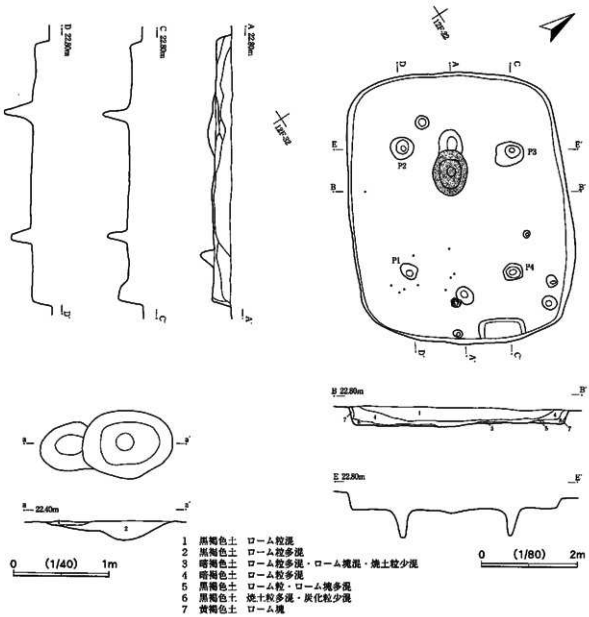
cmほどの浅いくぼみが見られるがその性格は不明である。炉は中央の西壁寄りに検出された。炉に隣接して西側に浅い凹みが見られ覆土に焼土を含む。さらに炉と西壁の間にピット状の浅い小穴が２個並んで検出されている。

住居跡の覆土は黒色土が大半を占めており、自然堆積による埋没と考える。遺物は少量であるが住居跡全体から散漫に出土している。

022号住居跡（第34図　図版50）

調査区東部グリッドは12F－75・76・85・86に位置する。標高は約23mである。平面形は縦長の隅丸方形で、規模は4.9m×4.2mである。検出面からの深さは最大で35cm、床面積は20.58㎡である。長軸の方位はN－71°－Wである。

床面は平坦で、硬化している場所は確認されなかった。壁溝はない。主柱穴は４か所検出され、平面形



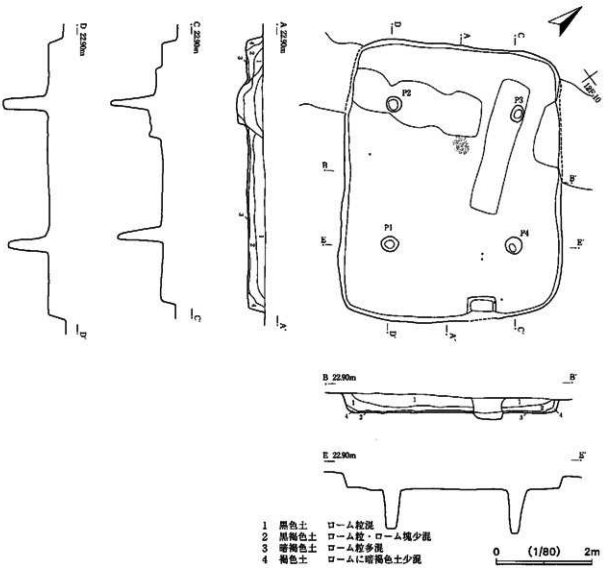
第35図　023号住居跡

状は楕円形及び円形である。規模は、P1が32cm×26cm、深さ50cm。P2は、36cm×32cm、深さ51cm。P3は、28cm×26cm、深さ64cm。P4は、28cm×26cm、深さ52cmである。主柱穴以外に東壁に接して021号住居跡と同様な平面形状が楕円形の長径54cm、短径45cm、深さ10cmほどの浅いくぼみが見られるがその性格は不明である。炉は中央の西壁寄りに検出された。炉に隣接して西側に浅い凹みが見られる。さらに炉と西壁の間にピット状の浅い坑が3個壁面と平行に並んで検出されている。

住居跡の覆土は黒色土が大半を占めており、自然堆積による埋没と考える。遺物は少量であるが住居跡全体から散漫に出土している。

023号住居跡（第35図　図版50・51）

調査区東部グリッドは12F－12・22・23・32・33に位置する。標高は約22.5mである。平面形は縦長の

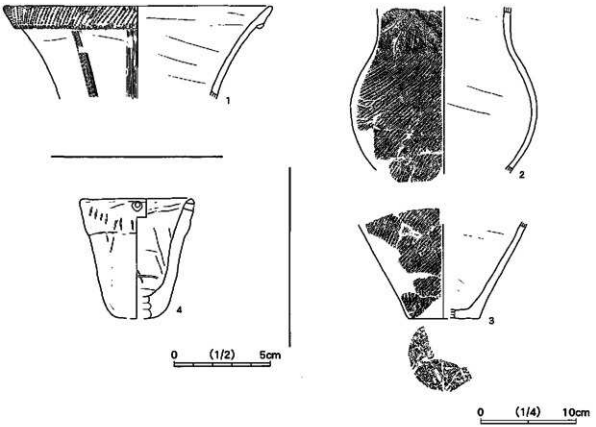


第36図　024号住居跡

隅丸方形で、規模は5.8m×4.7mである。検出面からの深さは最大で30cm、床面積は27.26㎡である。長軸の方位はN－60°－Wである。

床面は平坦で、硬化している場所は確認されなかった。壁溝はない。主柱穴は4か所検出され、平面形状は楕円形及び円形である。規模は、P1が38cm×28cm、深さ40cm。P2は、48cm×47cm、深さ57cm。P3は、59cm×50cm、深さ55cm。P4は、40cm×33cm、深さ42cmである。主柱穴以外ではP1とP4の真ん中やや壁よりに主柱穴様のピットがある。また東壁に接して021号住居跡と同様に平面形状が隅丸長方形の長軸93cm、短軸45cm、深さ10cmほどの浅いくぼみが見られるがその性格は不明である。

住居跡の覆土は黒色土が大半を占めており、自然堆積による埋没と考える。遺物は少量であるが住居跡全体から散漫に出土している。



第37図　009号住居跡出土遺物（1）

024号住居跡（第36図　図版50･51）

調査区東部グリッドは12E－19・28・29・38・39・12F-10・20・21・22・30・31に位置する。標高は約22.5mである。平面形は縦長の隅丸方形で、規模は6.0m×4.7mと大形である。検出面からの深さは43cm～58cm、床面積は28.20㎡である。長軸の方位はN－54°－Wである。住居西側で溝状遺構（新）と重複しており壁及び床面が攪乱を受けている。

床面は平坦で、硬化している場所は確認されなかった。壁溝はない。主柱穴は4か所検出され、平面形状は楕円形及び円形である。規模は、P1が34cm×34cm、深さ83cm。P2は溝による攪乱を受け現存値は、直径32cm、深さ92cm。P3も溝により攪乱を受け、現存値は、36cm×27cm、深さ104cm。P4は、36cm×34cm、深さ94cmである。主柱穴以外では東壁に接して023号住居跡と同様な平面形状が隅丸長方形の長軸62cm、短軸35cm、深さ15cmほどの浅い凹みが見られるがその性格は不明である

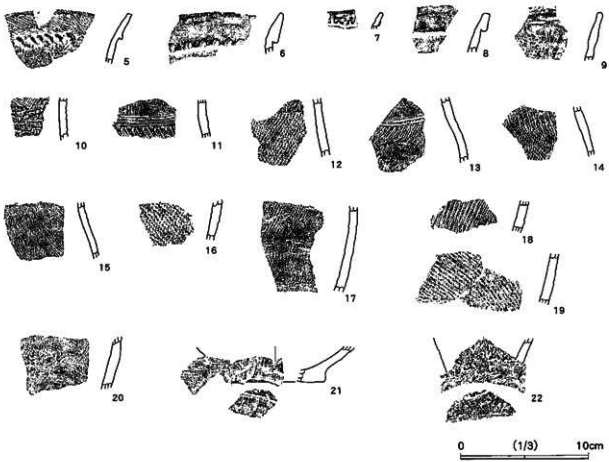
住居跡の覆土は溝による攪乱部分を除くと、黒色土が大半を占めており、自然堆積による埋没と考える。遺物は少量であるが住居跡全体から散漫に出土している。

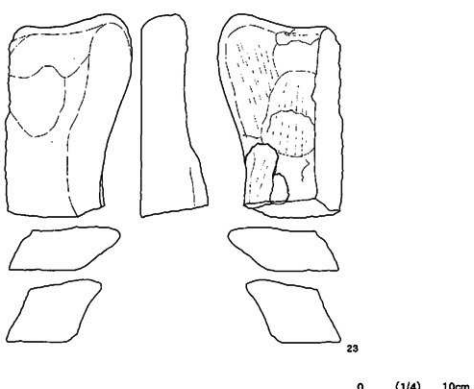
（2）遺　物

（1）遺構出土遺物

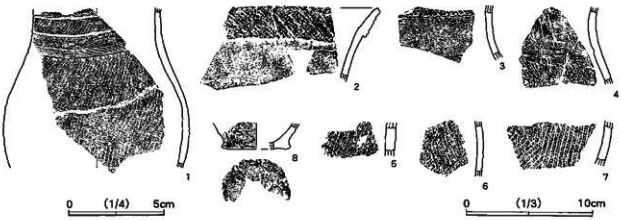
009号住居跡（第37・38図　図版52・53）

1は甕の口縁部である。折り返し口縁で口唇部と口縁には撚糸文が施文されている。口縁部の段下部に

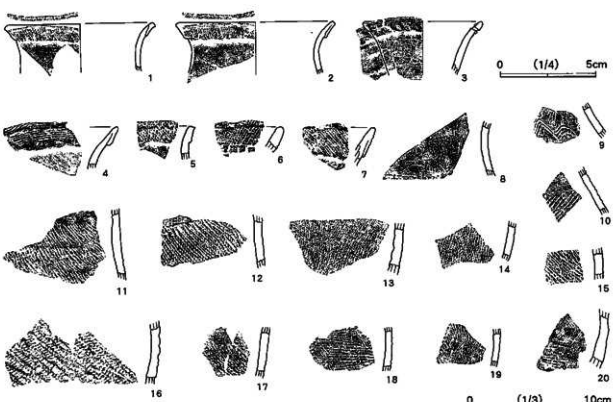




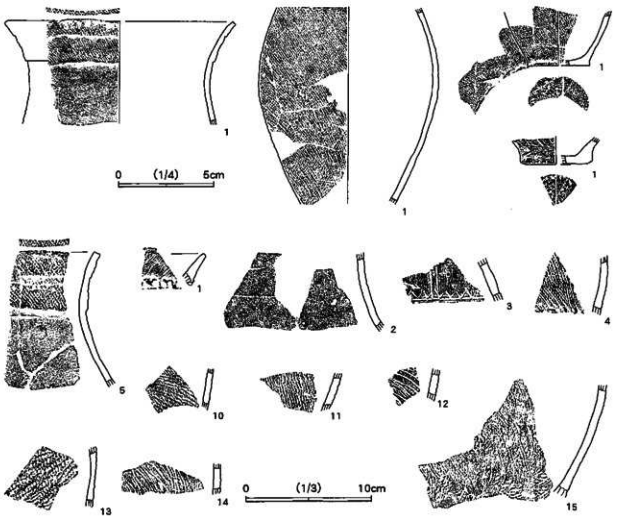
第38図　009号住居跡出土遺物（2）



第39図　021号住居跡出土遺物

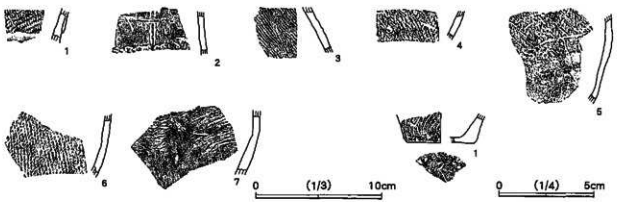


第40図　022号住居跡出土遺物



第41図　023号住居跡出土遺物

は棒状工具の押圧による刻みが巡る。以下は地文を無文としたなかに幅1㎝ほどの櫛歯状工具による浅い沈線が口縁直下から等間隔で垂直に施文されている。2は甕の胴部である。無文の頸部から球状に膨らむあたり以下の胴部には撚糸文のみが底部に向かって全面に施文されている。3は甕の底部附近である。底部直上まで撚糸文のみが施文されている。底部には木葉痕が残る。4はミニチュアの深鉢形土器である。口縁部は折り返しの有段の口縁とし、上には串の先端で押し引きした細い沈線をまるで撚糸文を施文するように施文している。口縁以下は底部まで無文である。また口縁の口唇部に近いところに1か所焼成前に細い穴があけられている。5～8は甕の口縁部の破片である。5は口唇部及び口縁に撚糸文を施文し、口縁の撚糸文下部には棒状工具を押し引きして折り返しの有段口縁に見せかけている。以下は無文である。6は無文の折り返し口縁である。口縁下部には棒状工具の押圧による刻みが連続して巡る。以下は無文である。7はミニチュアの甕の口縁である。文様等については6同様である。8は甕の口縁である。口縁下部に刻みがないほかは6・7と同様である。9は小型の深鉢土器の口縁である。口唇直下の外面には沈線上の浅い凹みが横走する。以下無文を主とするが、一部に撚糸文も施文されている。10～15は甕の頸部か



第42図　024号住居跡出土遺物

ら胴部に係る附近の破片である。頸部以下には撚糸文が施文されている。10・11は頸部に擦歯状の沈線を、11-13は頸部の下部に沈線を横走させて、胴部との境としている。16～20は胴部の破片である。全面に撚糸文が施文されている。20には粗いが結節文が見られる。21・22は底部の破片である。底部直上まで撚糸文が施文されている。底部には木葉痕が残る。23は一部に使用痕が残り砥石として利用された大きな礫破片である。被熱しひび割れている。

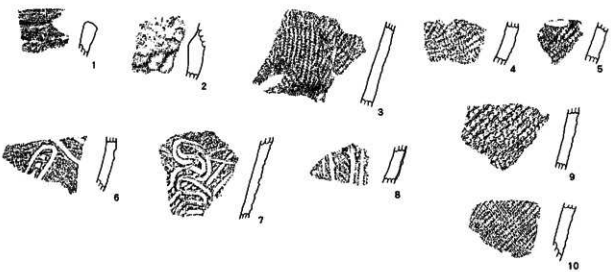
021号住居跡（第39図　図版54）

1は甕の頸部から胴部にかけての破片である。頸部には横走する沈線によって挟まれて撚糸文が一周する。頸部下部には擦歯状工具による浅い沈線が横走して、胴部との境を明確にしている。胴部には撚糸文が全面に施文されている。2は甕の口縁部である。折り返しの口縁には口唇部まで撚糸文が施文されている。以下頸部は無文である。3・4は甕の口縁部である。3は撚糸文が施文されている。4は無文の頸部以下胴部にはよりの弱い撚糸文が施文されている。5～7は甕の胴部の破片である。撚糸文が施文されている。8は甕の底部である。残る胴部には撚糸の施文は見られない。底部には細い糸で編んだ布目が残っている。

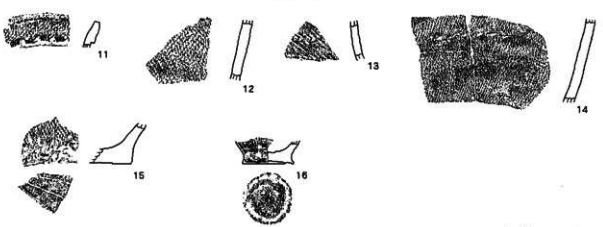
022号住居跡（第40図　図版54）

1・2、4～7は甕の口縁部である。いずれも折り返し口縁である。有段部と口唇部には同じ原体の撚糸文が施文されている。口縁部以下は無文である。4は撚りが弱く沈線状に見える、また、6は有段下部に細い沈線を巡らせ、その下に細い半裁竹管様工具で刻みを連続して施文している。3は深鉢土器の口縁から頸部附近である。口縁部は折り返しで段を有する。口縁も含め無文である。口縁部も一部では段もないところもあり厚さや幅が一定になっておらず全体に作りは雑で、とくに外面には細かな凹凸が目立つ。口縁部には焼成前にあけた穴が付けられている。8～10は甕の頸部附近である。8の頸部は無文である。9は頸部の破片で地紋である無文の上に半裁竹管様工具による山形とも波形ともいえる沈線文を施文している。10は頸部には擦歯状工具による平行沈線を、以下胴部には撚糸文を施文している。11・12は頸部附近である。無文の頸部以下胴部には撚糸文が施文されている。13～19は甕の胴部の破片である。撚糸文が全面に施文されている。20は底部附近の破片である。無文である

023号住居跡（第41図　図版55）



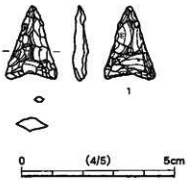
縄文土器



弥生土器

土師器

第43図　グリッド出土遺物



第44図　縄文時代石器

1は甕の口縁から頸部の破片である。折り返し口縁の上にさらに粘土を巡らし、口縁の幅を広くし段を増やして二段にしている。口縁部及び口唇部には撚糸文が施文されている。以下頸部は無文である。
2は甕の胴部である。撚糸文が全面に施文されている。3・4は甕の底部である。ともに底部直上まで撚糸文が施文されている。底部には木葉痕が残る。3は甕の口縁部附近である。1と同様に口縁部は2段となり撚糸文が施文され、頸部は無文である。4は甕の口縁部である。折り返し口縁で段を有し、口唇部を含め撚糸文が施文されている。下端には縄文原体を横圧して刻みを連続して加えている。7は甕の頸部で、無文である。9～14は甕の胴部である。撚糸文が施文されている。15は甕の底部附近である。
撚糸文が施文されている。
024号住居跡（第42図　図版55）
1は甕の口縁部である。撚糸文が施文されている折り返し口縁である。口唇部が欠損している。2は甕の頸部である。無文の地紋の上に棒状工具によるヘ遺構沈線が間隔を於いて口縁から垂直に施文されている。また、これに直交するような浅い沈線も加えられている。3～7は甕の胴部である。撚糸文が施文されている。7は胴部でも底部に近いのか下部には無文帯が見られる。8は底部である。底部直上まで撚糸文が施文されている。底部には木葉痕が残る。

（2）遺構外出土遺物（第43図　図版56）
遺構外からも少量ではあるが土器が出土している。11は甕の口縁部である。口縁は折り返しによる有段であり、撚糸紋が施文されている。口唇部は平坦に整形され、上から撚糸を回転させ施文している。12～14は胴部の破片である。12は撚糸文が方向を違えて羽状様に施文されている。13・14には結節文も見られる。15・16は土器底部附近の破片である。15は底部直前まで撚糸が施文されている。底部には木葉痕が残る。16は小型の土器底部である15同様底部直前まで撚糸が施文されている。

4．古代・中・近世
（1）遺　構
遺構状遺構は確認調査の中で6条が確認されたが、ほとんどが近世以降の溝であり、中世以前と確認されるものは010号の溝1条のみであった。検出状況等から奈良・平安時代の遺構であると考えられる。

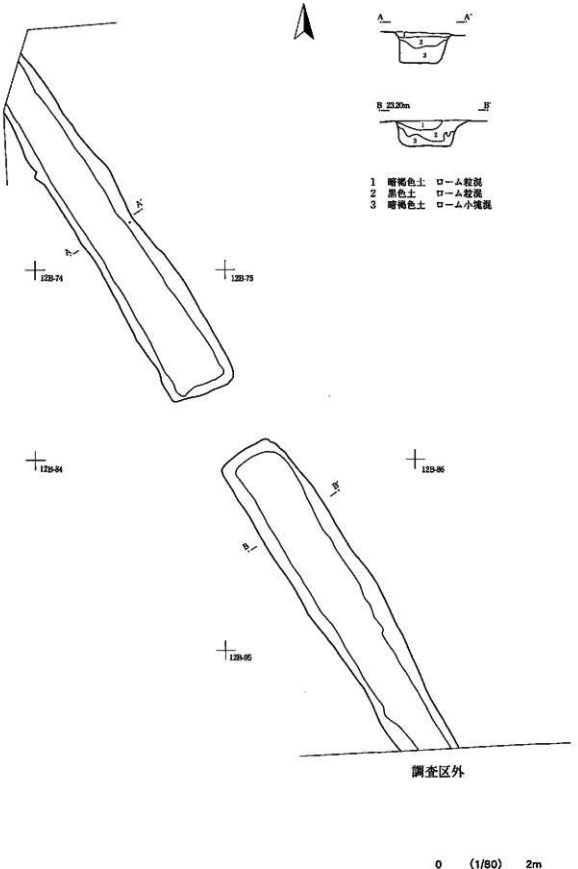
第２表　弥生時代土器観察表

（　）は復元値、［　］は現存値を表す

挿図番号	器種	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	焼成	特徴
００９号住居跡										
1	壺	42	(28.0)	－	[9.7]	10% 口縁部	外　明褐色 内　明褐色	密　砂粒多	良	口縁部熱糸文、下端刻み目、頸部縦方向櫛描文、ナデ。 内面　ナデ
2	甕	4.25.49. 51.53.60. 63	－	－	[17.0]	20% 胴部	外　暗褐色 一部明褐色 内　暗褐色 一部明赤褐色	密　細砂粒やや多	良	外面　上半部ナデ、下半部以下撚糸文、炭化物付着 内面　ていねいなナデ。
3	甕	41.42.43. 44.45.46. 48.53.60	－	(7.4)	－	20% 底部	外　明赤褐色 内　暗褐色 一部明褐色	密　細砂粒やや多	良	外面　上半部ナデ、下半部から部付近R撚糸文 内面　ていねいなナデ 底部　木葉痕
4	手捏上器	61.67	(5.6)	(2.0)	6.3	30%	外　灰褐色 一部暗褐色 内　灰褐色	密　砂粒を少し	良	外面　全体にナデ 内面　全体にナデ 口縁部に焼成前の穿孔
０２１号住居跡										
1	甕	3.9	－	－	[16.4]	5% 胴部	外　明褐色・黒褐色・にぶい橙色 内　にぶい褐色	密　石英　長石 砂粒多い	良	外面　頸部撚糸文の帯　下部櫛歯状沈線横走 胴部撚糸文 内　ナデ
8	甕	1.2.3	－	(7.0)	[2.8]	5% 底部	外　にぶい橙色 内　にぶい褐色	密　石英　長石 砂粒多い	良	外　無文 内　ナデ 底部布目
０２２号住居跡										
1	甕	3.024-1	(15.7)	－	[5.0]	5% 口縁部	外　黒褐色 内　黒褐色	密　細砂粒を少し	良	外　口縁は有段撚糸文　頸部は無文 内　ナデ
2	甕	10.024-2	(16.1)	－	[5.6]	5% 口縁部	外　黒褐色 にぶい横橙色 内　黒褐色	密　細砂粒を少し	良	外　口縁は折返し撚糸文 内　ナデ
3	甕	3.4	(12.3)	－	[5.6]	35% 口縁部	外　黒褐色 にぶい褐色 内　黒褐色 にぶい橙色	密　細砂粒を少し	良	外　口縁は折返し撚糸文 内　ナデ
０２３号住居跡										
1	甕	2.7.9.10. 12.13.15	(23.6)	－	[10.9]	20% 口縁部	外　褐色　黒褐色 内　明褐色	密　細砂粒を少し	良	外　口縁折返し二段撚糸文　頸部は無文 内　ミガキ
2	甕	1.15	－	－	[20.7]	胴部	外　明褐色　橙色 内　にぶい横橙色　橙色	密　長石　細砂粒 少し	良	外　撚糸文 内　ミガキ
3	甕	4.11	－	(6.5)	[5.8]	5% 底部	外　黒褐色 内　橙色	密　長石　細砂粒 少し	良	外　底部附近まで撚糸文 内　ナデ 底部木葉痕
4	甕	5	－	(7.4)	[3.7]	5% 底部	外　にぶい黄褐色 内　橙色	密　長石　細砂粒 少し	良	外　底部附近まで撚糸文 内　ナデ 底部木葉痕
０２４号住居跡										
8	甕	5	－	(7.0)	[3.2]	5% 底部	外　にぶい褐色 内　にぶい褐色	密　石英　長石 砂粒	良	外　底部附近まで撚糸文 内　ナデ

第３表　出土銭貨計測表

出土地点	遺物番号	挿図番号	種別	縁外径（mm）	縁内径（mm）	郭外径（mm）	郭内径（mm）	縁厚（mm）	肌厚（mm）	重さ（g）	備考
006	0001	1	寛永通宝	24.1	20.3	6.8	5.6	1.2	0.8	2.37	古寛永
006	0001	2	寛永通宝	23.3	18.3	7.3	6.3	1.2	0.8	2.12	新寛永


A
A'
B 23.20m
B'
1 暗褐色土 ローム粒混
2 黒色土 ローム粒混
3 暗褐色土 ローム小塊混
12B-74
12B-75
12B-84
12B-85
12B-95
調査区外
0 (1/80) 2m

第45図 010号溝

010号溝状遺構（第45図　図版51）

調査区の西端に位置する。グリッドは12B－63・64・74・85・95・96に位置する。標高は約23mである。北西から南東方向の溝で、検出された全長は17.2mである。北側と南側に二分される。北側は長さ8.2mで、幅は1.1m～1.3m、深さ0.63mを計る。南側は長さ7.7mで、幅は1.10m～1.50m、深さ0.51mを測る。本溝を南北に二分する土橋状の幅は1.3mである。底面は全体を通してほぼ平坦で、床面の硬化は認められなかった。溝の長軸での方向はN-32°-Wである。

（2）遺　物

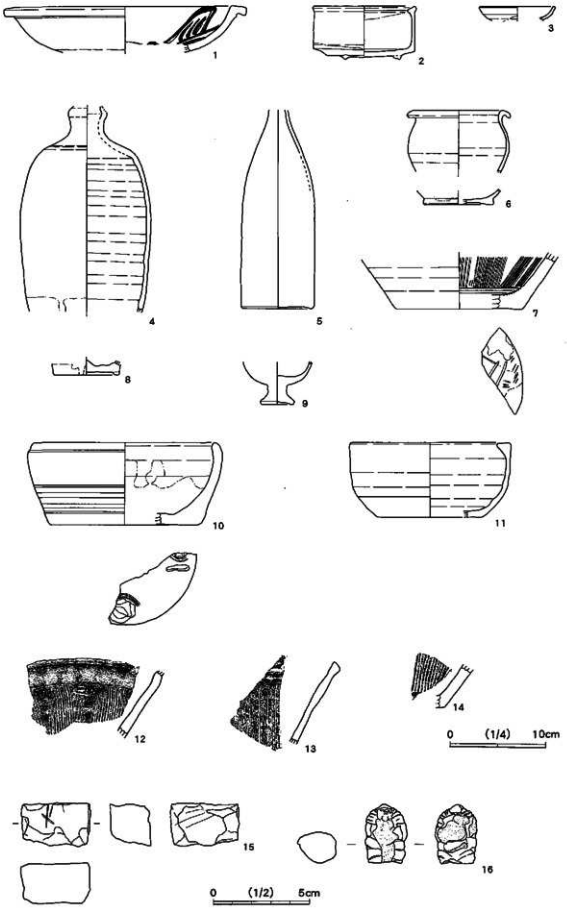
遺構からの出土はなかったが、溝の附近から溝と同時期と思われる土器が出土している。第44図18・19がそれである。いずれも坏の底部附近の破片である。

これら以外にも、中・近世の陶磁器類が多く出土している。本遺跡内に所在する庚申塔列（武西の百庚申塚）との関連も考えられるので、調査中に庚申列周辺から出土した主な遺物を取り上げ報告することとした。

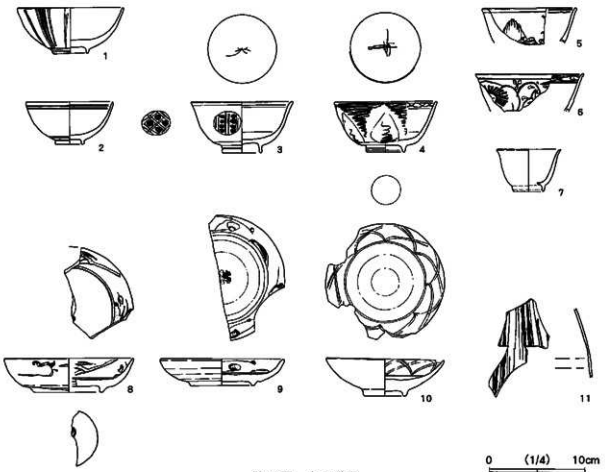
（1）陶磁器（第46・47図　図版57・58）

第46図は、陶器類等をまとめたもので、1は瀬戸・美濃産の陶器で灰釉石皿で、19世紀前半のものである。底部が欠け、高さは不明だが口径は約20cmと考えられる。内面には呉須絵の文様が描かれている。2は瀬戸・美濃産の陶器で灰釉の香炉で、18世紀初頭のものである。口径は10.5cm、高さは8cmを計る。底部には貼付足が付けられ、施釉は口縁と外面に施されている。3は瀬戸・美濃産の陶器の灯明皿である。口縁部附近の一部が残る。18世紀後半から19世紀のものである。口径は8cmほどであろう。4は瀬戸・美濃産の陶器の灰釉徳利で、18世紀後半から19世紀初頭のものである。口唇部と胴部下半を欠く胴径は13.8cm、残存高は21.7cmを計る。5は瀬戸・美濃産の陶器の灰釉徳利で、19世紀ごろのものか。外面は透明釉が施されている。口縁部附近を欠く、底径は7.2cm、残存高は26cmを計る。6は小型の鉄釉壷で口径約11cmである。近世のものであるが、時期・産地の詳細は不明である。口縁から胴部と底部、破片での出土で接合はしないが同一個体と考えられる。7は瀬戸・美濃産の陶器の鉄12釉擂鉢である。近世のものであるが、底部附近の一部が残るのみで、時期の詳細は不明である。また、底部には砥石として使われたのか、細く浅い溝が見られる。8は瀬戸・美濃産の陶器の灰釉徳利の底部である。底径は約6.8cm。4で示した徳利系の底部であろう。9は陶器の高坏形を示す仏飯器である。口縁が欠けている。近世のものであるが、時期の詳細は不明である。産地も不詳である。10・11は土製火鉢である。いずれも近世のものであるが、時期の詳細は不明である。10は瓦質で厚みのある作りで、底部には脚月いていた痕跡も見られる。11は、土師質で10と比べ薄く作られている。口径は約19cm～17cmほどで大きさにそれほどの差はないと思われる。12～14は擂鉢と考えられる破片である。12は瀬戸・美濃産の擂鉢の口縁付近の破片で、18世紀代と考えられる。13は丹波産の擂鉢の口縁付近の破片で17世紀代と考えられる。14は堺産の近世の擂鉢の底部附近の破片と考えられる。15は凝灰岩質の砥石破片である。

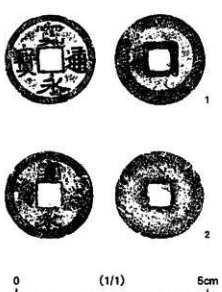
第47図は、磁器をまとめたもので、1～6は碗である。1・2・4はコバルト染付碗でいずれも19世紀後半、明治に入ってからのものと考えられる。3・5・6は瀬戸美濃産の染付端反碗である。いずれも19世紀のものである。7は瀬戸美濃産の18世紀～19世紀の白磁小杯である。8は肥前産の染付皿で、18世紀代と考えられる。9・10は肥前産の染付輪禿皿である。9は18世紀代、10は17世紀後半である。11は瀬戸美濃産のコバルト染付徳利で19世紀後半のものである。



第46図　出土陶磁器等



第47図　出土磁器



第48図　出土銭貨

参考文献
藤澤良裕　1998年『瀬戸市史　陶磁史編　六』
水本和美　1998年「豊島区遺跡調査会　陶磁器・土器　分類・計数基準」『伝中　上富士前Ⅱ』豊島区教育委員会

（2）土製品（第46図）

16は素焼きの高さ31.2㎜、幅22.2㎜、厚さ18.3㎜を計る人形の形をした泥メンコである。全体的に作りも悪く、欠損箇所も多いのだが、鯛を左脇に抱えている様にも見えることから七福神の一人である恵比寿をかたどったものであろうと考える。

（3）銭　貨（第48図　図版57）

1・2いずれも寛永通宝である。1は比較的良好な状態で面・背ともに腐食も少なく文字もはっきり読みとれる。縁及び郭の幅が面側より背側の方が幅が少し広くなっている。また文字の書体などから古寛永に分類される。2は1と比べ若干小ぶりである。腐食が進み文字ははっきりとは読みとれないものの、その特徴から新寛永に分類される。

第4節　小　結

本遺跡の三次にわたる発掘調査では、旧石器時代石器群及び弥生時代の遺構・遺物の出土が特筆される。

旧石器時代　検出された石器の多くは遺跡の南に入り込む浅い小支谷西側台地に分布し石器群を構成している、これらはＡＴ降灰以前の立川ローム層Ⅶ層～Ⅸ層に包含される石器群がほとんどであり、なかには40m以上の隔たりを持って接合する石器もみられる。ＡＴ降灰以降の石器群は立川ローム層Ⅲ層からの出土であり、その数は僅かである。また、石器群を作る石材についてはＡＴ降灰以前の石器群では頁岩及び安山岩系でその3/4を占めるのに対し、ＡＴ降灰以降の石器群では頁岩もあるものの僅かで安山岩及び黒曜石で3/4を占める様相を示している。

弥生時代　本遺跡において弥生時代の住居跡が５棟検出されているが、遺跡の南に入り込む浅い小支谷西側台地にやや大型の住居跡が１棟検出されたのみであるのに対し、東側では同じような規模の４棟がこれもまた長軸の方向をほぼ同じくし、僅かな隔たりを持って２棟ずつまとまるようにして検出されている。

出土遺物は全体的に少なく、それも小さな土器破片が多く接合しても本来の形状を知るに足るような土器の復元ができるものは非常に少なかった。

遺跡の東に位置する鳴神山遺跡、白井谷奥遺跡、南に隣接する向新田遺跡には当該期の遺構の検出例がなく、この辺の地域では数少ない弥生時代後期の（小）集落跡といえる。

武西の百庚申塚　最後に本遺跡内に所在する庚申塔列について述べることにする。位置は北総鉄道千葉ニュータウン中央駅の南西方向、距離にして約１km、東京電気大学の東を走る道路に隣接して立地する。印西市内には武西のほか浦部・小林の２か所にも残るが、その中でも昔の佇まいを最も残しているのが本庚申塔塚と言われている。古くから武西と戸神を結ぶ旧道筋に沿って文久三年（1863年）造立の庚申などと書かれた文字塔（90基）列の間に青面金剛像などが彫られた刻像塔（10基）を配置しながら小高い土手の上に並ぶ総数百基の塔列である。この百庚申は造立当時の形態を良好に残し、造塔様式、造立の由来や信仰の様態を伝える石像物などを多く残していることなどから平成11年３月25日に印西市の史跡に指定されている。（図版59）

写真図版

①泉北個第１遺跡・②大森割野遺跡・③割野所在野馬土手・④泉北個第２遺跡・⑤泉北個第３遺跡

1、調査前風景

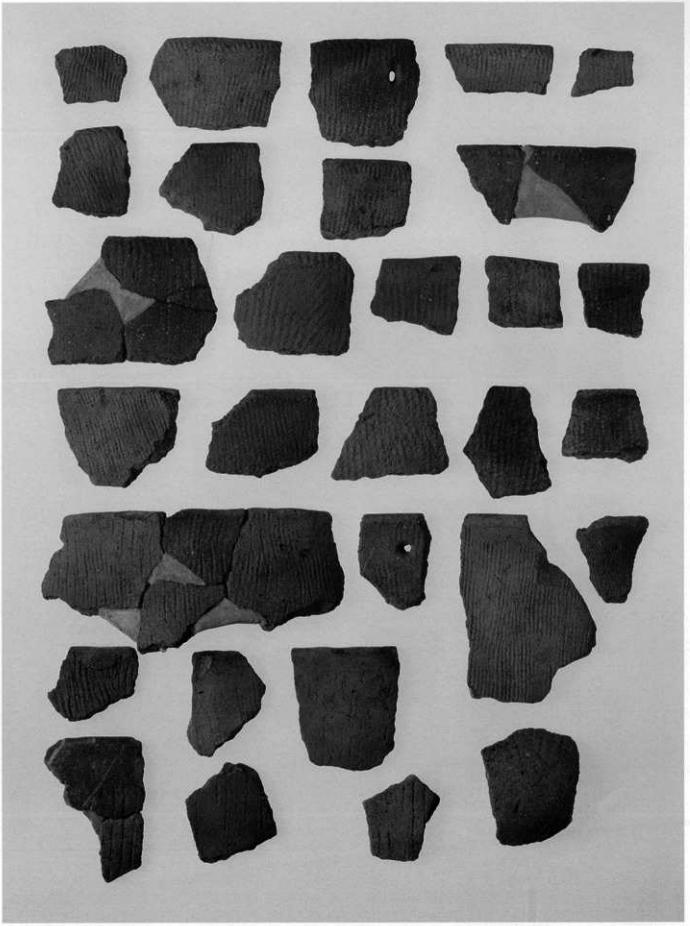
2、遺物出土状況（北から）

3、遺物出土状況（南西から）

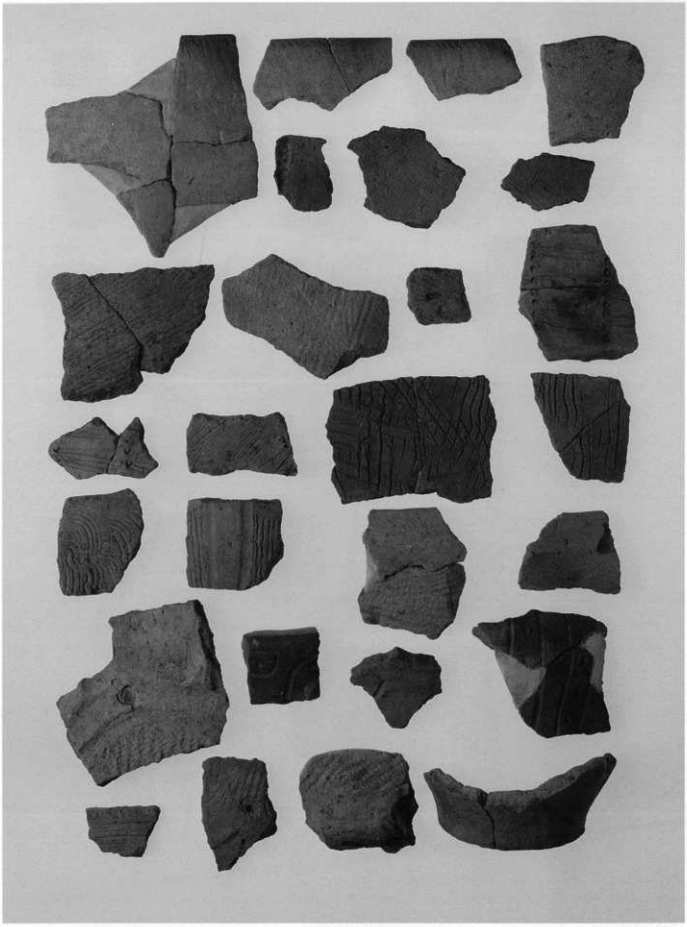
4、001号土坑全景

5、石器出土状況（南から）

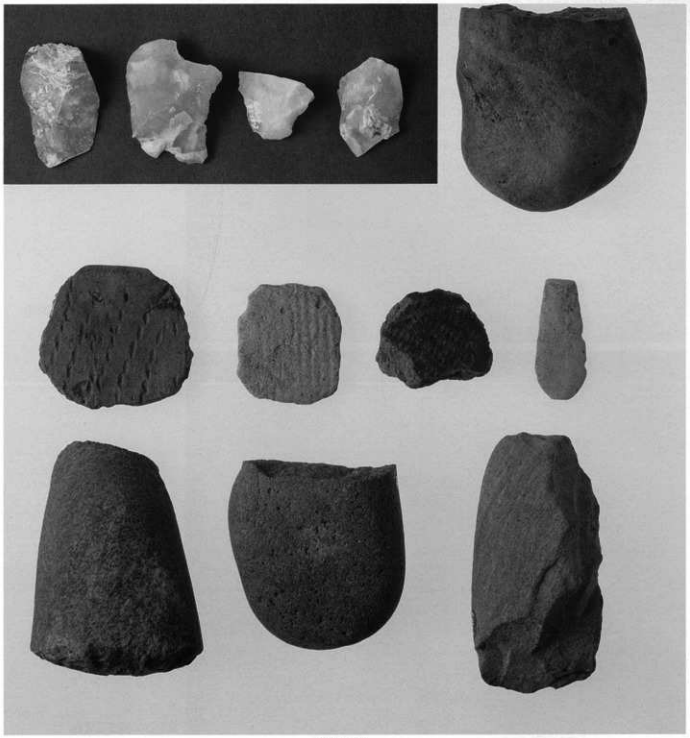
6、石器出土地点付近の層序



出土土器（1）



出土土器（2）



出土石器

1、3J-00グリッド周辺遺物
出土状況（南から）

2、3J-00周辺遺物
出土状況（南西から）

3、001号跡全景

4、002号跡全景

1、2J区石器出土状況（南から）

2、2K区石器
出土状況（東から）

3、3J-06グリッド周辺礫群
出土状況（東から）

1、3F-00グリッド周辺遺物出土状況（南西から）

2、7F-00グリッド周辺遺物
出土状況（北から）

3、5H区トレンチ遺物
出土状況（東から）

1、8H-00グリッド周辺遺物
出土状況（北から）

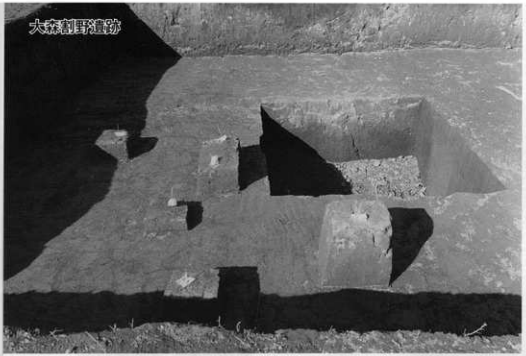
2、同上（南西から）

3、
同上（西から）

1、8G-00グリッド周辺
遺物出土状況（北西から）

2、同上（北から）

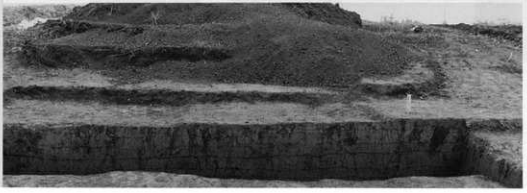
3、9G－05グリッド周辺
遺物出土状況（西から）



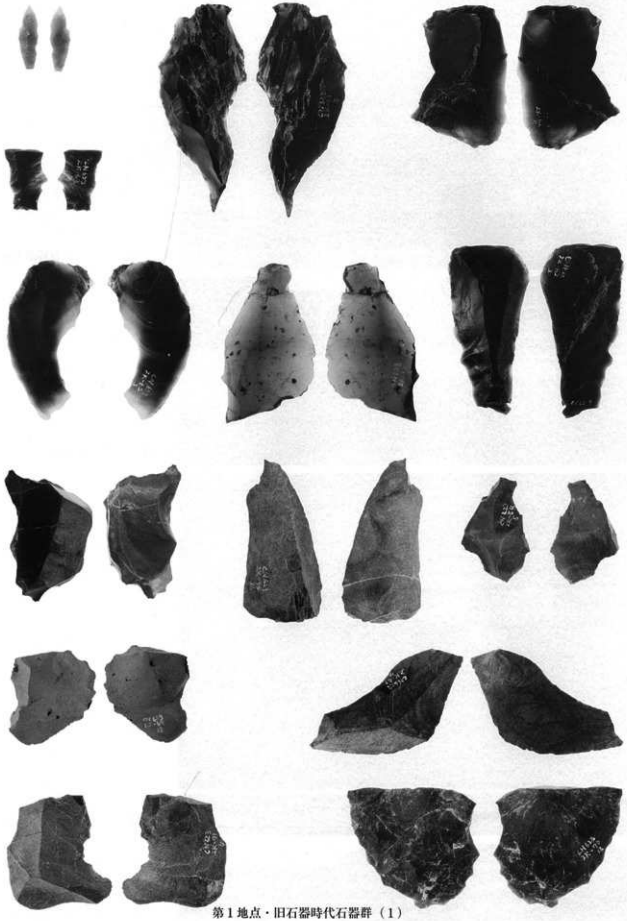
1、9G-50グリッド石器出土状況

2、同上付近土層断面

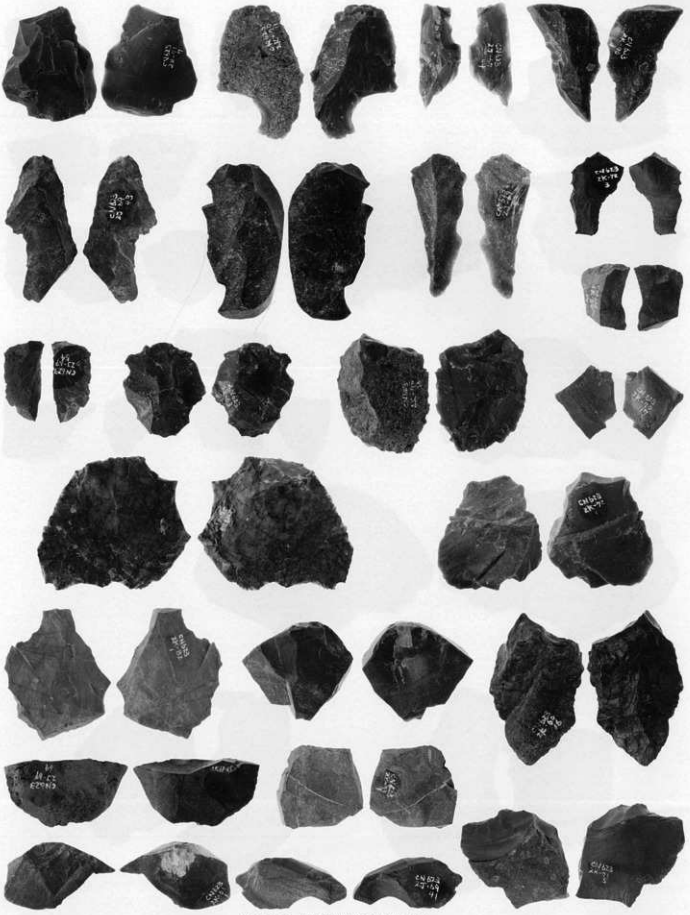
3、9F-57グリッド石器出土状況



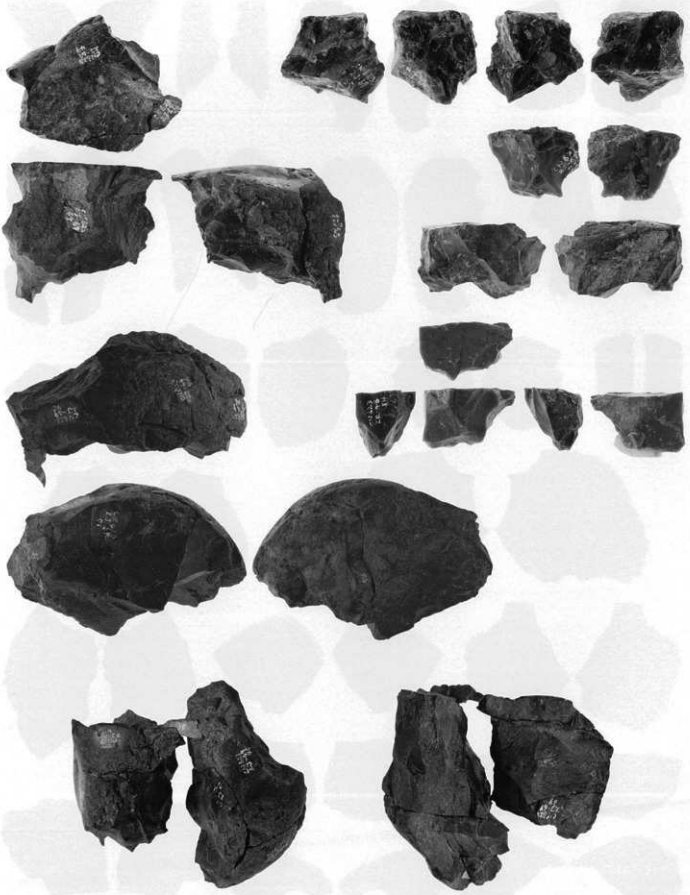
4、同上付近土層断面



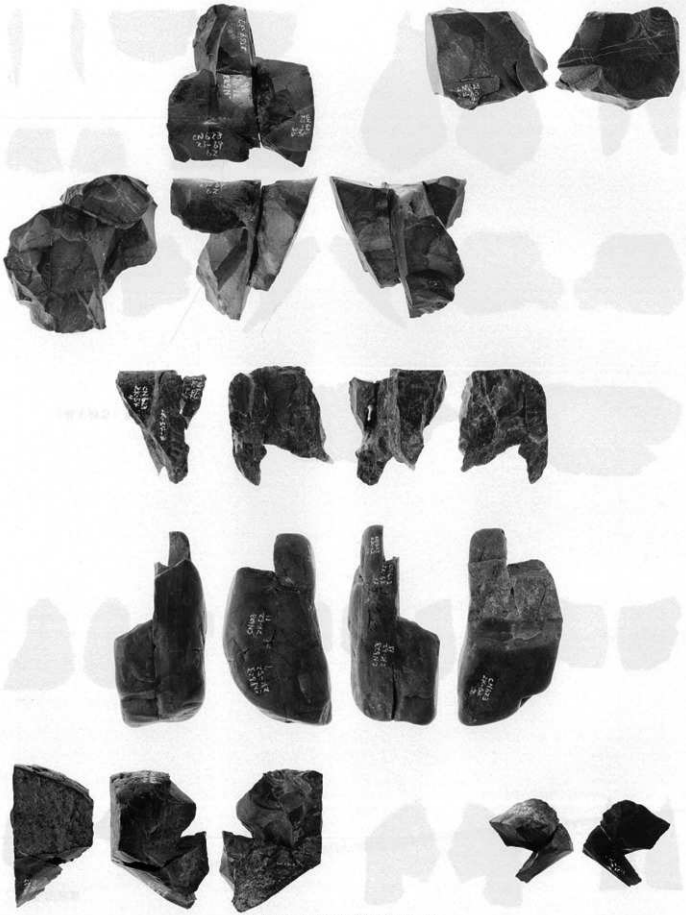
第 1 地点・旧石器時代石器群（1）



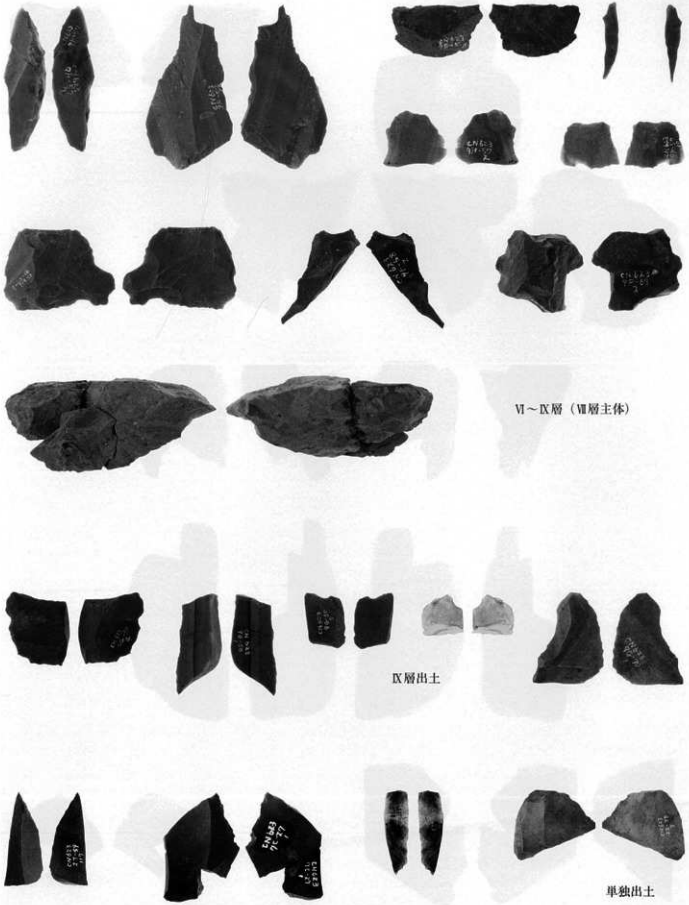
第 1 地点・旧石器時代石器群（2）



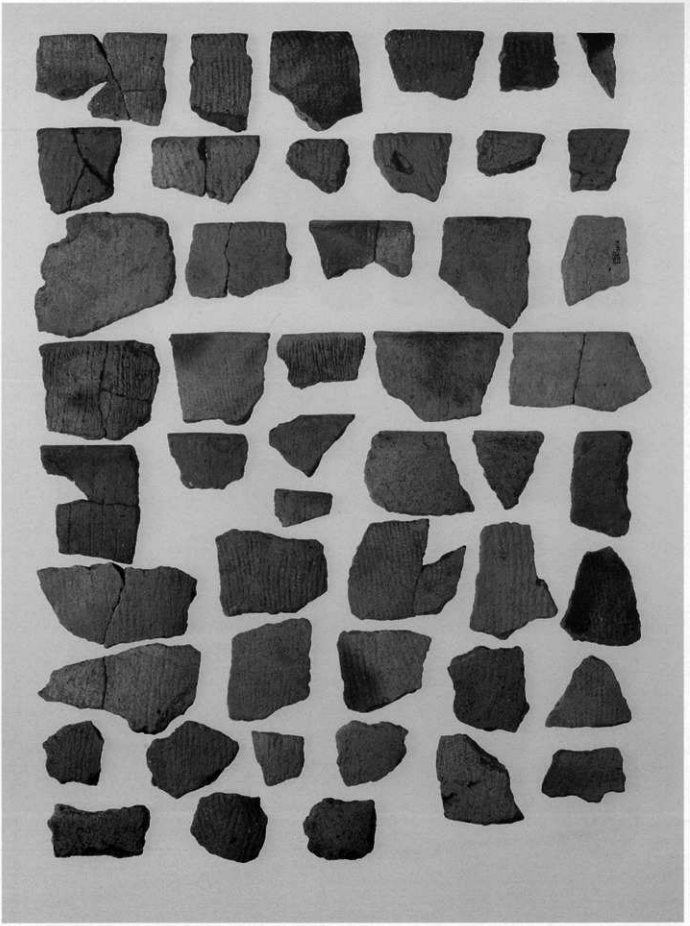
第1地点・旧石器時代石器群（3）



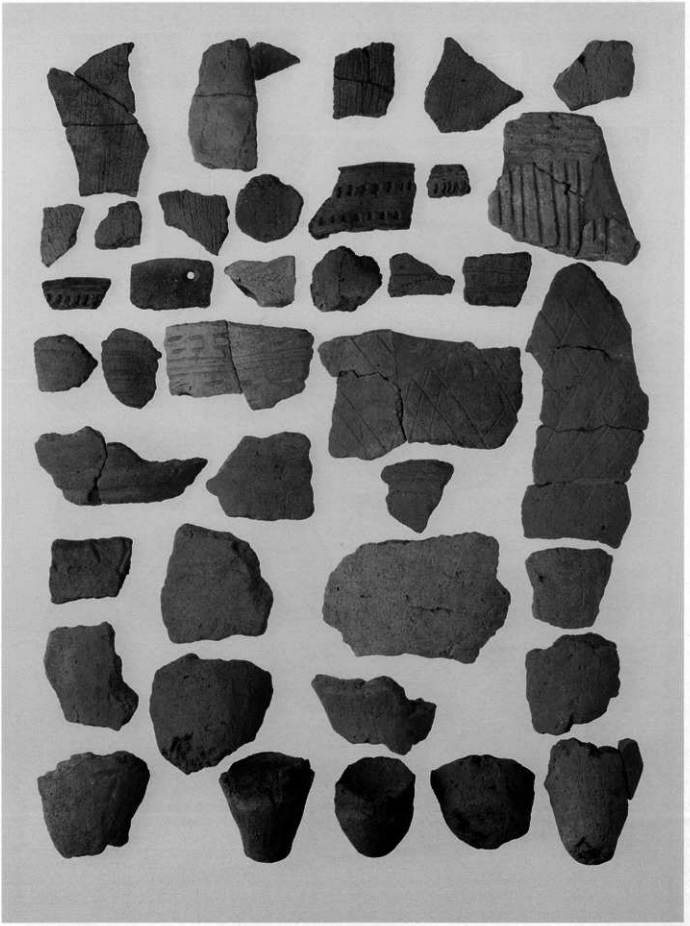
第1地点・旧石器時代石器群（4）



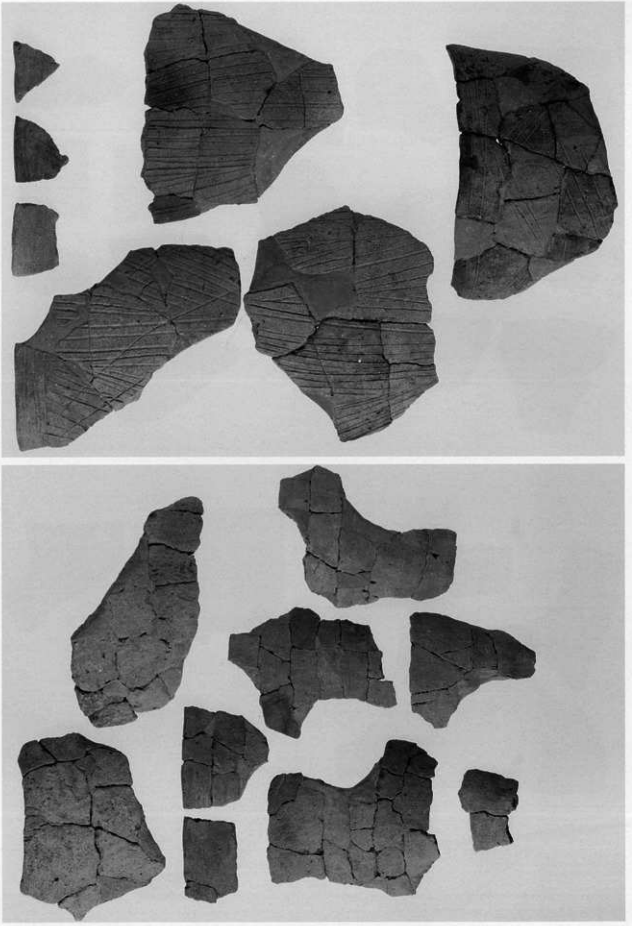
第２地点・旧石器時代石器群



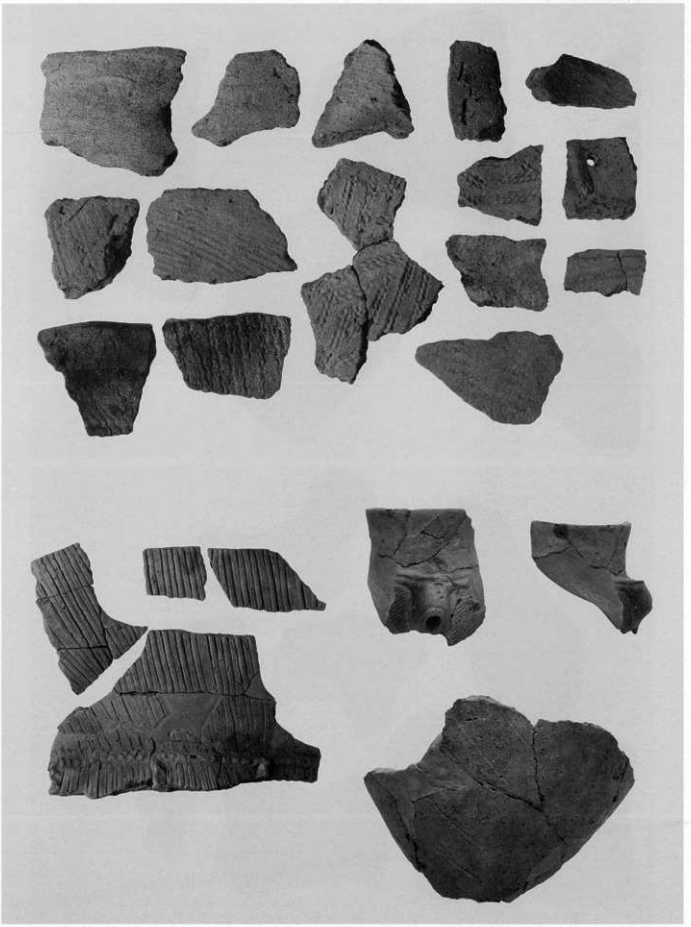
第1地点・出土土器（1）



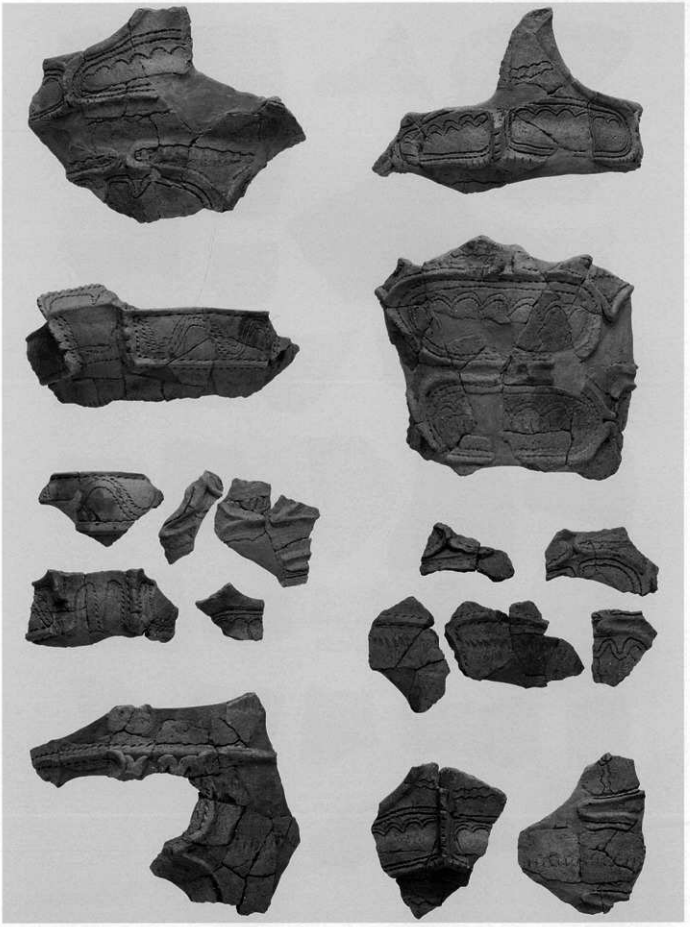
第 1 地点・出土土器（2）



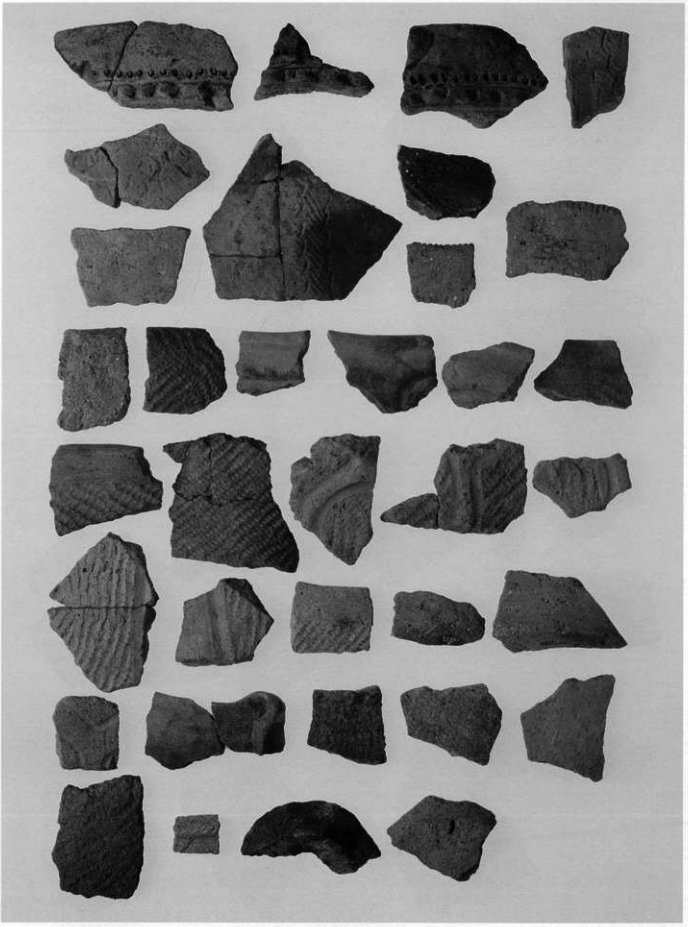
第1地点・出土土器（3）



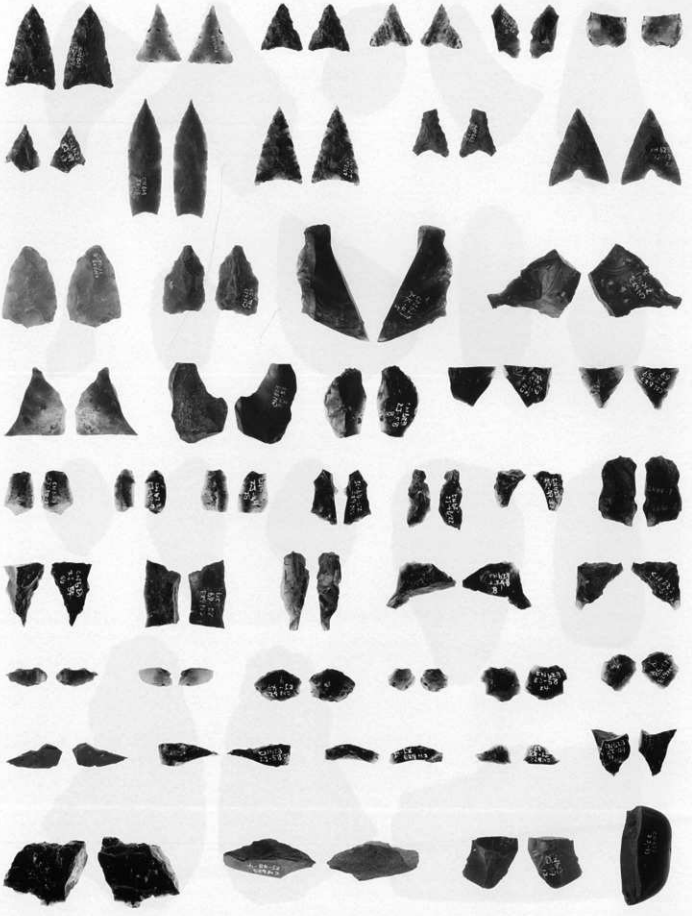
第1地点・出土土器（4）



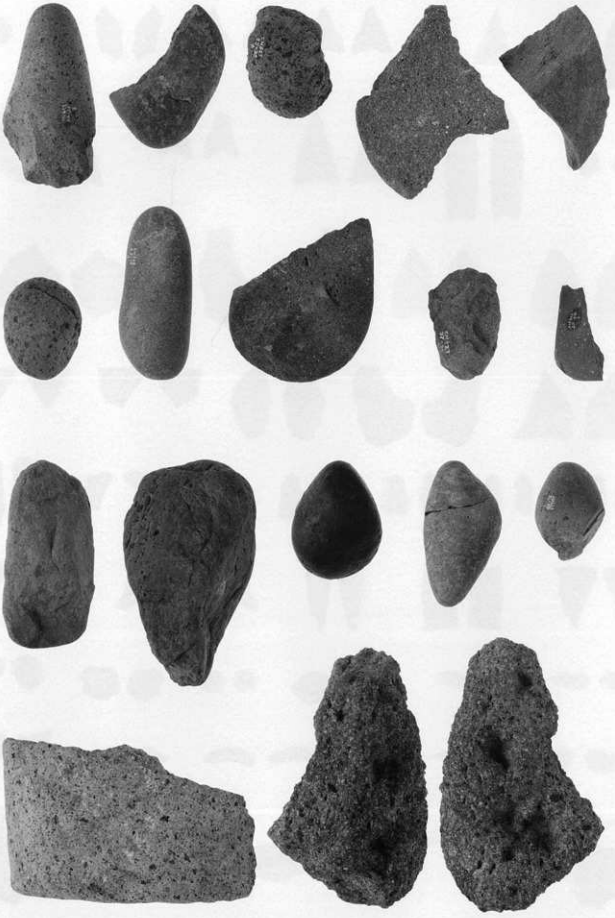
第1地点・出土土器（5）



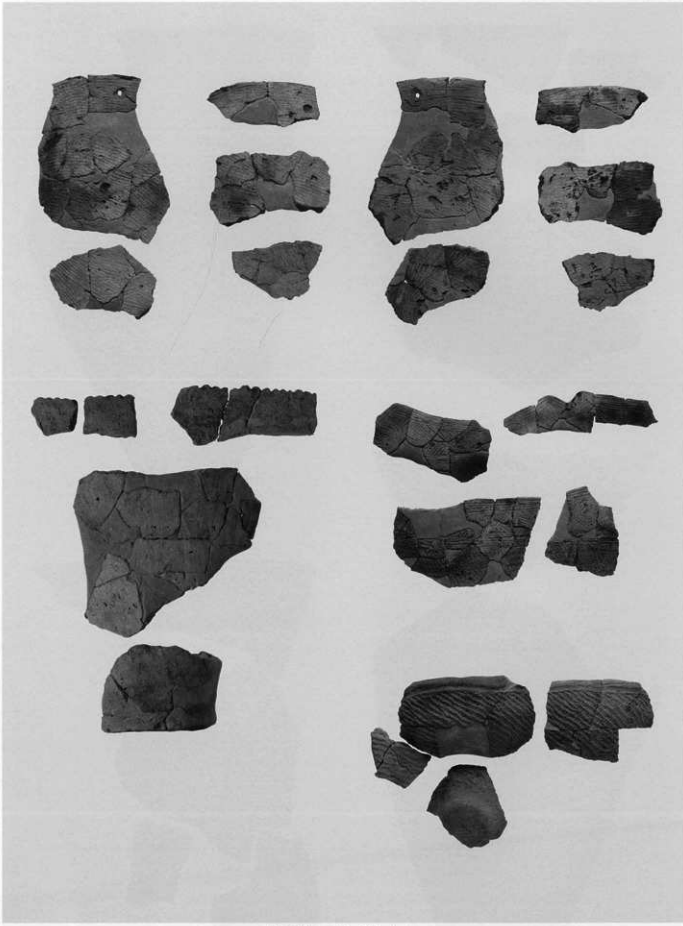
第1地点・出土土器（6）



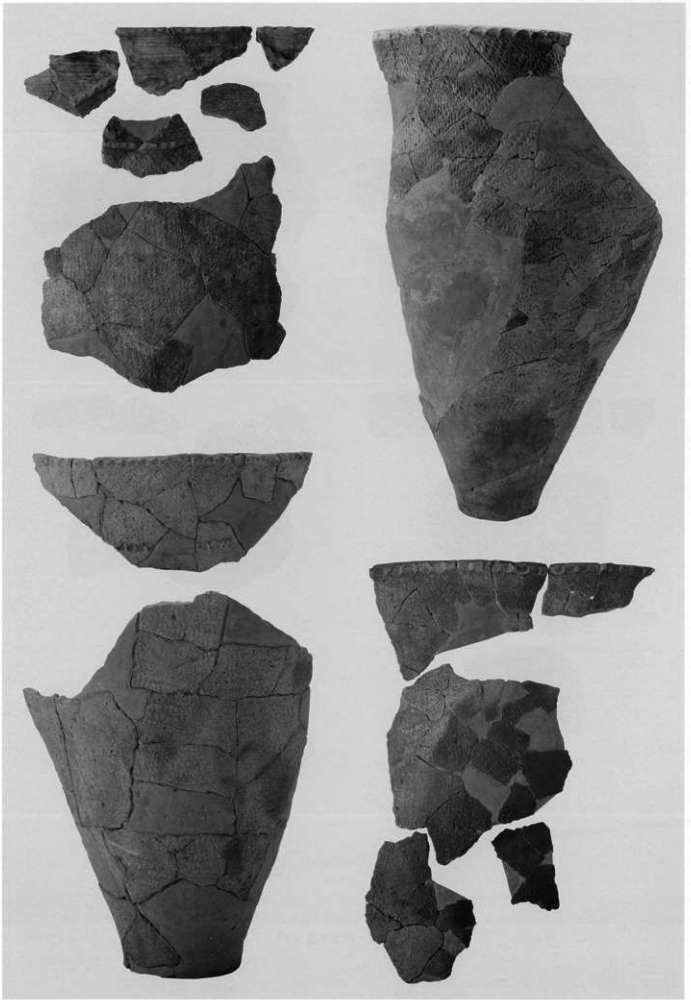
第1地点・出土石器（1）



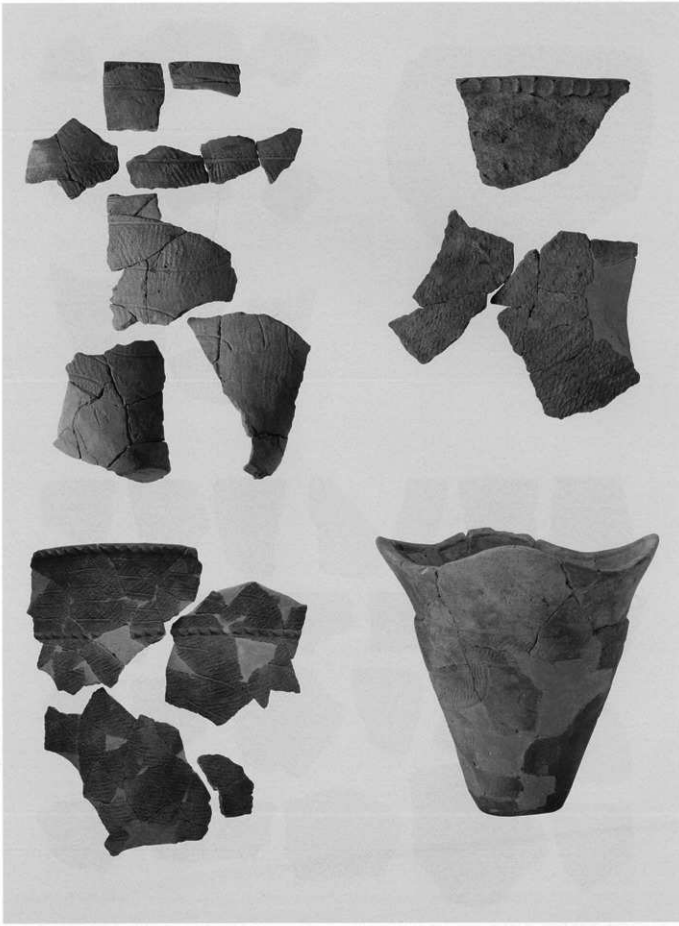
第1地点・出土石器（2）



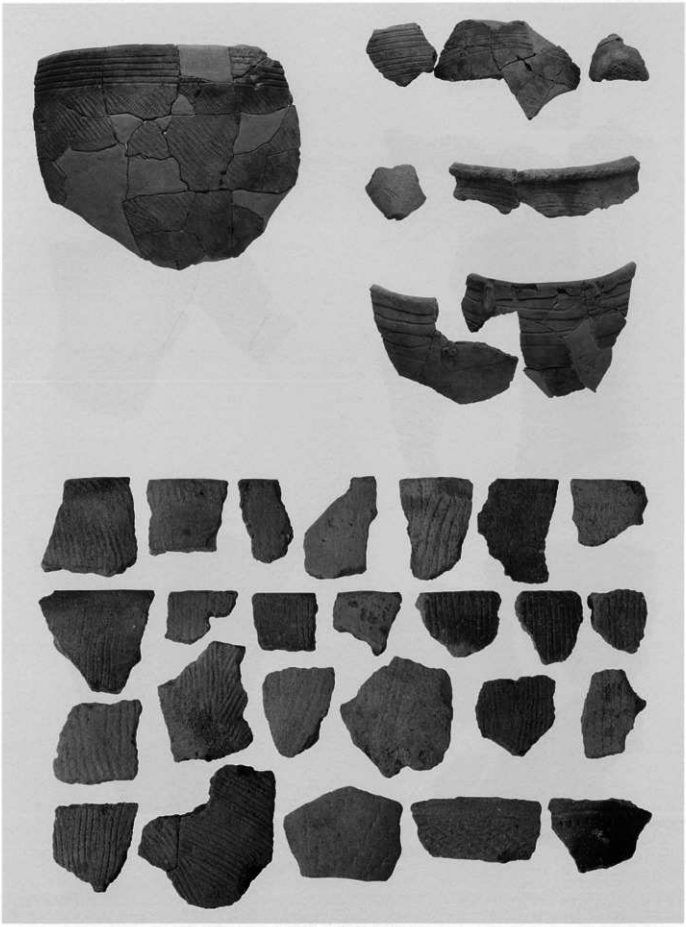
第2地点・出土土器（1）



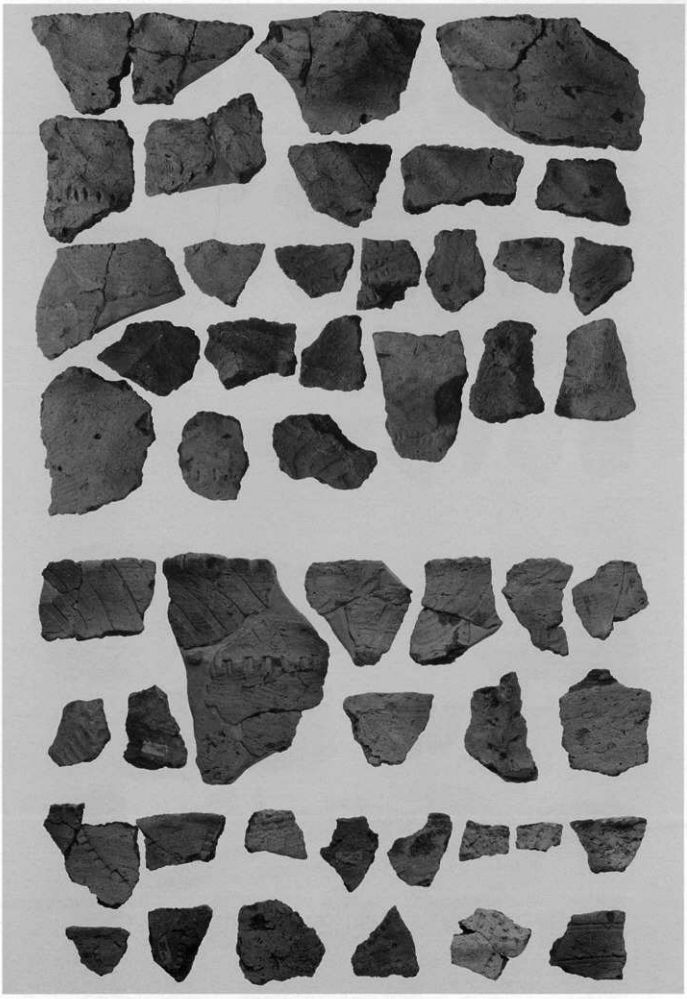
第２地点・出土土器（２）



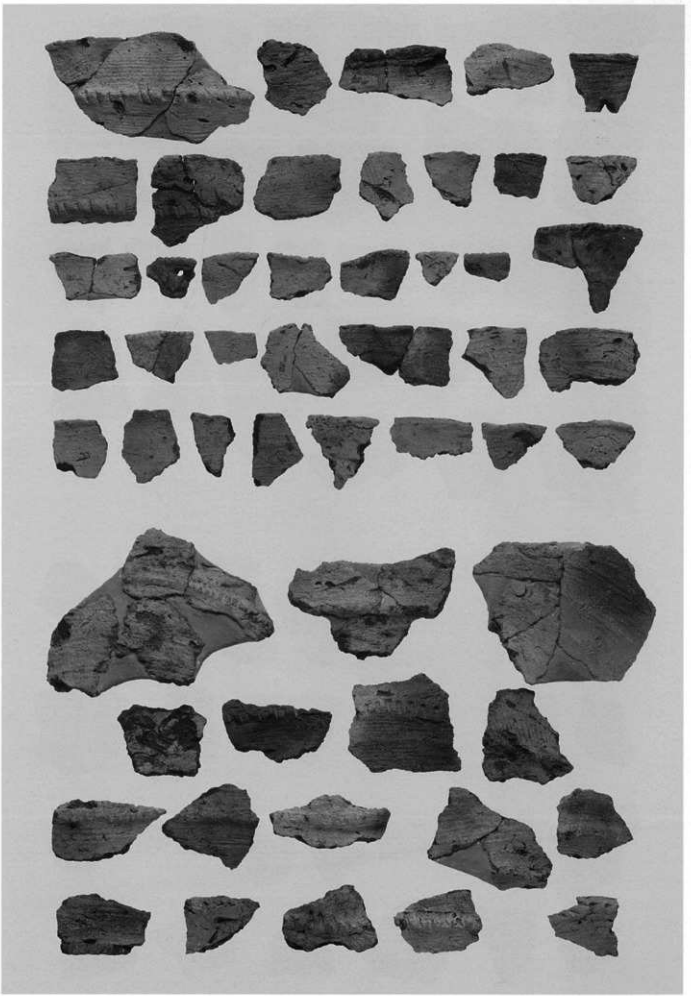
第２地点・出土土器（３）



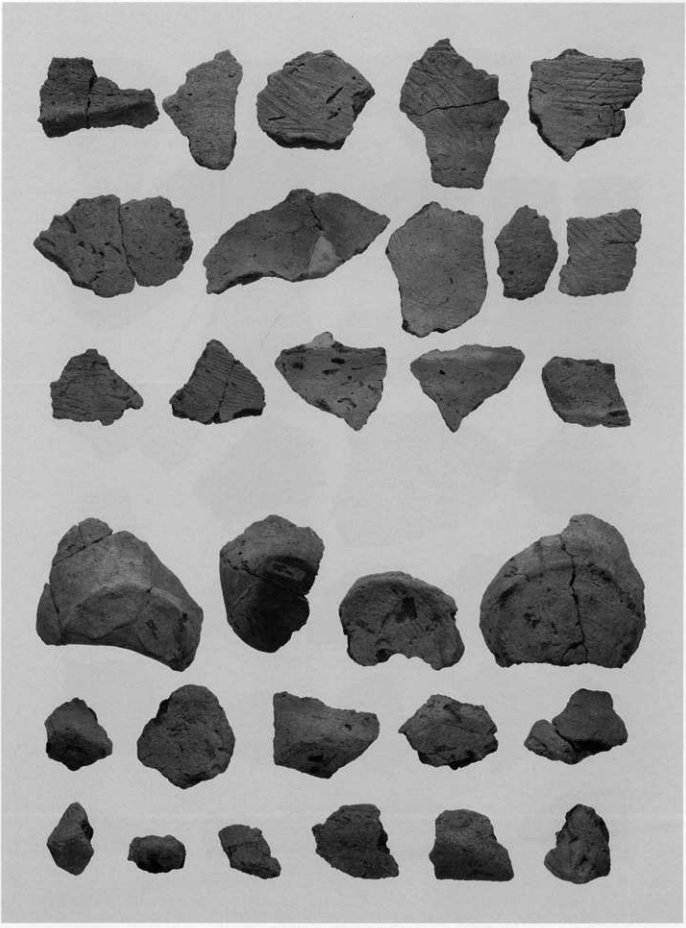
第２地点・出土土器（４）



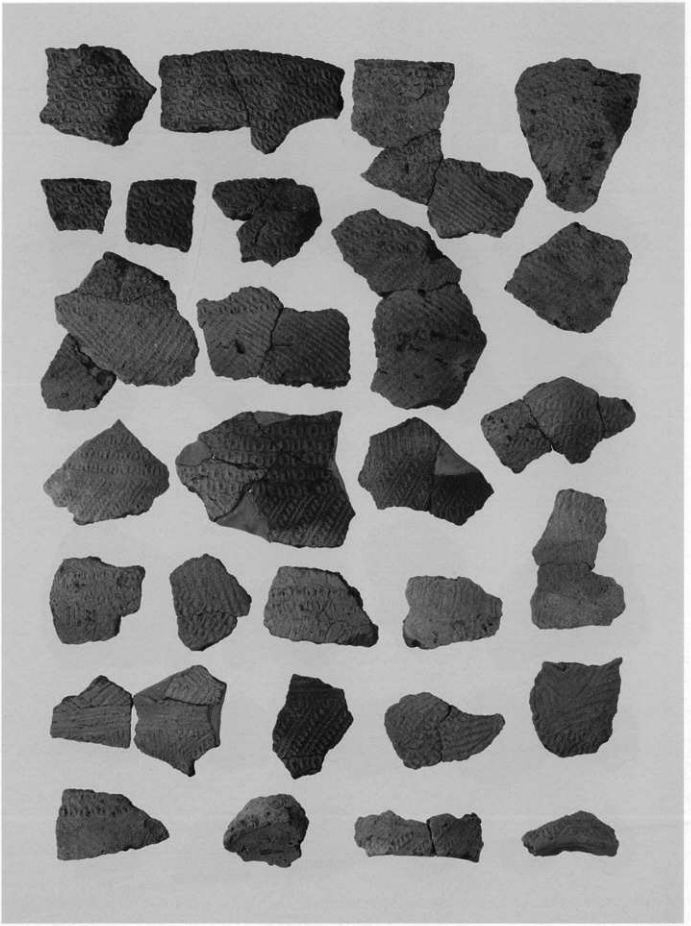
第2地点・出土土器（5）



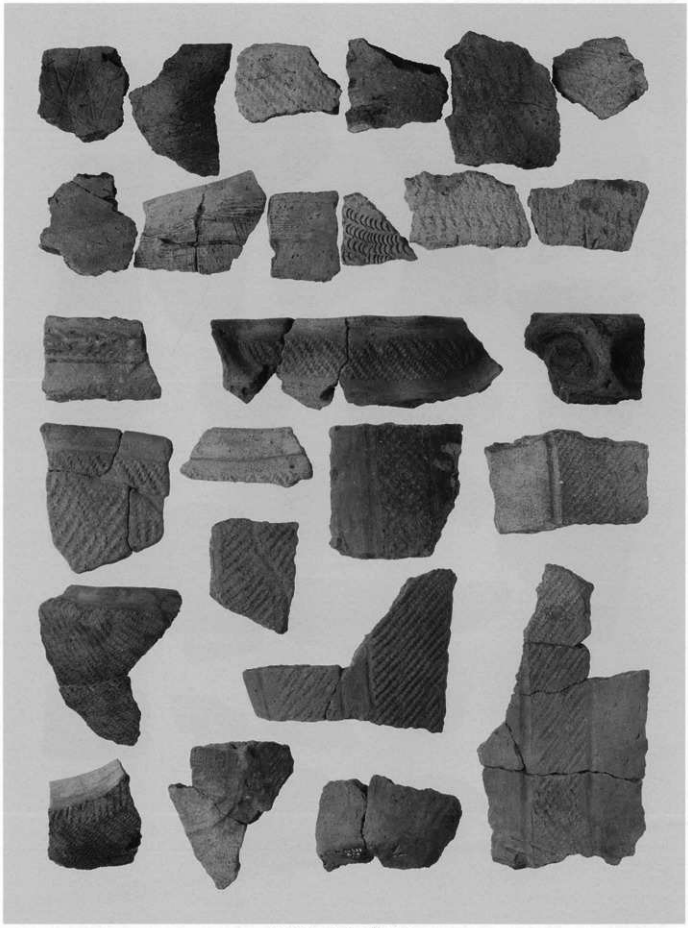
第2地点・出土土器（6）



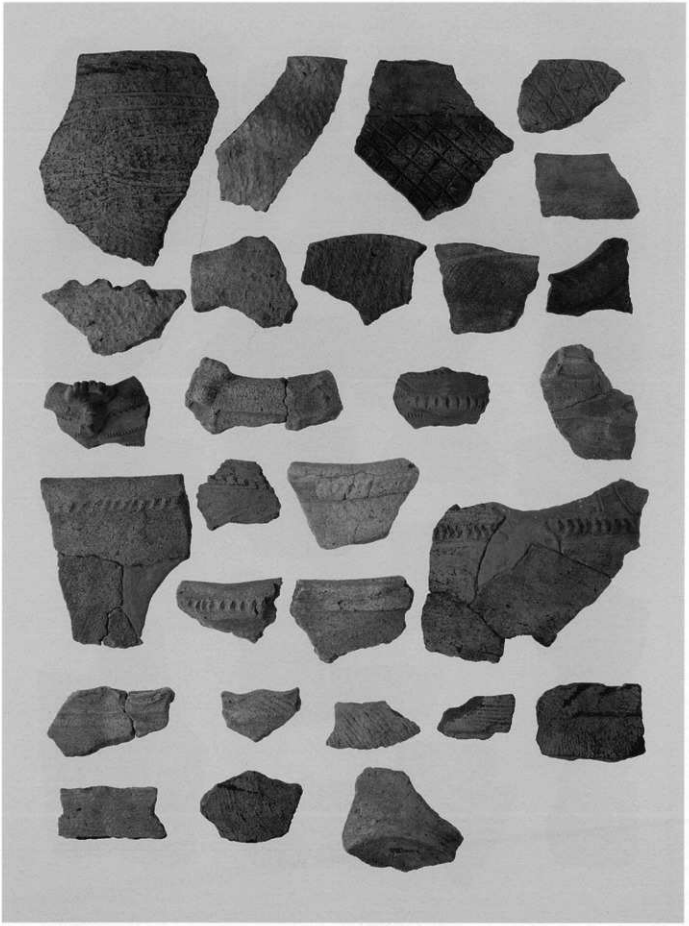
第2地点・出土土器（7）



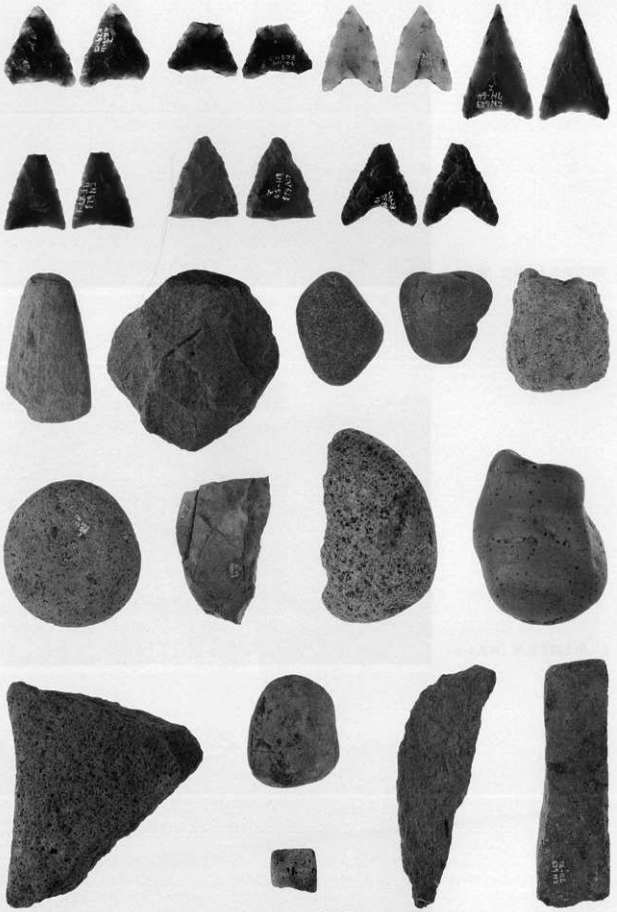
第2地点・出土土器（8）



第2地点・出土土器（9）



第2地点・出土土器（10）



第２地点・出土石器

割野所在野馬土手

1、001号野馬土手近景（南から）

2、同上調査状況（南西から）

3、003号野馬土手調査状況

1、001号野馬土手東端部（北西から）

2、同左盛土断面C－C′（東から）

3、同上盛土断面B－B′（東から）

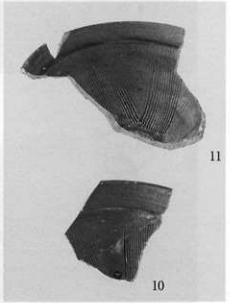
4、同上盛土断面A－A′（東から）

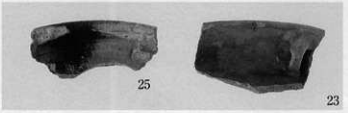
5、同上盛土断面（南から）

6、002号野馬土手盛土断面（東から）

7、003号野馬土手盛土断面A－A′（南から）

8、同左盛土断面B－B′（東から）





野馬土手関連出土遺物

武西近隣遺跡周辺（1：10,000）

調査前風景
（平成20年度）

確認トレンチ
（平成４年度）

土層断面
12C-85（左）・12E-75（右）

石器集中 1

石器集中 2（北）

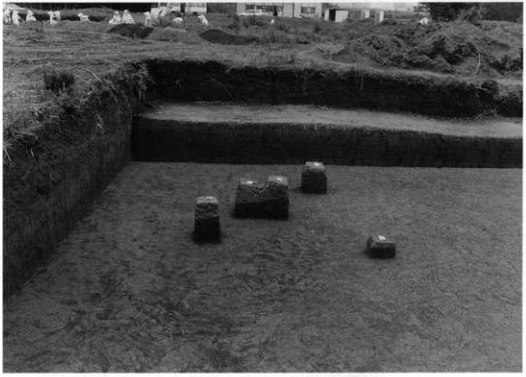
石器集中 2（南）

石器集中 3

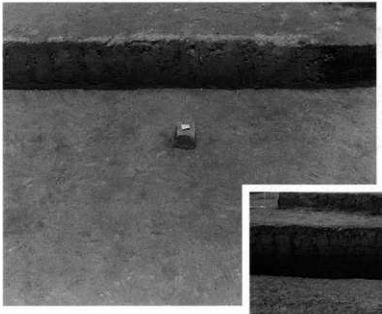
石器集中 4（北）

石器集中 4（南）

石器集中5



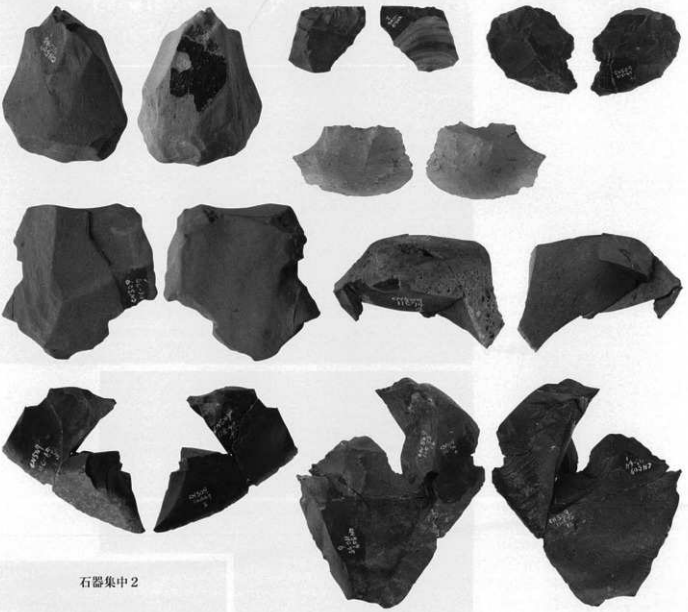
石器集中6



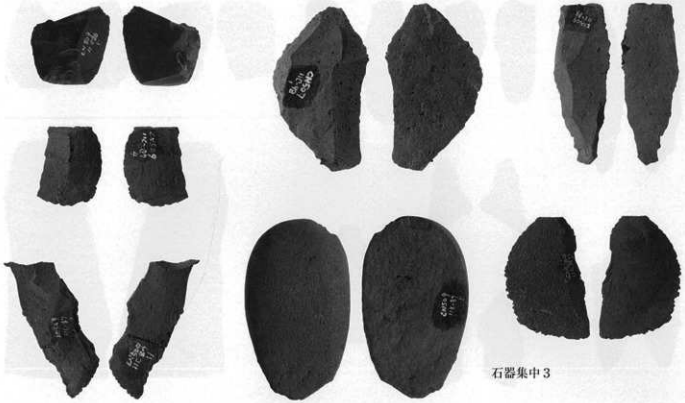
単独出土

12C・60附近
土層断面

石器集中 1



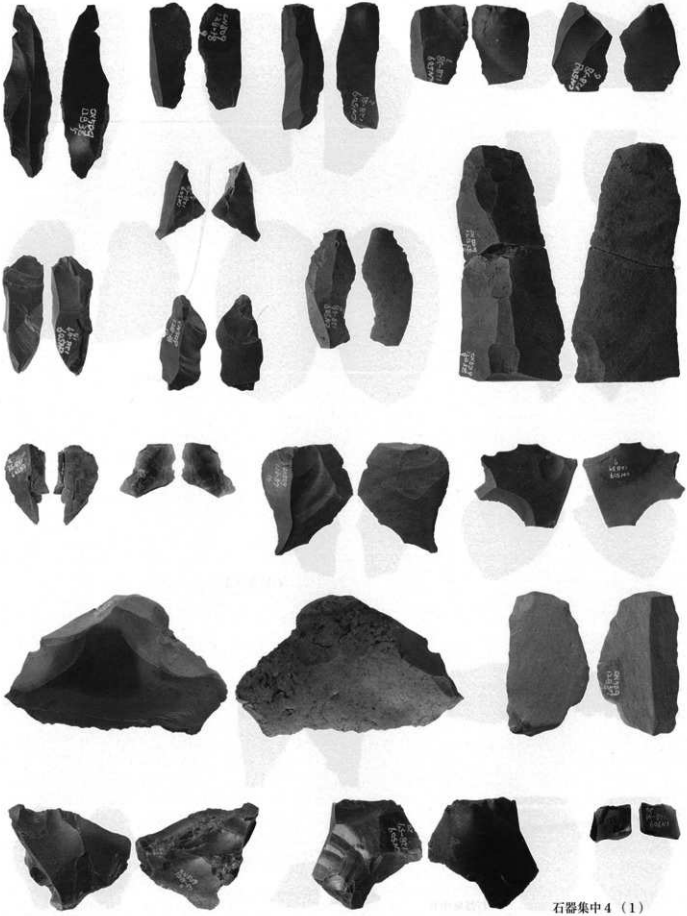
石器集中 2



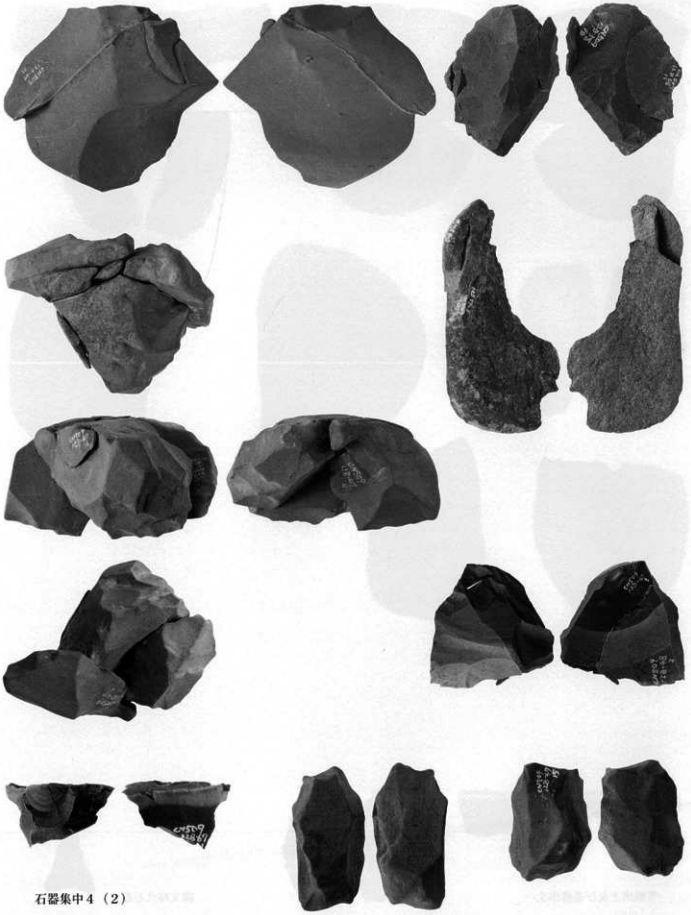
石器集中 3

石器集中 5

石器集中 6



石器集中 4（1）



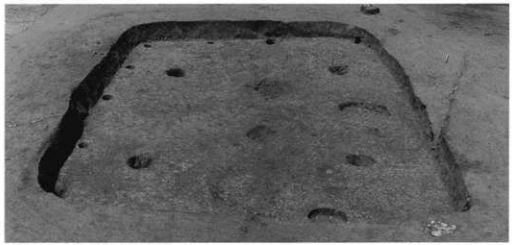
石器集中4（2）

石器集中４（３）

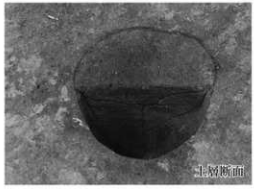
単独出土及び遺構出土

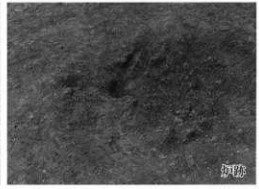
縄文時代石器

009号住居跡



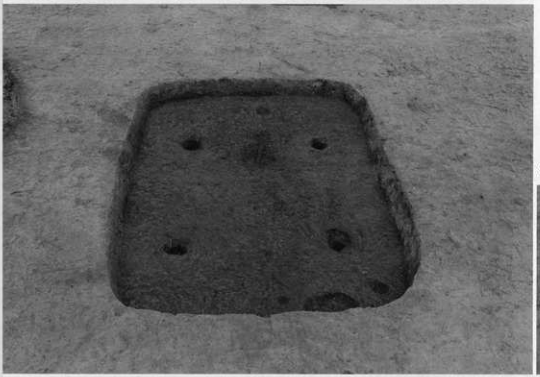
009号住居跡
遺物出土状況



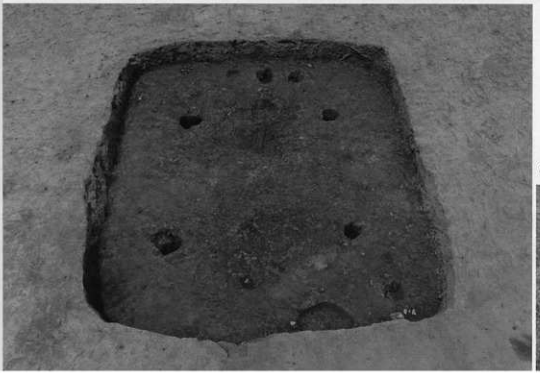


009号住居跡土層断面

本調査区全景
（平成20年度）

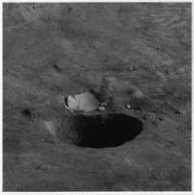


021号住居跡

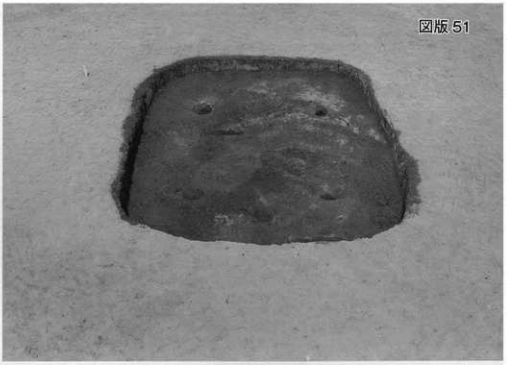


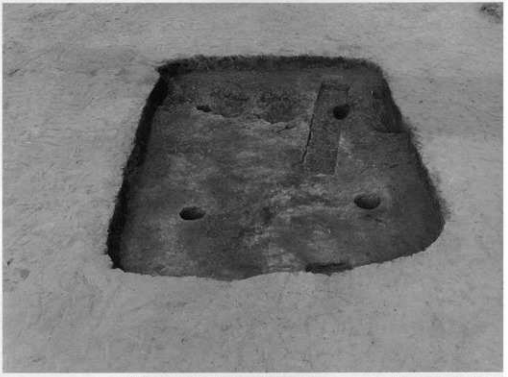
022住居跡

遺物出土状況



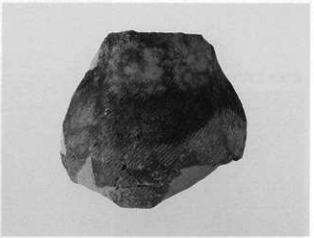
023号住居跡

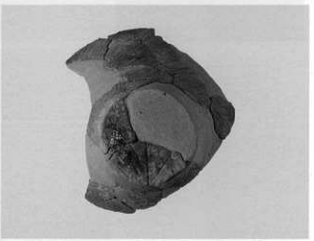




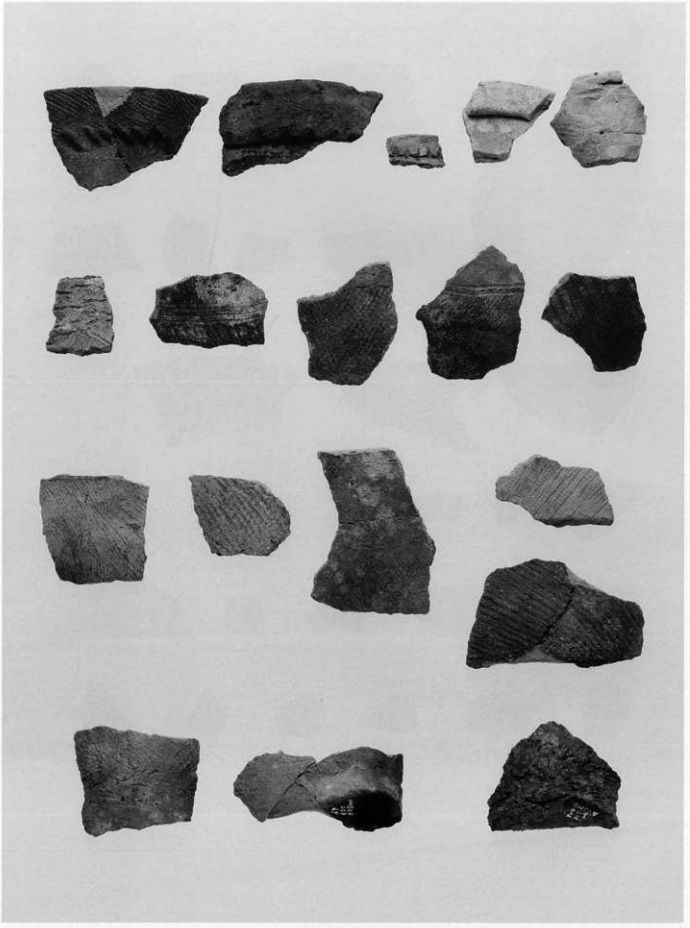
024号住居跡

010号溝

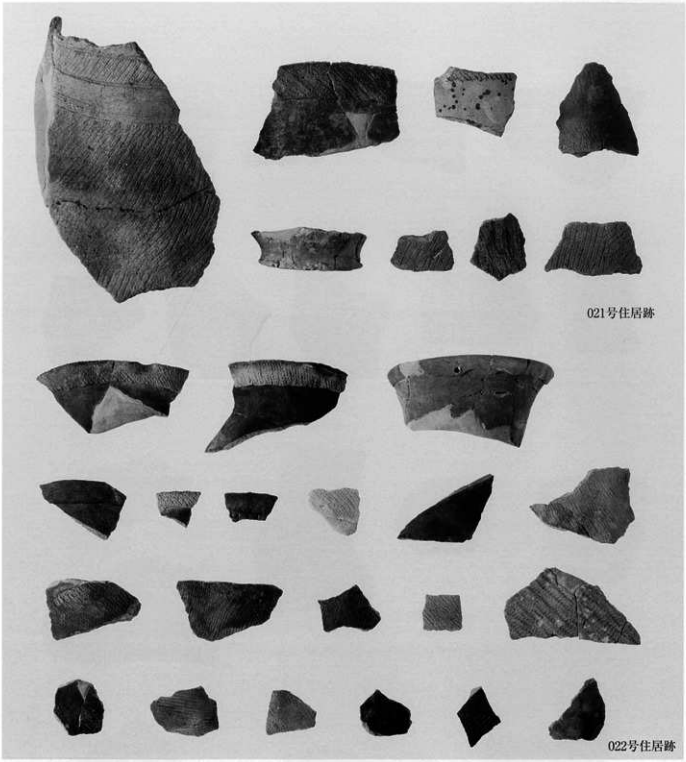




009号住居跡（1）

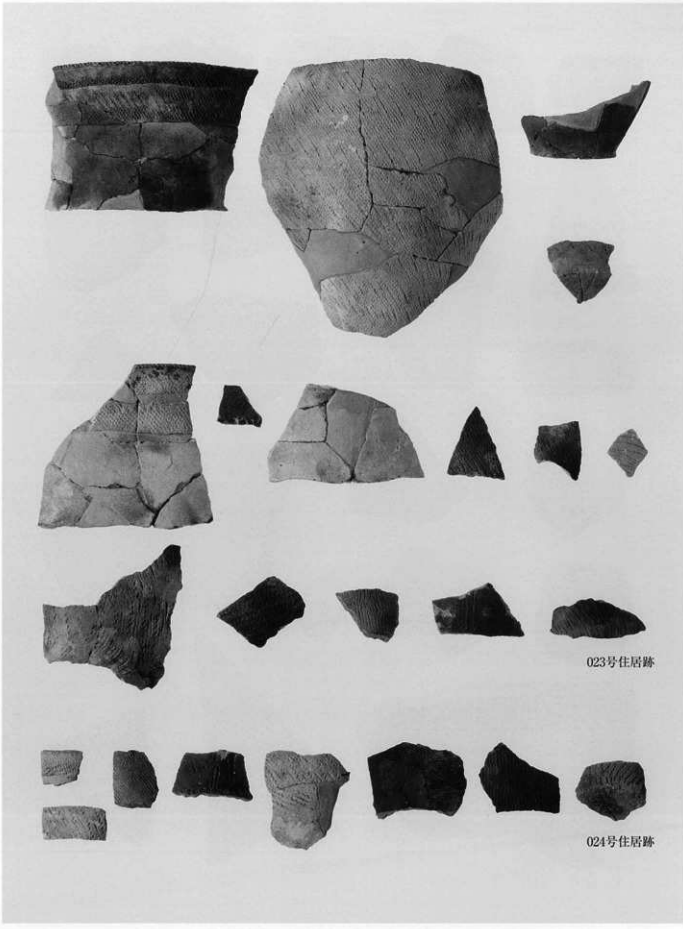


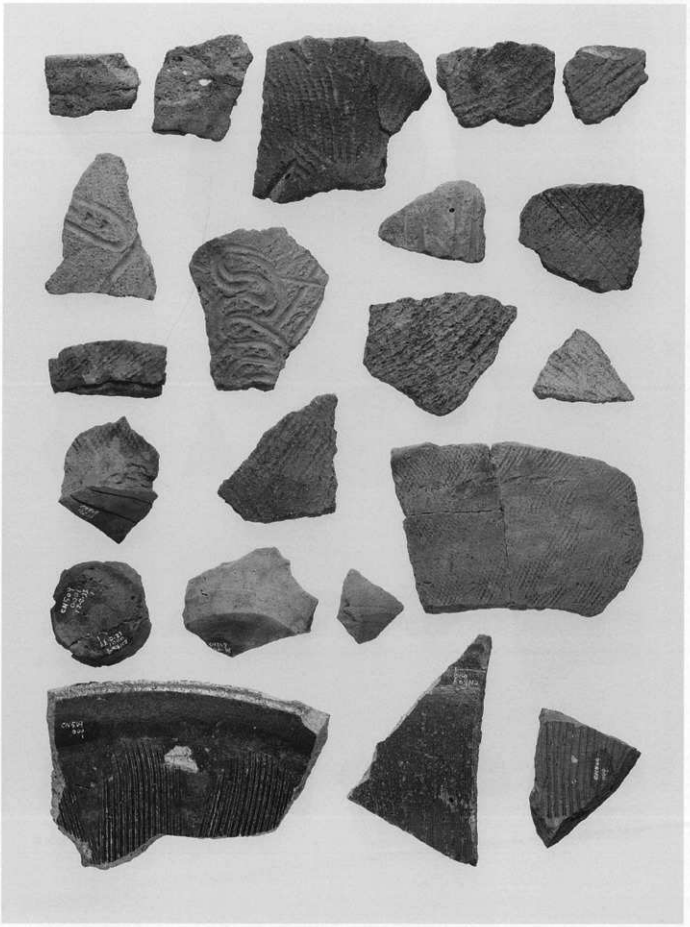
009号住居跡（2）



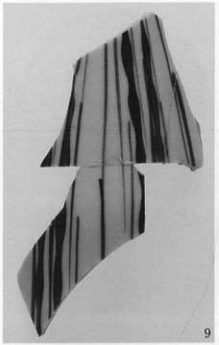
021号住居跡

022号住居跡


023号住居跡
024号住居跡



グリッド出土遺物（縄文土器・弥生土器・土師器・陶器）


9

5

9

3

1

1

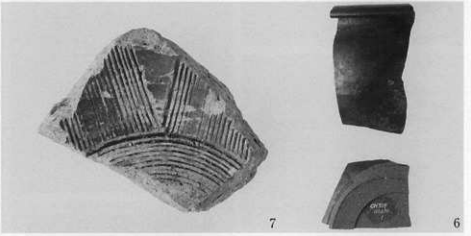
2

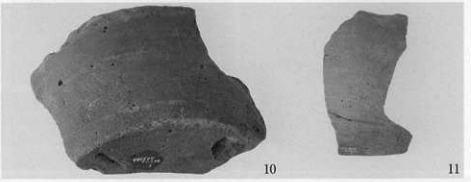
2

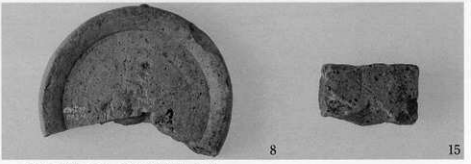
1

2

4


7
6


10
11


8
15

出土磁器（1）・出土陶器類・古銭

出土磁器（2）

武西百庚申塚（北東から）H.4

庚申塔列（近接）

文字塔

刻像塔（青面金剛）

武西百庚申塚　南西から（H.4）

報告書抄録

ふりがな	ちばにゅーたうんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書
副書名	泉北側第１遺跡・大森割野遺跡・割野所在野馬土手・武西近隣遺跡
巻次	22
シリーズ名	財団法人千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第634集
編著者名	高橋博文　香取正彦
編集機関	財団法人　千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2　℡　043-424-4848
発行年月日	西暦2010年3月25日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	経緯度 北緯	経緯度 東経	調査期間	調査面積	調査原因
いずみきたがわざい 泉北側第１ いせき 遺跡	いんざいしいずみあざまえはら 印西市和泉字前原 ばんち 674番地ほか	12231	CN624	35度 49分 14秒	140度 7分 48秒	1997.05.06～ 1997.06.03	3,570㎡	区画整理
おおもりわりのいせき 大森割野遺跡	いんざいしおおもりあざわりの 印西市大森字割野 ばんち 750番地ほか	12231	CN623	35度 48分 57秒	140度 8分 9秒	1996.04.08～ 1996.10.31 1997.04.07～ 1997.08.08 2007.11.01～ 2007.11.30	35,100㎡ 18,950㎡ 1,910㎡	区画整理
わりのしょざいのま 割野所在野馬 どて 土手	いんざいしおおもりあざわりの 印西市大森字割野 ばんち 750番地ほか	12231	CN620	35度 48分 54秒	140度 6分 42秒	1993.01.06～ 1993.02.04	9,000㎡	区画整理
ぶざいさんりんいせき 武西近隣遺跡	いんざいしなざい 印西市武西1295ほか	12231	CN509	35度 47分 35秒	140度 6分 42秒	1992.04.01～ 1992.05.20 1993.06.14～ 1993.09.27 2008.07.01～ 2008.08.29	11,000㎡ 5,900㎡ 8,769㎡	区画整理

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
泉北側第1遺跡	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	石器集中地点 包含層・土坑	削器・彫器 早期撚糸文系土器	
大森割野遺跡	包蔵地	旧石器時代 縄文時代	石器集中地点 土坑・石器製作跡・礫群	ナイフ形石器・削器・彫器 早期～晩期土器群・草創期石鏃・磨製石斧・磨石	石器製作跡は阿玉台期、礫群は早期沈線文に伴う
割野所在野馬土手	包蔵地	近世	野馬土手	近世陶磁器・焙烙	焙烙は野馬土手周辺から出土、牧管理に関係か
武西近隣遺跡	包蔵地	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 中・近世	石器集中地点 陥穴 住居跡 庚申塔列	ナイフ形石器、尖頭器 縄文土器・石鏃 弥生土器 近世陶磁器・銭貨	弥生時代の住居跡がまとまって検出された

要約	大規模区画整理事業に伴う４遺跡の調査。このうち３遺跡は北総台地の北西に位置する手賀沼に注ぐ亀成川水系に属する遺跡群である。泉北側第１遺跡は台地縁辺部の小規模な調査で、旧石器時代の石器出土地点１か所、縄文時代の土坑１基と縄文土器がややまとまって出土している。大森割野遺跡は、旧跡時代の石器出土地点が南北の２地点に分かれて検出。また、縄文土器の包含層も大きく２地点に分かれて早期の土器を中心に晩期までの土器が出土している。割野所在野馬土手は、大森割野遺跡内に所在し、合計４条の野馬土手が確認されているが、南北に延びる野馬土手に接して東西方向へ延びる３条の野馬土手に盛土が確認されている。周辺は徳川幕府の御用牧があり、その関連が注目される。残る武西近隣遺跡は東進し印旛沼に注ぐ神崎川水系に属し、前述の３遺跡とは水系を異にする。周辺の遺跡では検出されていない弥生時代の住居跡を検出し、小規模ながら集落跡の存在をうかがわせている。

千葉県教育振興財団調査報告第634集

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸＸⅡ

－印西市泉北側第１遺跡・大森割野遺跡・割野所在野馬土手・武西近隣遺跡－

平成22年３月25日発行

編　集　財団法人　千葉県教育振興財団
文化財センター

発　行　独立行政法人都市再生機構千葉地域支社
千葉ニュータウン事業本部
千葉県印西市中央南1-501

財団法人　千葉県教育振興財団
千葉県四街道市鹿渡809番地の2

印　刷　株式会社　弘文社
千葉県市川市市川南2丁目7番2号